

自分を古龍と思い込んでる田舎者

横にある電池

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分のことを古龍だと思いついて田舎者の旅のお話。

モンスターハンターのお話ですがあまり狩猟とかありません。

戦闘なんてたぶんないです。

モンスターと仲良くなるパターンでもありません。

自身がモンスターということもないです。思いついてるだけの田舎者です。

MH3GおよびMH4とあるクエストの依頼主となった方々のつもりです

目次

古代衣装を纏って旅立ち	1
田舎から街へ	6
救いの手	18
膨らむお財布	28
新しい道	36
孤高の鬼	46
白い雷光	55
冥帝の光儀	66
不可視の情報	74
星天月地	85
塔に蠢く光	96
驚天轟地	111
美食との遭遇	124
火の国へ	135
炎国の王	146
牙をむく太陽	162
古代衣装を纏ってもう一度	174

## 古代衣装を纏って旅立ち

幼馴染は変だ。

私の幼馴染はすごく変だ。

一緒にいるとすごく恥ずかしいことが多々ある。正直距離を置きたいという気持ちがないことはない。

なのに一緒にいる理由は里長に厄介ごとを押し付けられたからだ。私たちのいた里には2着、古代の衣装がある。ただの古着だけども。

何年も、何百年も経つても綺麗なままの古着である。

そんなある意味里の貴重なお宝。そのお宝を本来の場所に戻してこい、と言いつけられた。

里長が蔵の片づけをしていたら古代文字で書かれた紙が見つかったらしく、解読、というより里長の直感「なんとなく古代衣装を元の場所に戻してほしい、的なことが書いてある気がする」というふわっとした感覚で読み取り、その役目を私と幼馴染のアイツに任命してきただ。

手掛かりもなくそんなこと出来るわけがない、と反対したのだが「この古代衣装を着て各地を巡れ。この衣装について知ってそうなのを探せばよい」

行き当たりばったり過ぎる作戦を言われた。里長の命とはいえ、いい断り方を考えていたら

「ククク……、その任、しかと引き受けよう」

変な幼馴染が引き受けてしまった。

「さあ、準備を急ぐぞ。我が同胞よ」

同胞とか言われた。いや同じ里出身だし同胞つちや同胞だろうけど。イタイ人の同類みたいな扱い受けそうだからやめてほしい。というかひとりで行ってきなよ。

「頼んだぞ。テオル、ナナリ」

私が呆然としている間に、長が話がまとまったと言わんばかりに締めくくった。そしてその話も里全体にあつという間に広まり、あれよ

あれよと里を出ることとなった。

長の命だ、仕方ない。衣装が2着あるから2人。それも仕方ない。けども

「どうした、ナナリ？ 下界を好ましく思わんのはわかるが、高貴なものとして堂々ふるまわんか」

こいつは里に置いていきたい。イタイ。

あきらかに里の恥だよこいつ。青年ともいえる年齢になってなんでそんな言葉出てくるのだろう。

二人で山道を歩きながら、今後のことを考えるとこいつを早いこと矯正した方がよいと判断した。

「テオル……」

「なんだ？」

「ふつつうの話し方してくれない？」

「俺は至って正常に話しているが……。ナナリこそ里を出たのだから威厳のある話し方をしたらどうだ？」

「威厳のあるってどんなよ……」

「以前の話し方だ。まさか、忘れてしまったのか？」

こいつは何を言ってるんだろう。以前ってなんだ。こいつの言う以前ってなんだ。前世か？ 電波というやつかこいつ。

「3年ほど前はよく夜になると……、このナナリと対等にいたいのであれば、相応の威厳を身に着けるのじゃな。と言っていたではないか」

「黙れえ!!」

「ど、どうしたナナリ!?!」

黒歴史だ。闇の歴史だ。あの頃は若気の至りというかあれなんだちよつとおかしかったんだ。厨二病全盛期だったんだやめて言わないで忘れてつていうかそうかこいつあれだ厨二病だ、もう青年と言われるような年齢で厨二病だつていうかあれか私の黒歴史を知ってるから私のことを同胞つて言つてたのかくたばれくそつたれ。

うん、あれだ。そうだよ、そうだよ。厨二病のころ年寄りめいた口調で喋つてたよ。自分のこと「わし」とか言つちやつて語尾は「く

じゃ」とかつけちやつてたさ。

もちろん今はそんなことはない。だから本当忘れてくれませんかでしょうか。

「私はもう普通に生きるって決めてるから！ 人の黒歴史を掘り起こさないで!!」

「何を……。そうか、黒歴史……。たしかに我らの力は闇に隠したほうがよいか。下界で騒がれるのも面倒だ」

「あーもうそれでいいよ。下界で騒がれるのは厄介でしょ？ 私みたいに普通の口調になる?」

「だが下等なやつらと立場を同じにするなど……」

「あんた今日の夕飯の具キノコだけにするわよ?」

「やめろ!! やめるんだ!!!」

「いやなら普通にしなさい」

「だが俺の普通はこの口調であって……」

「昔は素直だったのになー……。ナナリナナリ！ ボク、お母さんに今日褒められた！ とか言っちゃつて」

「黙れえ!!!」

あの頃は普通の子だったのになー。ご飯を作るのを手伝って褒められたーとか嬉しそうに言ってたのになー。

「テオル、声が大きいの。静かにしてよね」

「お前が！ お前がああ!!」

「本当にキノコのみにするわよ?」

「くっ……」

普段里の人が使っている道だから、滅多にモンスターは出ないとは思うけどうるさくし過ぎるのはよくない。早いところふもとの村に着いてゆつくりしたい。

そしてこの古代服を関係者に押し付けたい。いるのかわからないけど。

このご時世に二人旅つてどうかしている。私もテオルも戦う力はないに等しいのだから。

まあ、里のみんなもモンスターと戦う力がないからこそ、テオルが

今回の任に選ばれたのだろう。私はそのついで。

キノコは……、キノコだけは……。とぶつぶつ呟いているテオルを横目に見る。こんなのも案外頼りになるのだ。戦う力はない。ないが、知識はあるのだテオルは。ハンターに憧れてたのか、よく行商人にハンターやモンスター関連の本を頼んでいた。一時期は引きこもって夢中で本を読んだほどだ。

思えばそれまでは普通だった気がする……。外の知識でこんなものになってしまったのか……。

「ナナリ、ため息なんてついてどうした？」

「なんでもないわ……」

「そうか」

気づかぬうちにため息が出てしまったようだ。いけない、幸せが逃げぬ。

「下界への不安はあるだろうが、楽しみでもあるぞ俺は」

「はあ？ なに突然」

「不安からため息をついたんだろう？」

いやあんたのことを考えて、ため息をついたんです。

「あー、もうそれでいいわ」

「ナナリも楽しんだらいいではないか」

「そりゃあいろんな土地を見れるのは楽しみだけだし……、危険が多すぎる……」

「竜どもか。何、俺とお前がいればとるに足らん相手だ」

「はいはい」

竜にとって、私たちがとるに足らん相手ですなよくわかります。

「だが下界にはハンターという、竜どもに対抗する者がいるそうだ。そいつらの力を見るのも悪くはない。むしろそれこそが一番の楽しみだ」

回りくどいなあこいつ。要するにハンターを雇おうってことだろう。里を出るときに渡されたお金で足りるのだろうか。無理な気がする。10万Zだ二人合わせて手持ち。普通に旅する分には十分すぎるが、ハンターを雇うとなると厳しいんじゃないだろうかこれ。

ハンターについてはテオルのほうが詳しいだろうし、その辺はテオルに任せよう。

「ハンターを雇ったりは任せるわー。でもどれくらいの旅になるかは全然わからないんだから節約はしてよ?」

「今だけでなく、未来を見据えるとはさすが同胞よ」

村の宿にいたら食事はキノコスープにしよう。

この幼馴染に再度ため息をつきながら、村の灯りへ歩く。

再度思ってしまう。

なんでこんな幼馴染と一緒にいなきやいけないんだろう。

「それにしても、テオルの自信ってどこからきてんの?」

「うん? 己のことを理解してから自然とついたぞ?」

「はあ?」

「俺もかつては自身の力を、本来の力を忘れていた。だがある書物に俺の同族のことが書いてあつてな」

「あーはいはい、すごいねー」

「俺は本来は古龍なのだ。テオ・テスカトル、と呼ばれている、な」

「うわあ……」

「ナナリ。君もその書物に書いてあつた」

「え、やめてよ巻き込まないでよ」

「君もまた古龍、ナナ・テスカトリだ」

「うっわあ……」

「つまり俺はテオ・テスカトルの化身。君はナナ・テスカトリの化身だ  
!」

「痛々しいから他の人がいるときは絶対そういうの言わないでね?」

「ふんっ、俺とてわきまえている。面倒ごととはごめんだからな」

なんでこんなのと一緒にいなきやいけないんだろう。



## 田舎から街へ

私たちの旅の目的。古代衣装を縁のある土地に返す、だ。

まあそれがどこかわからないから、古代についての知識ある人を探  
す。

そのためにもまずは行先は、古代文明を研究している場所か、人が  
多いところだ。

田舎者には古代文明研究所ってどこかさっぱりなんだ。研究所？  
解説所？ というかそもそもそういうものあるの？ あるよね？

とりあえず大きめの街を目指す。そんなわけで今、ガーグアの引く  
荷車に同乗させてもらっている。

「本当にありがとうございませす。街までの道のりもわからずどうした  
ものかと思っついていて」

「いや、いいってことよ。その分の代金もらっちゃったしな」  
「ナナリ、気にすることはない。むしろ代金まで渡したのだ。上の立  
場の者として振る舞わなくては」

「黙ってろ」

最初は無料で乗せてくれると言ってくれたのだが、申し訳ないので  
代金を渡したのだ。100z。

乗せてもらう代金ではあるが、このバカがかけるであろう迷惑料も  
入れてるつもりだ。安すぎる？ 節約だ。

「ははっ、面白い兄ちゃんじゃないか。身分の高いお方なのかい」  
「あはは……、ちよっと思ひ込みが激しい奴なんです。ただの田舎者  
です」

「……、まあそういうことにおこう」

そういうことにおこう、じゃないよ。そういうことなんだよ。  
事実田舎者なんだよ私ら。

「姉ちゃんもいろいろと大変そうだねえ」  
「早くこの服の手がかりがわかれば楽になるんですけどねえ……」

「真面目だねえ。古代の服ならこっそり売ればいい金額になると思う  
よ」

「さすがにそれはできませんよ。里長にバレたら帰れなくなりそうですし」

いくらふわつとした任とはいえ、任されたからにはやり遂げたい。それにおそらくだが、服を収めた土地を聞いてくる気がする。その時もし売り払っていたらごまかしようがない。そのためにもやり遂げるのだ。

「まあ大きな街なら人も多いし、なんかしら手掛かりはあるさきつと」  
「ありがとうございます」

「とりあえずハンターズギルドに行ってみたらいいと思うよ」

「ハンターズギルド、ですか」

「うん？ うん、ハンターズギルド。情報がいろいろ集まってそうだしね。それにもし人里離れた場所にいく場合や、危険な道に行く場合の護衛を探すのにもいいしね」

なるほど。すごい助かる情報だ。とりあえず大きな街へ、とまでしか考えてなかったから助かる。テオルにもこの方針でいくよう伝えよう。

「テオル、街についたらハンターズギルドに行こうね」

「聞こえてたわ。隣にいるのだから聞こえてたわ。ハンターズギルドだな」

静かだったから聞いてないかと思ってたよ。普段からそれくらい静かにいてくれればいいんだけど。

「そこで色々情報を集めるのと、あとは……、そこで考えよっか」

「集まる情報次第だな」

ひとまずの方針を固めたところで景色を眺める。

人用に舗装された道は里付近の道とは違って新鮮だ。ますます田舎者感が出てしまう。あの道はもはや獣道だわここと比べたら。

「見晴らしのいい道ですね」

「ん？ そうだねえ。隠れる場所がないからねえ」

「いざつてときに危険なんじゃないですか？」

「そのいざつてときが早々ないからねえ」

危機感の差かこれは。田舎者と都会者の差か。

「隠れる場所がないから小型のやつらが来ないのだろう。小型がいな  
いならそれを餌にする竜どもも来ない」

「そうそう。大型が通るとしてもよっぽど腹を空かせてないと襲って  
はこないよ。こんな場所じゃ縄張りにしようとも思わないみたいだ  
しね」

テオルのほうが外に詳しいとか結構衝撃だ。田舎と都会の差に驚  
いてるのは私だけとは。

「へ、へえ……、で、でも万が一とかあるんじゃないですか？」

このまま引きさがれるものか。謎の張り合いで危険性を言ってみ  
る。

「そりゃあ絶対はないからねえ。危なそうな場合はギルドからハン  
ターが派遣されるか、護衛を雇うよう推奨されるから街でも村でも何  
かしら言われるよ。だから今回は大丈夫だよきつと」

「な、なるほど」

ぎるどからハンター。ぎるどってなんだと思ったらハンターの集  
団みたいな感じか。ハンターって誰でもなれると思ってたけどそう  
いう集落に住まないとなれないのかな。テオルの夢がまたひとつ閉  
ざされたか。

本でそういう知識を知って、夢が叶わないことに絶望して今の性格  
になったのだろうか。

疑いと生暖かい目線を向けると、なんでか呆れた表情でこちらを見  
ていた。

「何さ」

「いや……、なんでもない」

私の田舎者丸出しの姿が滑稽に見えたのかこいつ。

軽く睨んでみたが微妙な表情のままだった。

数時間後、ゴードンと呼ばれる街に到着した。

ゴードンの広場で、ここまで乗せてくれたおじさんにお礼を改めて

述べる。

「ありがとうございます」

「いいってことよ。旅がんばってな」

「ほら、テオルもちゃんとお礼する」

「……、感謝しよう」

素直にお礼も言えんのかこいつ。

同い年のはずなのになんでこの幼馴染の世話をしないといけないんだ。

「はは、仲良いな二人とも。それじゃあ元気でなー」

「仲がいいんでしようかねえ……。あらためてありがとうございます……」

さてさて、何したらいいんだっけ。

人がいつぱいでまず何をしたものか。

「どうしたんだナナリ」

「いや……、何したらいいんだっけ」

「ハンターズギルドへまずは情報集めに行くのだろうか？」

「ああ！ そうだったそうだった！」

いろんな人がいて目移りしてただけだよ。ちよつとだけ忘れてただけだよ。

すごいゴテゴテした服の人もいればスラツとした人もいて新鮮なんだよ。

でもこれが街、かあ。都会かあ。

「ナナリ、行くんじゃないのか」

「あ、うん。行く行く。ハンターズぎるとだね」

「……」

しかしハンターズぎるとはどこにあるんだろう。情報が集まる場所らしいし大きな建物だよ。しかしこの街……、広い……！

どれも大きいじゃないか。やばい。これ以上テオルの前で田舎者感を出すわけにはいかない。だから失敗は許されない。なんだか悔しいから。

「……、ハンターズギルドの場所を尋ねてくる」

「え？ あ、待って待って。私が聞いてくる！」

「ナナリは下界の知識があまりないだろう……？」

まだ下界とか言ってるのかこいつ。

それよりそうだね。わからないなら聞けばいいよね。ちよつと頭硬くなりすぎたよ。そしてテオルには任せられないよ。一緒にいるのがすごく恥ずかしくなる口調で、誰かに話しかけるだろうから絶対任せられないよ。

「テオルはそもそも常識が怪しいから任せられないの」

「……、ナナリもたいがいだが」

都会の知識がないだけだし……。

「まあ任せなさいって。だから喋っちゃダメだからね？」

「……、まあ仕方ない」

早速通りすがりの誰かに声をかけ……、いや忙しいかもだし、座ってる人に……、いや誰かを待ってるかも、もしくは集中していて邪魔しちや悪いかも……。

誰に話しかけたらいいんだろう。

いや！ 行動あるのみだ私！ このまま迷ったらテオルが訳のわからない暴走をするかもしれない！ その座ってる人に聞くのだ！ まずは、お時間とらせてしまいますが申し訳ありません。聞きたいことがあるのですが、だ!!

「すみません!!」

「ひあつ!? は、はい！」

気合いの入り過ぎたのか大声になってしまった。

本当にしまった。相手の人が驚いてしまっている。あと周囲の人もちちらに注目してる。恥ずかしいが引き下がるわけにはいかない。ここで引き下がったら完璧変な田舎者だ。

「少し尋ねたいことがあるのですが！」

「は、はい！ なんででしょう！」

勢いのまま尋ねる。今更小声になるのもなんだか恥ずかしいのだ。うん、暴走してるね私。

「ハンターすぎるどっていう場所はどこですか！」

「ハンターズギルド? ……、ああ、ハンターズギルドですね! えと、この広場を北に抜けて、大通りをまっすぐいった先の大きな建物ですよ」

「ありがとうございます!」

案外あっさり情報を手に入れた。なぜだか周囲の人がクスクス笑ってる。なんだろう、道を探ねる人が珍しかったのだろうか。大きな街なんだし観光客くらいいるでしょ。道を探ねるなんて普通によくあることじゃないの。

「テオル、ハンターズギルドの方角わかったよ」

「……、ハンターズギルドな」

「うん、ハンターズギルドだよ?」

「……、早く行くか」

そう言つてやや早歩き気味にテオルは歩き出した。下界にいる時間は短いほうがいいとか考えてるんだろうか。この幼馴染はやっぱり恥ずかしいやつだ。

足早に移動するテオルに慌ててついていく。早いところ、その恥ずかしい厨二病が完治してくれないだろうか。初めての土地をゆっくり堪能したいのに。

なお、広場を抜けてちよつとしてから歩く速さは落ちた。疲れたんだろうか。

「この建物がハンターズギルドだね」

「ハンターズギルドだな……、わざとだよな?」

ひととき大きな建物の前で見上げながらつぶやいた。テオルもそれに続いた。

「何が? ……ここであつてるでしょ」

「……、いやいい」

よくわからないやつだ。まあいいや。中に入っているいろいろ情報集

めをしなくてはなのだ。テオルにかまってる暇なんてあるだろうか。いや、きつとない。

いざ、中へ突撃だ。

「お邪魔しますー！」

テオルは無言である。よその家に入るのに無言とは何様かこいつ。古龍さま気取りだったか。だけど一緒にいる私が恥ずかしいのだ。距離をとっても同じような古代衣装のせいで関係者にしか見えないのだ。

なのでテオルの行動には注意をしておく。

「テオル、ちゃんと挨拶くらいしてよ」

「いや、ナナリ。あのな……」

「人の家に入るんだからちゃんとそれくらいしてよ。いい歳なんだから」

「ナナリ、恥ずかしいからちよつと」

「恥ずかしいのはこつちだから。ほら、挨拶」

弟とかいたらこんな感じだろうか。もう年下のようにつつい扱ってしまう。

「ナナリ……」

「あ、あの。何か御用でしょうか」

「あ、はい。すみませんこいつ礼儀知らずで」

入口で固まってたら女の人に来てくれた。ハンターズぎるどはハンターたちを派遣するような場所。つまりこの女の人もハンターなのだろう。

とても戦えるようには見えない。が、実際はモンスターと戦う力を持つ人なのだ。なおさら無礼なこととはできない。

「テオル、ちゃんと挨拶しなさいほんと！」

「ナナリ！ だからあのな！」

「あ、あの……」

なんでこうまで頑ななんだテオルは！ この女の人が怒ったら私たちやばいんだよ!? 頼るあてもなくなるし、最悪この場で攻撃なんてされては……、ひいひい。

「こ、こんにちは……」

「はい……、こんにちは」

「本当にすみません、テオルにはよく言い聞かせておきますんで……」  
「そ、それでどういったご用件でしょうか！」

ああ、しまった。テオルへの教育指導に意識がいつてしまったけど、そうだ。情報集めだ。

「あ、少しお聞きしたいことがあるんです」

「はい」

なんて言えばいいんだ。古代文明について？ 古代衣装に詳しい人知りませんか？ 里長に言いつけられて古代衣装の出自を探しますか？ なんだ、どれだ。

「この服どう思いますか」

「え……、こ、個性的でいいと思いますよっ」

何聞いてるんだろう私。すっごい恥ずかしい。

「あ、いやそうじゃなくて、この服が」

「古代文明について詳しい者を知らないか尋ねたい」

「古代文明、ですか」

「ああ、もしくは古代文明にゆかりのある土地について、でもいい」  
なんてことだろう。

テオルと女の人が私を抜きに会話している。結構すんなりと会話している。

言葉遣いがなんだか偉そうだが横から入るのも……、ぬう……。

「えっと、人探し、でしょうか？」

「ああ、依頼ではない。この辺りではここが一番情報が集まりやすそうだったからな」

「少々お待ちください」

女の人はどこかへ行ってしまった。探してくれるのだろうか。

それはそうと今のうちにテオルだ。

「ちよっと」

「なんだ」

「もうちよっとこう、態度とかどうにかならないの？ あと依頼では



ないってどういうこと?」

「充分おとなしいだろう。依頼ではない、はそのままの意味だ」

「そのままって?」

「この施設は本来ハンターどもが関係することが基本だ。竜どもの狩猟やその調査などな。それらとは全く異なる今回の要件なのだ。だから依頼ではない」

なるほど。人探しはここでは本来やってませんってことだろうか。

ダメじゃん。

「ダメじゃん」

思ってることそのまま出ちゃった。

「だからこの人間の善意、とやりに期待するしかないな。古代文明もこのことは完全に無関係、というわけでもないだろうから可能性は高いがな」

「へえ〜」

やっぱり里の外のことについてはテオルのほうが詳しくそうだ。本の虫だったのは伊達ではない。けど常識がなあ……。

敬語とかが使えたら文句ないんだけど。まあ、さっきの会話は普段と比べたら、だいぶマシと言えばマシだったし、ちよつとずつでもいから真人間にさせよう。きつとそのために私がここにいるのだ。そういうことにしよう。

「お待たせしました。いくつか伺ってもよろしいでしょうか」

「なんだ」

女の人が戻ってきた。その態度マジでやめて。運よくその人が優しいから助かってるんだから。

「なぜ古代文明の情報を求めているのでしょうか」

「なぜそれを言わなくてはなら」私たちの里の長にこの古代衣装をゆかりある土地に戻してくれと言われましてそのため探してるんです!!……、だそうだ」

テオルに任せようと考えた私がバカだった。そうだよこいつバカだよ。だからこそ私がしつかりしないと。

「本当にすみませんこの礼儀知らずを許してやってくださいお願いし

ます！」

「い、いえ、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます！」

「ナナリ、大げさすぎる……」

「バカ！ こっちは頼む立場なの！ なのにあの態度は何!? 怒られても文句言えないよ!？」

「お、落ち着けナナリ」

こいつはまだわかってないのだろうか。今の状況がどれほど危機的だったのか。それともまだ自分の本当の力があれば、とか思い込んでいるのだろうか。

「私たちはモンスターに勝てないほど弱いんだよ!? この人はモンスターにも勝てちゃう人なんだよ!? そんな人を怒らせたら私たちなんてあつという間にバラバラにされちゃうよ！」

「え」

「え」

テオルと女の人が固まった。テオルはようやく相手の人の危険性に気づいたのだろうか。でも女の人は何で固まって……、あ、しまった。焦りから言い過ぎた。

「ああああああ！ すみません言い過ぎましたすみません！」

慌てて女の人に謝る。そうだよ。今の発言じゃ「あなたのことがかごい怖いので礼儀正しくあります」って言ってるようなものじゃないか。こんなの失礼すぎる。私もテオルのことを悪く言えないじゃないかこれじゃあ。

「い、いえ、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます！ 本当にごめんなさい！」

「大丈夫ですよ……。あと私はハンターでは」

「テオルも謝りなさい！」

「……、本当にすみません」

「い、いえ……」

テオルが案外素直に謝った。どうせなんだかんだ言っでごねると思ってたから予想外である。子の成長を見守る親の気持ちってこん

なのだろうか。同い年だけでも。

「え、ええっと、事情はわかりました。ただ、古代文明と言っても各地にそれらしきものが散らばっており、その服と本当にゆかりある土地なのかはいろいろと調べてみないとわかりません。なのでしばらくその衣装、預らせてもらっても大丈夫でしょうか」

え、古代文明っていっぱいあるの？

「預けて何かわかるのか」

「その材質や、刺繍の印された意味、紋様などを専門家に見てもらって、何かわかるか調べることになります」

「この衣装、いずれ手放すものだが俺にとって大事なものだ」

「調べた後はもちろんお返しします」

「あ、じゃあ大丈夫ですよ。お願いします」

「ナナリ、勝手に決めるな」

調べてもらわないと何もわからないんじゃないじゃない。どうせ衣装を手放したくない理由は、古代の衣装を身にまとう自分ってマジ古龍、とかいう思いになりたいだけでしょ。

「いいじゃない。手がかりもないんだし」

「だがこの服は俺にとつて」

「1着で大丈夫ですよ。たぶん……、ですが」

「じゃあ私のでお願いします」

「ナナリのもあまりいい気はせんが……。どれくらいかかりそうなんだ」

「私からは何とも……。泊まる場所を教えて頂ければ、調査が済み次第そちらに連絡させていただきます。まだ宿は取ってないので、とつてから

「じゃあそれでお願います。まだ宿は取ってないので、とつてからまた来ますね」

「はい、わかりました」

テオルはまだ不満気だ。古龍ごっこに私まで巻き込もうとしないでほしい。

更衣室に案内され、女の人に服を預ける。次は宿をとらなきゃ。滞在期間はどれくらいかわからないけどお金はまだまだある。ちよっ

とくらい遊んでも大丈夫くらいはある。街を観光できるチャンスだ。

ゴテゴテした格好の人をじろじろ見てるテオルを引っ張りハンターすぎるぞを出す。

もちろん出るときも挨拶は忘れずにだ。

「お邪魔しましたー！」

肩の荷が少し降りた気分がして足取りが軽い。この調子で宿を探そう。

なぜだかテオルはため息をついていた。ため息をつきたいのは私だよ。

## 救いの手

「はじめは里を出た時不安いっぱいだったけど、今は出てよかったと心から思えるわ〜」

ハンターズぎるどに服を預けて1週間ほどたった。その間、私はゴードンの街を堪能していた。

人がいっぱい目回りそうだったが、お店もいっぱい目移りがとんでもないのだ。もう目が回るのだ。

特に食べ物のお店は素晴らしいの一言に尽きる。

山の幸から海の幸までいろんなものがそろっているのだ。ゴードンと交易が盛んな地にタンジアという場所があるので、そこから流通してくるのだとかなんとか。

まあ個人的な好みだけど、私はお魚よりお肉や野菜がいいです。

「ナナリ、あまり羽目を外し過ぎるな」

「それにしてもさつき食べたサンドイッチ、すごい美味しかったよ。具が卵だけだったけど、あの卵は普通とは違うね！ きつと元の姿も芸術的な卵よ！」

「そうだな。落ち着こうな」

「もー、テオル小うるさい。ずっと里しか知らなかったんだし色々堪能したっていいじゃない」

「俺とてあまり小言は言いたくない。しかし散財するのはいただけん」

「大丈夫だって。ちよつとくらいなら平気よ。10万zも渡されてるんだから」

確かに結構使っちゃった気がするけど、まだまだ余裕はある。ハンターを雇うための金額がどれほどのものかわからないけど2万zもあれば大丈夫でしょう。もしかしたら雇う必要もないかもだし平気平気。

「あ、この卵とか里のお土産によくない!? 大きいし綺麗だし！」

「どういう感性だ」

「卵の良さがわからないなんて、テオルは残念ね」

ガーグアの卵か。食べるものとか違うと味も変わってくるんだろうか。まあ美味しいならなんでもいいけどね。

美味しいものや綺麗なものが満ち溢れてる。都会って素敵。もう里帰りたくないなあこれ。

昼間は街を堪能して、日が暮れだすと宿に戻る。こんな生活を1週間ほどしてました。

宿に戻ると、宿屋さんに呼び止められた。なんでも古代衣装の調査が終わったという連絡が来たんだとか。

ということは街とはしばらくお別れになるのか。名残惜しいけど充分堪能したししょうがないか。

所持残金を確認する。6万と7152z。充分残ってる。

テオルに明日はハンターズぎるどへ行くということ伝えて自分の部屋へ戻った。

翌日、この街にきて3度目のハンターズぎるどである。2度目は宿の場所を伝えるために来たのだ。もはやこの街にもすっかり慣れたものだ。

「ナナリ」

「ん？ 何？..」

「本当はもっと早めに言うべきだったんだがな」

「何をよ」

なんだろう。忘れものでもしたのか。

「こういう施設ではお邪魔します、なんて言わないぞ普通」

ふむ？ でもお店じゃないでしょ..」。

「念のため言っておくぞ。ここ、家じゃないからな？ 施設であつて家じゃないからな？」

正直疑わしい。自分が挨拶するの恥ずかしい、とか考えて先に言い訳を並べてるんじゃないだろうか。

「……、挨拶するのが嫌とかじゃないぞ。嫌だが言い訳とかではないぞ」

「……、本当に？」

「普通の挨拶はする……、だからナナリも、お邪魔します、なんていうなよ……」

折衷案ときたか。まあそれなら仕方あるまい。

「はいはい、それじゃ入るよ」

「本当に頼むぞ？ 恥を無駄にかきたくはないからな？」

恥をかきたくないならもつと普通に喋れ。お店巡りの時だつて「ふん、悪くはない」とかいちいち偉そうな態度で感想述べやがつて。

「……、こん、にちは……」

「こんにちは！」

なんて消え入りそうな声なのだこいつは。普段の痛々しい喋り方の時の声量はどうした。無駄に大きい独り言はどこいった。手本を見せるような気持で私も大きく続いた。

「こんにちは。お待ちしておりました。テオルさんにナナリさんですね」

「はい、結果はどうになりました」

以前の女の人が迎えてくれた。どうやらこの人はやつぱりすごい人らしい。風の噂で聞いたのだがここ最近であだ名ついたらしく、そのあだ名が解体者、とか殺戮者、とか物騒なものが多いのだ。とんでもない大物である。怒らせてはダメだ、絶対。

「では報告を読み上げますね」

そういつてこのお方は手元の紙を読み上げていった。

読み上げていった内容をおおまかに言うと、フォンロンという土地にある、古い塔に似たような文様があるとか。

ということとは目的地はそこでいい、のかな。その塔に人は住んでいないらしい。誰もいない場所に古着をばーいってしちやつていいものか。まあいつか。このまま彷徨うのも嫌だしね。

「じゃあその塔に向かいますね。結構道中って危険ですかね……」

「そりやもう危険ですよ。古塔が発見されてからもそれほど時間は立ってませんし、樹海の奥深くですから……。この辺りとは比較にならないほど危険ですよ」

「あの、ここで護衛のハンターを雇うことができるとも聞いたのですが」

「はい、大丈夫ですよ」

順調である。目的地もわかったし、危険もハンターに任せたらいい。順調である。

「じゃあハンターを雇って、そこまでの護衛をお願いしたいです」

「はい、では、フォンロンの古塔までの護衛と、復路も、ですね。海を渡ることになりますので、タンジアのハンターから派遣させていただきます」

「はあ」

「それで契約金のほうですが……」

6万Zあるのだから余裕余裕。

「8万Zになります」

「はい？」

ふむ……、ふむ？

「えつと、1万……？」

「8万Zです」

所持金は6万と7000ちよつとである。

「ちよ、ちよつと高すぎませんか？」

「タンジアから塔までの飛行船、およびそこからの護衛ハンターへの報奨金とで……、一応通常の旅費と比べたら安いんですよこれ」

「う、内訳教えてくださいもつと詳しく！」

「タンジアからの飛行船、往復で5万6000となります。ハンターへの報奨金は残りの2万4000ですね」



「通常の旅費ってそんなすごいんです!？」

「参考までに、ちよつと場所は違いますが」

そう言つて渡されたのは『ロッククラックの観光ガイド』と書かれたものだった。そこには『飛行船で行くセレブな旅なら85000z』とある。

「たつか!？」

「ハンターを送り出す飛行船を今回は使いますのでそこまでの値段にはなりません、それでも今言った金額にはなつてしまいます」

「は、ハンターを雇わず移動だけお願いするというのは……」

「駄目です。ギルド側としても命を捨てるような行為を見過ごすわけにはいきません」

命捨てるような行為つて、そんなに危険な古塔……。

「お金がないのですが……、どうすれば……」

「それは……、またの機会に、ということ」

冷たい……、都会つて冷たい……。

「こ、今回はこれで、失礼します……」

「はい、またのお越しをお待ちしております」

最後まで冷たい……。殺戮者なんてあだ名がつく人に暖かい心を求めても無駄なんだ……。

「で、どうするのだ?」

「どうしよつか……」

広場で途方に暮れていた。どうしたらいいんだろう。

「あれほど散財するからだ……」

「言つてもほとんど宿代でしょ……。食べ物は大した値段になつてないし……」

目的地が決まったところでお金が足りないとか。つていうか高すぎだよっぱり。私は悪くないよ。宿が1泊4000zなのが悪いんだ。私は悪くないんだ。

「里に一度戻るしかないかなあ……」

「金がないと目的地にも行けぬとはな。窮屈な世界だ」

どうしようもないしなあ。里に戻ったら怒られるかなあ。でもそもそも渡してくれたお金が少ないのが問題だったんじゃないかな。うん、そうだ。それに目的地が判つたのだ。それが判つただけでも十分な成果のはずだ。そうだ、里に戻ろう。

里に戻る前にいつそ色々買い食いしようかなと考え始めてたころだった。

「なあ、アンタら。金に困ってるのかい？」

なんか知らない男の人に声かけられた。

これは……、貞操の危機!?

「だからなんだというのだ」

どうしたらいいか固まってたらテオルが声を出した。こういう時はその無駄にでかい態度も頼りになる。普段はため息もんだけど今は頼りになる。

「ちよつと耳寄りな話があるんだ。まあ、なんだ。ここじや人目がつき過ぎる。ついてきな」

そう言つて男は歩き出した。

すつげえ怪しい。ものすつげえ怪しい。

「んじや里に帰ろつか。ちよつとよく近くの村まで行く行商人とかいないかな」

「どうだろうな。いたとしても乗せてもらえるかはわからんぞ」

「おいおい、ひよつとして俺を疑ってるのか？」

うわ、またこつち来た。

「まあほぼほぼ初対面だししようがねえか。それにその慎重さ、大事だしな」

「あの、なんなんですか……」

つい話してしまった。無視を決め込むつもりだったのに。

それはそうとして、官憲の方は近くにおられませんか。

「まあそう構えるな構えるな。俺はアンタらの味方だよ」

「はあ?」

「金に困ってるんだろ？ いい取引があるんだ」

いい取引。すつごい怪しい。犯罪系だろうか。確かにお金に困つてるとはいえ、里に戻れば解決しそうな話である。

「いいえ、結構です。お断りします」

「その警戒心、ますます気に入った！」

なんだこいつ。ここまでくると気味が悪い。

「さつきから訳の分からんことを……。さつきと失せろ」

「しようがねえ。ここで話すか。自然体でいろよ」

何を言うつもりだろうか。いざという時は叫ぶぞ……。ここは人通りも多いんだから変な真似はしないと思うけど。

「俺はな。とある偉大な組織の一員なんだ。おつとさすがに組織のことはまだ話せねえぜ。アンタらともつと信頼関係を築けない間はな」  
「あつそう。興味ないです」

唐突な自分語り。さつきまでちよつと緊張してた私があほらしく感じる。

「組織、か。組織と言うからには、大きな信念、目標があるのだろうか」  
テオルが興味を持ってしまった。この手の人に質問を投げるのはよしてほしい。喜んで食いつきかねないんだから。

「もちろんだ！ だがそれを語るわけにはいかねえ。たとえ脅されたつてな……。これは誇り高い組織に属する者としてのプライドだ！」

「ふん、なかなか面白いやつだ」

「知り合いだと思われたくないから離れてくれない？」

うん、お前ら本当に面白いやつらだよ。距離を置きたいくらいだよ。

「おつと、ついつい熱くなっちゃまうところだった。まあなんだ。組織からの俺への指令が少し荷が重くてな。人手がほしくてな」

「それで私たちに目をつけたと？ 他を当たってください胡散臭い」

「全くだ。誇り高い組織の一員が見ず知らずの他人に頼るか。プライドは見せかけだけだったか」

「確かに頼るのはどうかと思う。だがな、個人のプライドを優先して、

組織に泥を塗るわけにはいかねえんだ……」

ええー……、まだ食い下がるの？」

「ふむ……。だが見ず知らずの他人に頼むのはおかしくはないか」

「テオル、面倒だしもうほっとこうよ」

「もちろん適当に選んだわけじゃねえぜ！ アンタらは他のやつらとは違う！」

「うわーめんどくさそー」

他とは違うとかそういう言葉にテオル君弱い。やめてくれる？

不安に思いながらテオルの表情を伺うと

「聞かせてみる」

あー、もう興味津々だよ。

「昨日の昼間のアンタらをたまたま見かけた時にな。その時の会話を聞いたとき、俺はピンと来たね。この二人は組織に向いた素晴らしい人材だったよ」

昨日の昼間？ 普通に街でごはん食べてたけど、特に変な会話をした記憶はない。

「とにかくアンタら以外に頼る気はない。まあ危険があるから断られても仕方がねえとは思ってる……。だが頼む！ 手に入れたものの質次第じゃ10万Zは出す！ 質の悪いものでも2万は約束する！」

「ほう……」

「危険って……、私たちが戦う力はないんで」

「戦う必要はないんだ。ただちよつと森の方で取ってきてほしいんだ。例のアレを」

「アレ、か……」

「ああ、アレだ……。やっぱりわかるよな、アンタらには」  
わからないんですが。

テオルがわかってる素振りしてるけど絶対そいつもわかってないよ。

「それで、どれくらい必要なのだ」

「2つだ」

「ナナリ、この話を受けないか」

「はあ？」

雰囲気とかに流されちゃって何言ってるのこいつ。

「アレって言われても私にはわかりませんー。なので無理ですはい終了」

「報酬がいいぞ」

「危険な目にはあいたくないんで」

「頼むよ、嬢ちゃん……！ アンタならわかってくれるはずだ……！」  
「だから何をよ」

そりや確かに報酬はすごいけど、明らかに怪しいもん。美味しい話には裏があるってお約束だし。

「お願いだ……！ アレを……、卵をとってきてくれ……!!」

「だからアレって言われても……、卵？」

「は？ 卵？」

え、卵？

「ああ……、わかるだろ!? あんなにあの卵の良さに気づいてたアンタなら！ これがどれほど大事な任務なのかって！ そりや危険だ！ ガーグアといえども嘴でつつかれたら痛い！ だけど、だけど！ 俺たちはそんな痛みを乗り越えてでもほしくなる……、あの卵の魅力に憑りつかれた俺たちは！」

「おい、卵って」

ガーグアの卵？ 割と頻繁に産卵するあいつらの？ ちよつと脅かしたら卵落としちゃうガーグアの？

「なあ！ 頼むよ！」

「悪いがこの話はなか「その話受けます!!」……、ナナリ」

「是非私たちにやらせてください！」

「おお！ 本当か!?!」

「ナナリ、おい、ナナリ」

「その代わり報酬はしっかり準備しといてくださいよ！」

「もちろんだ！」

「ナナリ、里に戻るんじゃないのか」

「何言ってるのテオル。困難を乗り越えて任務を達成する。そうしないと里長に合わせる顔がないわ」

「ありがとよ！ アンタらがいれば百人力だ！ た・ま・GO！ た・ま・GO！」

「ふふ、任せてください！ た・ま・ごー！ た・ま・ごー！」

「……」

「つとしまった嬉しすぎてついつい歌っちまった。人目につくとま  
ずい。落ち着こうぜ」

「そうなんですか？ そうなんですね！」

「このおじさんは変な人なんだろう。けどもそのままでもいい。お金  
が手に入るのだ。ガーグアの卵で。ふふ、ふふふ。」

「組織の調査では、この地図に記されてる黄色い印辺りのガーグアが  
ねらい目だ。美しい卵を産み落とす確率が高いらしい」

「つまりそこから卵を2つ、とってきたらいいんですね」

「ああ、頼んだぜ。地図にある赤い印の場所に箱が置いてある。そこ  
に卵を2つ入れておいてくれ。頃合いを見て組織の別のやつが回収  
する流れだ」

「了解！」

「報酬は昨日の昼にアンタが訪れた店、その中で渡す」

「あの綺麗な卵のあった場所ね」

「ああ」

「何言ってるんだこいつら……」

テオルがなぜだか拗ねていた。会話に入れなくて拗ねるとは子供  
だろうか。

## 膨らむお財布

ゴードンを出て、街道から離れて森の中。

地図を片手に2人で歩いていた。目指すはガーグアの卵。

「美味しい話だと思っただけど、やっぱり美味しいだけじゃないね……」

「……、当然だろう」

ガーグアの卵をとってくる。それだけなら美味しいだけだったのに……

あの後、あのおじさんとこの仕事について少し話した内容。その時に聞かされた条件が厄介なのだ。

誰にも見つからずに、という条件だ。

なんでもあのおじさんのいる組織は大きいけど、この辺りではあまり力がないだとか。どこでも力ないんじゃないの？　と思わなくもないが、そうらしい。

何はともあれ、普段ならハンターズぎるどにこっそり依頼してるそうだけどここではダメだそう。イマイチ意味がわからなかった。

とにかく、誰にも見つからずに、ということ。夜に森である。密猟というやつじゃないのか、ってテオルがおじさんに文句を言ったが、とつてくるガーグアの卵は無精卵だから生態系に影響を与えないだとかなんだとか。バカみたいな仕事内容に難しい単語を持ち出すのはやめてほしいところである。

「でもさ、ガーグアの卵ってそんな2万もの価値ってつくもんなのかな」

「つかないだろう普通」

「だよねえ」

夜の森というのはこわい。今の時期は竜などはいないから大丈夫、と聞かされてはいるがこわい。こわいのでとにかく会話する。人の声と言うのは安心を与えてくれる、って誰かが言ってたから。

「なんで2万も約束したのかな。馬鹿なのかな」

「馬鹿なんだろう」

テオルはいまだに不満気なようだ。さつきから返事が適当な感じ

がするし。

まあ、組織だの例のアレだの他とは違うだの、彼の心の琴線にふれる単語が出まくって正体は卵でした。とか肩透かしだったんだろうけど切り替えてほしいものだ。

「テオル、もつとやる気出してよ」

「こんなわけのわからぬことに、どうやってやる気を出せばいいのだ」  
「楽に儲けて万歳って思っただけでやる気出さなさい」

「いずれナナリが下界でだまされるんじゃないかと不安に思えてきたぞ……」

田舎者は騙されやすいとでも言いたいのか。

「どういう意味よ……、あ、あれが卵入れる箱かな」

「そのままの意味だが……、確かにこれだな。訳の分からん卵の絵が彫られてあるしこれだろうな」

「あのおじさんの組織ってバカしかいないのかもね」

「馬鹿しかいないんだろうな」

卵の掘りがすごい箱を見てしみじみ言ってしまった。卵だけ異様に気合いの入った掘り具合なのに、その周りは適当もいいとこだ。人間っぽいのかなか棒だ。棒人間だ。

これは怪しい宗教染みてきた。この仕事終わったら絶対関わりたくないなあ。

「んじゃこの場所から黄色の場所はそう離れてないね」

「さっさと終わらせるか……」

早く終わらせて街でご飯をお腹いっぱい食べたい。今度は卵料理以外で。

そう意気込んで森の奥へ向かう。

目的地だと思われる場所にはガーグアが複数いた。おじさんの情報の精度はなかなかすごいようだ。

あとは驚かせて卵を産み落とさせるのだ。驚かせるにはコツがいる。そのコツとは、バレずに近づいて驚かす、だ。



何度もガーグアを驚かせてきた私なら余裕である。里では一番のガーグアの卵取り名人と言われるほどだ。ナナリちゃん存在感薄いよね、とか言われたこともあるけど自信はある。

まずは茂みに隠れながらこっそり移動だ。ガーグアたちの後ろをとるように……。

うまくいくと思っていた。

姿が見られてないのにあっさりこちらの存在に気づかれた。気づいたやつが周りに知らせるようにガーグア鳴きだした。そして全員逃げていく。

勘がいいやつだ。仕方ない、別の場所のガーグアを探そう。

まだまだ地図にはガーグアの目安の印が残されているのだから。

意味がわかんない。

うまくいかないのだ。どうしても気づかれてしまう。

「なんで……、里だったらもう20個くらいは集められてるのに……」

「ガーグアも俺たちの力を感じ取っているのだろう。野生に生きるものとして当然の本能だ」

「はいはいそーですなー」

テオルの戯言は流すとして、これはどうしたものか。里周辺のガーグアが間抜けだっただけなの？ それともここらへんのガーグアが異常に鋭いの？ どっちにしる卵取りの名人という肩書に自信を無くす。いや、誇りとかには思っていないけどね。

「このままじゃ報酬もらえないよ……」

なんとしてでも卵を手に入れなければ。なんのために夜の森にきたのかって話になってしまう。

「……、もしかしたらこの服、俺たちの服が殊更に存在感を強くしているんじゃないか？」

「はあ？ 服が私たちを強くしてる？ ちょっと意味がわかりませぬね大丈夫？」

「もともと俺たち古龍の存在感は強いが、今は人間の身。だが古代の衣装で俺たちの古の血が刺激され、その存在を世界に示そうとしている、ということだ」

「ますます意味がわかりませんね、大丈夫？　いろいろと」

周りに人がいないからか、最近なりを潜めていた自分古龍説を大いに述べてきた。

まあでも、今までの卵取りと違う点と言えば場所だけじゃなく服装もあるにはあるか。

古龍云々は置いといて、実際この服は訳の分からないものだし。何百年と置いといて解れも崩れもしないってなんなのって話だしね。

案外不思議な力があるのかもしれない。

「ちよつとこの服脱いでみるね」

「え……、あ、ああ」

物は試した。替えの服に即座に着替えて挑戦だ。

着替えてから再び歩き出して、またもガーグアを2頭見つけた。今はこの森が平和というのは本当のようだ。ガーグアいっぱいだね。

テオルには待機してもらってこつそり再び回り込む。

後ろをとれた。

後ろをとれても安心できない。毛づくろいをするために首だけを後ろに向けることもあるのだ。こればかりは感覚でいつも挑んでいる。

音を立てないように、だけど素早く近づく。右手には石ころを持ちながら。左手はパーの形だ。

背後に立てたら、もう1頭の位置を確認。そして全力で左手で、そのお尻をビンタする。そしてすぐさま右手の石ころをもう1頭にめがけて投げつけた。

驚きの余り身体が伸びる、と言わんばかりの反応が本当に愛らしい。間拔けな顔した君たちがいけないんだよ。可愛すぎていじめたくなるんだよ。あ、あと卵ほしくてだよ。

うっとりしそうではあるが、忘れずに顔を両腕で庇う。怒ったガーグアにつつかれてもいいようにだ。痛いけど顔は守らないと。目に

当たったりしたら一大事だから。

……？

つついてこない。恐る恐る様子を見たら逃げていくお尻が見えた。かわいい。

「今のやつらはちゃんと卵を産み落としていったようだな」

テオルがそばに来ていた。そして言われた通り、卵が2つ落ちてあ  
る。

それにしてもまさか本当に服が原因だったとは。テオルの戯言も  
たまには役に立つものだ。

「それじゃ運ぼうか。あ、服返して。なんだかんだで獣避けにもなり  
そうだし」

「ああ、やはりこの衣装のほうがナナリには似合うからな」

褒め言葉に感じれないのは私が素直じゃないからだろうか。いや、  
違う。

古龍という設定の仲間がいるほうがいい、みたいな感じなんだろ  
う。本当に厨二病の完治が望まれる。独りでその病と闘うならい  
けど人を巻き込むのなら早いこと完治してください。

「……、え？ なにこれ」

テオルを無視して卵を抱えようと思っただらちよつと変だこれ。

なんだこの卵。今まで見た卵と全然違う。

「え、ねえ、これってガーグアの卵なの？」

「……、そう、なんじゃないか？ やつらから産み落とされたものだ  
し」

金色である。派手な金色である。もう片方は見慣れた白いやつで  
ある。

質によっては10万Zってこれのことだろうか？ こんな卵を産  
み落とすのか都会は。都会すごい。

「ひよつとしてすごい幸運なんじゃない？ これ」

「かもしれないな。とにかく早く運ぶとしよう」

「うん！」

金の卵はテオルに持たせて、私は白い卵を持つ。旅の資金だけじゃ

なく少しは遊ぶお金にも回せそうだ、と考えながら、赤い箱の場所まで歩いていった。

翌日。

約束の卵の店に入るとあのおじさんが待っていた。

「へッへッへ……、やっぱり俺の目に狂いはなかったな！」

「……、迷惑な目だと思うがな」

テオルは未だに肩透かしにあつたことを引きづってるようだ。箱に収めた後ちゃんと回収してもらえるか不安だったがこの様子なら心配はいらなさそうだ。

「ちゃんと収めたもの、見てくれましたか？」

「ああ！ すげえぜアンタら！ 同志たちがみんなあの卵を見てざわめいたくらいだぜ！」

「じゃあ報酬は期待してもいいですよね？」

ふふ、当然だろう。意味のわからない卵愛好家集団にあの金の卵はさぞまぶしいものだろう。ふっふふ、駄目だ、まだ笑うでない私。「もちろんだ！ 最高にいいフォルムの卵だったからな！ 2つ合わせて12万Zだ！」

「まああんな金色の卵ですからね、いい値段にはなると思いました」

「いや？ 金色のほうは2万だな」

「え」

「金の卵は珍しいっちゃ珍しいが、俺たちはそんな珍しさより形、愛らしさを大事に思う。あの白い卵はもう完璧よ……。つとつと。いかんいかん、ほら、12万Zだ受け取りな！」

おおおう、こんなポンと渡されるとは。金の卵より普通の卵のほうがいいと言っちゃ頭のおかしい組織だけど、お金はあるようだ。「ありがとうございます。それじゃ私たちはこれでー。あの卵美味し

く召し上がってくださいね」

「え？ おいおい何言ってるんだ嬢ちゃん」

え？ 今何か変なこと言った？

ひよつとしてまだやってほしいことあったとか？ さすがにまた卵とりにいくのは嫌だ。お金手に入ったし、また困ったときにでいいよ。

「何か？」

「卵は飾るものだろう!？」

あー、うん。そうだった。よくわからない人たちなんだこの人の組織は。

「あ、そうですか」

「あんな美しいフォルムの卵だ……。思わず頬ずりしたくなったぜ……」

「そーですか。もういーですか」

目がヤバイよこの人。もう早く離れたい。

「やつぱりアンタら最高の逸材だけ。どうだ？ 俺たちの組織に入らないか？ この出張支部のやつらはみんな喜んで迎え入れてくれるぜ。本部に強く推薦してやつても」

「気持ち悪いんでお断りしますねー。テオルいこ」

「ああ、疲れるなこの手のやつは……」

「まあ仕方ねえか。けどきつと気が変わるだろう！ その時は来い！

いつでも俺たちは迎え入れてやるぜ！」

「テオルもたいがい疲れさせる原因だからね？」

「無視は寂しいぞ無視は」

「ナナリもたいがいだからな……」

「おーい、寂しいぞー？ は、入りたくならなくてもいつでも俺たちを頼れよ！ 俺たち、卵シンジケートをな！ 本部にもアンタらのことしっかり伝えておいてやるからよー！」

「私はちよつと都会について知らないだけだから」

お店を出るまでずつと後ろで変な人がやいやい言ってたけど気の

せいだろう。思いつきり組織名出してた気がするけど気のせいだろう。もう関わることもない。

「それじゃハンターズギルドへ行こうか！」

「ハンターズギルドだな」

ひよつとして私の発音は何か変なのだろうか。妙にテオルがハンターズギルドを強調してくる。意味が通じれば問題ないだろうしまあいいか。

所持金も12万増えたおかげで18万zを超えた。これでもう何の心配もなくなった。

いざ行かん、フォンロンへ。

さっさと任を終えてテオルから離れてやるんだ。痛々しいやつから離れるためにも頑張るぞう。

## 新しい道

タンジヤに向けて、アプトノスが牽引する荷車にゆるらゆる。

街から街への移動に専用の荷車があるってすごいね。合理的と言  
うやつだろうか。難しい単語を使ってみました正直よくわかってな  
い。

ゴードンへ行くときのるように、進路が同じな行商人さんに乗せても  
らうということが今回はかないませんでした。

最初はそれを狙っていたのだが

「タンジヤ行くならアプトノスの定期便使いなよ。一般の方はみんな  
そっち使ってるよ」

と行商人の方に言われてしまい、今回はこちらを利用しているの  
だ。

運賃はぼっちしとられました。ちくしょう……、2000z……。

格安のアプトノス車を頼んでもこのお値段。都会の人間はきつと  
みんな心はお金でできているんだ。暖かい心なんてないんだ。

所持金自体はまだまだあるけども、減っていくお金には心までもす  
り減らされる。

今の所持金は17万7800z。ゴードンでは紹介状を書いても  
らった。その紹介状をもってタンジヤのハンターズぎらんどで8万z  
の出費を行うのだ。なので実際は9万7800z

食事代や宿代などにもお金は使うのだから、その分を考えると  
……、6万zくらいだろうか。遊べるお金。

……、結構あるじゃない。

物事を整理するのって大事だね。不安が一気に消えたよ。

「テオル、タンジヤについていたらちよつと観光しない？」

隣に座っているテオルに提案する。タンジヤについてすぐにハン  
ターズぎらんどに向かつては勿体ない。護衛を着けて塔へ出発なんて、  
都会を堪能する暇もなくなってしまふ。

「……、ゴードンを出るときも散々観光しただろう」

「ゴードンの観光はしたけどタンジヤはしてないじゃない。行ったこ

とないんだし」

「人間の街にそう違いがあるとは思えん」

相変わらずの痛さだ。私たち以外にもお客さんいるんだから、そういう発言はマジでやめてほしい。

「だが、まあタンジアには興味がある。ゴードンのハンターズギルドの本部はタンジアの港だからな。いったいどんな奴らがいるのか……、楽しみだ」

「卵愛好家集団じゃなければいいね」

「……、あんな珍奇なやつがいてたまるか」

素直じゃない幼馴染だ。観光には賛成ということだろう。

「それじゃ、タンジアについてたらずは宿をとろつか。紹介状は宿に置いて観光しよう」

海の幸の本場だ。期待が高まる。きっと美味しいに違いない。それにハンターズぎるどの本部とやらだ。竜のお肉とかも扱ってるかもしれない。これまた美味しいに違いない。ガーグアも鳥竜っていう竜らしいね。

「そうだな、ナナリが紹介状を持っていたらそのうち無くしそうだ」

何を言うかこいつは。こんな大事なものを無くすわけにはいかないのだ。無くすわけがない。

古代文明と関係があるかもしれない里の、任であること、目的的にいく理由、等々を紹介状に書いてもらったのだ。これをタンジアのハンターズぎるどに渡せば優先的に護衛を回してくれるとか。

これをなくした場合を尋ねたら、再度色々事情説明、古代衣装であることの証明、なんでかよくわからなかったけど移動費の増加、とよくないことばかりだそう。最後の移動費の増加があれだよ。なかなかきな臭いつてやつだね。

まあとにかく大事な紙切れだ。無くしたり、落としたりしては大変だ。なので部屋に置いていく。観光には邪魔な紙切れだ。

こんなものを持ち歩きながら観光なんて気が気じゃないからね。



「おおー」

「ほう……」

タンジアについて出たのは感嘆の声だった。

「すごいこう、道ってというか細長いってというか、スラっとした？ 街だね？」

「街並みなどよりもっと見るべきところがあるだろう」

「え？ 海とか？」

「あの灯台だ」

灯台？ まあ港なんだし灯台くらいあるでしょ。むしろ灯台のな  
い港ってあるの？

「あの灯台は黒龍祓いの灯台と呼ばれてるものだ」

あー……。厨二心を刺激されたんですね。

「黒龍は我ら古龍よりもはるかに強大な存在。人間たちにとって、触  
れてはいけない禁忌の存在。その存在と対峙し、生き延びた後に建て  
られたのがあの灯台だ」

わー、テオル君詳しいー。たぶん黒龍祓いじゃなくてピンク龍祓い  
の灯台とかって名前なら興味持たなかったでしょ絶対。響きのかつ  
こよさから覚えただけでしょ。

「そんなことより美味しいお店探そうよ」

「そんなこととはなんだ。かの黒龍の記録でもあるのだぞ」

「そんな伝承なんかより美味しいものの方が大事よ」

「伝承などではない。少し前にも再び黒龍がこの海に出たそうだ」

「へー」

「本来なら、この港は滅びてたのだろう。だが、その黒龍を撃退したハ  
ンターがこの港にいたらしい。そのため今もこの街は人間が住んで  
いるのだ」

いつから観光案内人になったのだろうかテオルは。

「とにかく宿を探そっか。できるだけ安いところ」

「ふん……、まあいい」

宿を忘れて買い物をして、そして紹介状を無くすとかになつたら悲惨だからね。

宿はどこだろう、と悩んでいたら街の人が教えてくれた。都会にも優しさはあるんだって思ったよ。

格安の宿を探してます、と伝えて教えてもらった場所はその通り、格安だった。600zって。ゴードンの宿選び適當すぎたの？ 値段の差すつごい。いや、まあ快適な宿だったけどさ。

その点、一泊600zの宿はというと……、開放的である。

すさまじく開放的である。屋根はある。雨は凌げるよ。風は凌げないよ。窓っていうか壁がねえ。

丸見えじゃんこれ。外から丸見えじゃん。まあ海側から丸見え状態なだけだし、覗き見とかはいないだろうけどもこうも丸見えだと……。ひよつとしてタンジアって言うほど都会じゃないの？

「……、実はタンジアって都会じゃないとか？」

「この宿が特別なだけだろう。それかこの解放さがここの住民にとって当然なのか、だ」

「まあいいけどさ……」

壁がないと言つても海側だけだし、扉には鍵もついてる。数日だけなら寝るときも案外新鮮で心地よいかもしれない。

荷物を下ろし、部屋を出ようとしたところでふと思う。

観光なんだし、この古代衣装じゃなくてもよくない？

そうだよ、なんでいつまでも何百年もの古着を着てるんだ私は。だからいつまでも田舎者の雰囲気は抜けないんだ。

「ナナリ？ どうした？ 街を巡らないのか？」

突然止まった私に疑問を持ったテオルが声をかけてきた。

テオルの姿を見る。やっぱりというか、古代衣装のままだ。

「観光なんだしさ、普通の恰好しない？ この服じゃなくて」

テオルにも普通の恰好をさせたいけども……

「断る。この服はいずれ手放すとしてもまだその時ではない」

まあ断ると思ってた。

「あつそ。私は着替えてから観光するわ。鍵は宿屋さんに渡しておくから、もし先に戻ったら宿屋さんから受け取って」

「ナナリは着替えるのか？」

「うん、たまには違う服着たいじゃない」

「……、そうか。好きにすればいい」

そう言ってテオルは出ていった。今回の観光は別行動である。タンジアの街が細長いから迷うこともそうないしね。それにたまにはひとりになりたいときもあるのだ。

お金は自由に使っていい金額として私もテオルも3万Zずつ持っている。が、だからといって残りの14万Zを部屋に置いていくのはさすがに怖いので、この14万Zも私が持とう。もちろん使いませんとも。

服を着替えて私も外へ。もちろん鍵はちゃんとかけますとも。待っていてくださいい都会の美味。

シー・タンジニャである!!

優しい街の人におすすめのお店を聞いたところ、シー・タンジニャという素晴らしいお店があるらしい。思わず高揚するほどに。

世界中の食材が集まる三つ星レストラン、シー・タンジニャである!!

安いものから高いものまで取り揃えてるとかなんとか。そして味は超すごい。これは行かないわけにはいかんですよ。

街の奥にあるらしいのでどんどん進む進む。普通の恰好の人だからけどと思つたら、いかにも戦いますと言わんばかりの鎧の人やピンクの熊の着ぐるみ？ みたいなのを着てる人など、変わった人がいるところについた。少し広い区画だ。香ばしい香りが漂ってくる。ここがひよつとしてシー・タンジニャ……!-

すぐそばにはハンターズぎるどがある。しかしやっぱり開放的で

ある。雨風の強い日とかどうするんだろ？ もと大きいテントでも張るのかな。

まあ今はどうでもいい。晴れだしね。晴天だしね。

重要なのはシー・タンジニヤがやってるかどうかだしね。

お昼の時間にしては少し遅い時間だったので、お客さんはそれほどいないようだ。だが0と言うわけではない。

さっそく、シー・タンジニヤの席に着いた。給仕さんにおすすめを聞く。

なんかお店の人におすすめを聞くっておしやれな気がする。また一步、都会に染まっていく。

おすすめはタンジニア鍋と言われる料理らしい。とりあえず1人前を頼む。屋根にあるあの巨大鍋のことじゃないよね、とちよつとだけ不安になった。

隣に座った人もタンジニア鍋を頼んだ。同じような観光客だろうか。なんだか裕福そうなおじさんだ。経済的にも、お肉的にもという意味で。

にしても、ここで働いてるのってアイルーだけ？ 見ていて和むけど不安だ。食器とか落したりしないかと。

「お嬢ちゃん、君はこの街の人かね？」

ぼへーつと待っているとな隣のおじさんに話しかけられた。待つての間退屈だったのだろう。私も同じ気持ちだ。

「いえ、ちよつと地方から来たんですよ。この辺りは今日来たばかりでいろいろと新鮮ですね」

ド田舎から来た、というのは恥ずかしかったので、地方と言った。何も間違っていないから問題ない。

「ほう、ということはこのあたりの食文化とは違った土地の出身かね？」

しまった、田舎者とバレ気味だ。いやいいけど、なんかしまった。まあいいか。

「まあ山奥の小さな里でしたからね。基本山で採れるものや獣肉とかですねえ」

「ほうほう、何か珍しい食材とかはなかったかね」

珍しい食材？ 田舎とはいえ別に普通だ。と、思う。

しかし普通の食材です、と答えるのも面白味がない。おそらくこの人は待ってる間の退屈しのぎの会話をしたいのだ。退屈しのぎとはいえ少しは面白い話をしなくちゃ。

「私は食べたことないんですけど、里長の世代は捕まえた虫を煮込んで食べてたそうです。なんの虫だったかまでは聞いてませんけど」

私は食べたことない。もちろんない。食べたくない。

話してからこの話題は失敗だったかなと後悔した。これから美味しい料理を食べようというのに、虫料理の話って……、選択としては最悪なのではなからうか。

おじさんも思わずだんまりだよ。これは申し訳ないことをしてしまった。

謝ろうとしたところ

「……、なるほど、虫か。そうか、虫か！ ワシの探求心が刺激される！ 気になるな！ 実に気になるな！」

「え、あ、はあ……」

めっちゃやくちや目を煌めかしてらっしやる。

何この人？ 変人？ 卵信者に続いて今度はなに？ 虫信者？

「あ、あのく、お待たせしましたニヤく。タンジニア鍋ですニヤく」

唾然としてると、給仕さんがタンジニア鍋を運んできてくれた。よかった、巨大じゃない。

私の分と、隣の変人の分を置いていった。

「あ、ありがとうございます」

「お、おお。ありがとう」

こんな変人でも普通にお礼は言えるのね。テオルにも見習ってほしいものだ。

「ところで先ほどの話の続きなのじゃが、その虫の煮込みは美味しかったか知っておるか？」

「い、いえ……、あ、あのお話よりこの料理を食べましょう？」

「そうじゃな、出された料理はしっかりと頂かなくてはじゃな」

なんだこいつ。なんだこの虫信者。っていか虫食べる気なの？  
いや、そういう文化はまだあるらしいけど。  
いかにいかに、今はお鍋に集虫だ。違う、集中だ。

美味しかったよ。うん、お鍋美味しかったよ。だけど脳裏になぜか  
虫の姿がチラついてあまり集中できなかった。美味しかったんだけど、  
さっきの会話のせいで……、ちくしょう。

「やはりタンジア鍋は美味であるな。君もそう思うじやろ」  
「そうですね……、おいしかったです……」

この変人はとても満足そうだ。私もあなたがいなければ同じよう  
な満足した表情を浮かべたはずなのに。

「それでさっきの話なんじやが……」

うええ、まだ虫に興味あるの？ ドン引きってやつだよこれ。

「さっきも言ったように私はなんの虫かは知りませんよ。美味しかったか  
どうかも聞いてませんし」

「ああ、それはいいんじゃない」

「じゃあなんですか？」

「実はワシはこれでも美食家、と呼ばれておつてな」

「はあ……」

唐突な自己紹介ですね。しかし美食家、かあ。さぞ美味しいものを  
食べ歩いてるのだろう。

思わずおじさんのお腹を見た私は悪くないと思う。

「実はこのところ、どうにも物足りなくてな」

「はあ……」

「そこでお嬢ちゃんから虫を食べたという話を聞いて、少し興奮して  
しもうたんじや」

「私は食べてませんからね！ 誤解を招く言い方やめてくださいね  
!？」

私は食べてないっての。その言い方だと私が食べたみたいじゃん。  
「やはり未知の食材と言うのは刺激的じゃ。想像が広がる」

「それはよかったですね。ですが何度も言うように私はその虫料理は知らないんですよ」

「もちろん虫料理に興味はある。あるが、話したいことはちと違うんじゃない」

「なんなんですか……」

「ブナハブラって、美味しそうに思わんかね？」

「思わないです」

ブナハブラって、でかい虫じゃん。それも害虫じゃん。毒もつ虫じゃん。

山でやたらと見たよ。あんなの絶対美味しくないよ。里長たちも食べようと思ったことないよきつと。

「ワシも少し前まではそう思っておった。だがお嬢ちゃんの話のおかげでそんな先入観などくそくらえじゃ！」

「いや、先入観も何も、ブナハブラが食用になるなんて聞いたことないですよたぶん」

「それはまだ誰も試しておらんだけかもしれん！ 何事も最初は未知なのじゃ！」

「そっすか……」

どんどん熱くなってきてるよこの変人自称美食家。

「で、でも大きい虫ですけど、食べれる部分は少ないと思いますよ。」

「そうじゃろうか？」

「そうですよ。あの虫は毒を持っていますし、やばい液体も出しますから」

「その部分以外は美味の可能性があるということじゃな」

何が何でも食べる気なのねこいつ。

「そういえば、ここから離れた土地では徹甲虫や重甲虫という巨大な虫のモンスターがおるらしい。それらなら食い出もあるかもしれない！」

悪食じゃねえか。

美食どこいったの。

「ありがとうお嬢ちゃん！ ワシに新たな道を示してくれて！」

「ええー……」

私は何も示してませんよ。その道は明らかに間違った道ですよ。早く元の道に戻ったほうがいいよ。

「もはやいてもたってもおれん！ 早速行動に移らねばな！」

「あ、あの、美食家、なんですよね？」

「うむ？ おお、そうじゃ！ ワシとしたことが少し慌てすぎたな」

おお、よかった。正気に戻ったみたいだ。

うんうん、美食家としての誇りって大事だよ。悪食になったらダメだよ。

「ブナハブラだけを食すなど失礼というものじゃな！ 何か合いそうなものと共に食わねばなるまい。場所も大事じゃな。お嬢ちゃん、何から何までありがとうな」

やめて。感謝やめて。

私が道を踏み外させたみたいな感じになる流れやめて。

「ブナハブラの煮込みを温泉につかりながら食す。うむ、これじゃ！

ユクモ村でハンターに依頼を出すでしょう！」

「そっすか……」

私とは関係ない。関係ないっいたらないんだ。

「それじゃあの、お嬢ちゃん！ 本当に感謝する！」

「さようなら……、さようなら……」

さようなら、元美食家さん。

もう絶対美食家じゃないよ。名乗れても酔狂とかが頭につくよ。

世の中変人ばかりなのかもしれない。

タンジアの空が妙にむかつくほど青く感じれた。



## 孤高の鬼

シー・タンジニヤを堪能、したこと、だし……、不完全燃焼状態だけれどもまあ堪能した、ということにして。

さてさて、どうしようかな。宿に戻るには早すぎる。

小物類のお店でも探そうかな。でもこれから古塔へ行くからあまり荷物は増やしたくはないしなあ。うーん。

見るだけ見てみようかな。

行動方針を決めて席を立つ。お会計をしようとしたら、すでにあの自称美食家が払っていてくれたようだ。さすが自称美食家、太っ腹である。

そしてシー・タンジニヤを後にした。しようとした。

見えた光景に思わず立ち止まってしまった。

シー・タンジニヤの隣にある、ハンターズぎるどで

それはもう、すごい綺麗な土下座をしている人がいるのだ。

こういう場所で土下座する人初めて見た。

都会はこういうことが多いのだろうか。つていうかなんであの人は土下座してるんだろう。

ハンターズぎるどで土下座をする理由……。

ハンターを怒らせてしまったのだろうか。あの土下座をしている男の人は、カウンターにいる女性にひたすら頭を下げている。きつとあの女性ハンターを怒らせてしまったのだろうか。

どうなってしまうのだろうかあの男は。怖いけど興味がある。

他人事とは感じられないのだ。

観光が終わり次第、私とテオルもハンターズぎるどに来ることになる。つまりあの女性と話すことになるだろうし、どうして怒らせてしまったのか知っておきたい。態度や口調とかで怒った、とかなら今日から全力でテオルを指導しなくちゃならない。

よし、今後のためにも少し調査だ。

調査と言ったけどやることはただの盗み聞きである。なるべく不自然にならないように、さりげなく近づいてどういう話をしているか聞くのだ。

わー、あの灯台すごいなー綺麗だなーって感じで近づけば大丈夫だろう。なんだっけあの灯台。テオルが熱心に解説してたあれ……、あれ……。黒龍破壊の灯台！

これでもし何か聞かれたら、黒龍破壊の灯台を眺めてるんですけどごまかせる。今回ばかりはテオルに感謝だ。いや、でもテオルが普通にしてくれてたら怒らせるかもって不安ないし、やっぱり感謝はいいや。

完璧な言い訳も用意できたことだし、顔を灯台に向けてじわじわ近づいていく。

「お願いします！　どうか何卒！　何卒！」

「何度頼まれても、申し訳ありませんが決まりなので……」

うん？　怒らせたわけじゃないのかな。何か必死に頼んでる？

ハンターに頼むようなこと……。モンスターの狩猟とか調査だよ、たしか。

そしてハンター側が承諾しないってのはなんだろう。

そこまで考えてひとつ思い当たった。お金が足りないのだからきつと。どうか、どうかお願いします！」

土下座で必死に懇願している姿を見ていると胸が痛む。なんだか可愛そうに見える。

あそこまで必死なのだ。きつとんでもない危機的状況なのかもしれない。村が襲われて助けを求めてやってきたけどお金がなく、ハンターを雇えないとかわらうか。

決まりは大事だろうけど、人命は優先するべきじゃないだろうか。部外者ではあるが、このまま放置するのは気分がよろしくない。私の手元にはお金がある。3万Zまでなら使っても旅の予定に問題は無い。ここはやらない善よりやる偽善だ。

「ですから、契約金をお支払いできないことには……」

「いったいいくらなんですか」

言ってしまった。入ってしまった。

「だけど見てられないもん。村の危機的状況を打破するためここまでやってきたこの人がかわいそうだよ。ハンターをひとりくらいなら3万Zあれば雇えるはず。古塔までに2万といくらかだったし。」

「え、えっと」

「この人の代わりに払います。いくらなんですか」

「すごいドキドキする。緊張がすごい。自分がやってることが間違いないんじゃないかって不安にもなってくる。」

女性は突然私が入ってきて、戸惑ってるようだ。

「み、見ず知らずの少女よ！ 我輩感謝！ 本当に我輩感謝！」

「それで、いくらなんです」

「2万か、それとも3万か、少しくらいなら予算を超えてもいい。土下座の人がちよつと暑苦しいけど、それだけ必死なんだろう。」

「1200Zですが……」

「え、安っ」

思わず言っちゃった。

「え、っていうか1200って。土下座の人を見る。財布とか普段持ち歩いてないんだろうか。1200Zくらいなら持ち歩いててもいいと思うんだけど。っていうかハンター雇う金額じゃないよね？ それともタンジアじゃこれが適正なの？ ゴードンは宿代といいハンター代といいぼったくりなの？」

「えと、ハンターを雇う金額、ですよね？」

「え？ いえ、依頼の受諾契約金です」

「依頼の受諾契約金？ なんだか難しそうな単語が出てきた。依頼を受けるのに契約金があるってこと、かな。」

「えっと、うん？ あれ？ ってことは、この人が依頼を受ける人？」

「土下座をしたままの男の人を指さす。村の危機を救うために依頼を出しに来た人じゃないの？」

「はい、ですが契約金をお支払いいただける資金をお持ちじゃないよ  
うで……」

「うむ。我輩、少し前に事業を失敗したのだからお金がないのだ……。生活するための金がないから金を稼ごうにも、稼ぐための金がないのだ！」

なんか思ってた展開と違ってた。村の危機じゃなくて破産者の危機だった。土下座しながらも説明されたけどなんだろうこの感じ。肩透かしをくらったこの感じ。

「では、えっと、1200zお願いできますか？」

女の人に催促されてしまった。私が。

いや、まあ代わりに払いますって言っちゃったしなあ。なんだろう、釈然としない。

「は、はい」

「はい、確かに」

1200zを支払う。タンジア鍋で使うはずだった代金がここで使われただけだ……。そう、思うことにした。

「又ハハハハハ！ 我輩、人の優しさに心が洗われるようだ！ いやー、優しさっていいものですね！」

何この人。

「それじゃあこちらの依頼お願いしますね。今度は失敗しないようにお願いしますよっ」

「又ハハハハハ！ 我輩、これでもかつては鬼教官と呼ばれた身！ もう道に迷って失敗などはしないぞ！」

「この間は泳いでる最中に足をつって溺れたって聞きましたよ。出発はいつごろにします？」

「今すぐに！ と言いたいところだが、我輩恩義に厚い男である！ この少女と少し話がしたいので今日の夕方をお願いします！」

何この人すごいうるさい。暑苦しさだけじゃなく煩さがすごい。この人も変人だわ。都会って変人ばかりだわ。卵、虫、と続いて次は暑苦しい破産者って。

「改めて、感謝感激である！ 感謝の印に我輩の、ためになる話を聞か

せてやろう！」

えええ……、全然嬉しくない提案された。

まあでも少しだけ興味がある。話し方とか声量がアレだけど、内容は興味がある。

なぜなら、テオルが私のことを騙されやすそう、と言っていたからだ。事業に失敗した人の話を聞いて、耳だけでも経験が豊富になれば、きっと私のことをそうは評価しないはず。

「ためになる話って、どんな話です？」

とはいえ、勘違いで実は全然関係ないどうでもいい話でした、ということもあり得る。そうはならないためにも先手はうっておく。事業関係、もしくは破産した理由であればいいんだけど。

「うむ。ためになる話とは、我輩がどうして白昼堂々と土下座をするほどの貧乏になったのか、という理由なのだ。貴様は我輩と似ている部分がある。放っておいたら我輩と同じ道を辿りそうだからな！」

これは聞いておきたいという思いがますます高まった。そして私とこの人が似てるってなんだろう。私はこんなに煩くはないと思うけど。あと暑苦しくもないと思うけど。

「是非聞いてみたいです。ところで、私とあなたが似てるってどういった部分ですか？」

「我輩も事業が波に乗っていた時はウハウハだな。貧乏人に金を恵んだりしていたのだ……」

恵まれない人にお金を渡していたのか。暑苦しい人の意外な優しい一面に驚きだ。なるほど、私のさっきの行いも似たような感じだ。「なるほど……」

「貧乏人に金を恵んだり、暗くて道が見えないと誰かが言えば1000札を燃やして灯りをつけてやったり……。我輩のあの頃は凄まじかった」

「ん？」

今変なこと言ってなかった？

「ロッキラックには10億はくだらん豪邸を建て、歯はすべて金歯に変えたのもその時である。店に入ればその店の一番高いものをすべ

て持つてこい！　と言いつ放つた時など人生薔薇色に見えたぞ！」

あ、この人あれだ。絶対破産理由は自業自得だ。

「貴様も我輩と同じことをしてしまふだろう！　あの頃の我輩くらいに金があれば！」

「はい、たぶんしません」

そんなことしないわ。私はちゃんと色々考えて行動するって。持つてるお金の遊んでいい金額もちゃんと定めてるから。

「又フフ、まあ今はそういうことにおこう！」

「はあ、ところでなんか急激に疲れたんでお話終わつてもらつてもいいですか」

「遠慮することはないぞ！　我輩の有難い話に恐縮してしまふだろうが、聞けばたちまちアナタの人生ビッグウェーブに早変わり！」

なんでこの人の話を聞いてみたいって言っちゃったんだろう。

付き合うのもめんどくさいし札束で頼つぺたでも叩いたら引き下がるかな。引き下がりそう。お金に飢えてそうだしね。1000z札を灯りに使つてた人だ。1000z札の仇討ちだ。1000z札の束でたたいてやる。

「ほら、これあげますからもう終わつときましよう？　ほしいでしょこれ？」

「ぬおつ、札束ビンタだと！」

1000z札の束でぺちぺち叩く、なんかこう、不思議な感じだけでもべしべし叩く。貴様が燃やした1000z札の復讐を、代わりに私がやってるだけだ。スカつとするとかちよつとした快感だねこれ。「くっ！　屈辱と同時になんだろう、我輩開いてはいけない扉を開きそうになつてしまふぞ！」

「ほら、これ受け取つて早く依頼をこなして来たらどうです？　ほらほら」

「何してるんだナナリ……」

「へ？」

「くっ、我輩は屈したりはしない！」

名前を呼ばれたので、そちらを向いたらテオルがいた。困惑して  
ような感じの顔でテオルがいた。

「あ、テオル。何してるって見ての通りだけど」

見てのとおり100z札の仇討ちだ。お金の大事さと重みを理解  
していなかった男に100z札で罰を下しているのだ。

「見てわからないから聞いているんだ。とにかくやめろ。やめろ、そ  
の男が目覚めたりしたら俺もどうしたらいいかわからなくなるから  
やめろ」

目覚める？ この場合目覚めるって言ったらなんだろう。眠りか  
ら、ではないね。あとは……、マゾに目覚める!? いや、でも札束攻  
撃は痛くないしマゾに目覚めるなんてないだろう。

悩みながら叩いていたらテオルが手をつかんで止めてきた。仕方  
がない。結構叩いたのだ。燃やされた100z札も浮かばれるだろ  
う。

「それで、いったいどうしてこんな珍事が起きてるんだ……。この人  
間が何かしたのか？」

「この人が昔100z札燃やしたっていうから、仇討ちのつもりで  
……」

「訳がわからん……」

「我輩もわからん……」

まあ100z札の復讐は建前に近いけど、実際は話の切り上げにお  
金の力を借りようとしたただけだけでも。

「それで、お前は何者だ？」

テオルが貧乏人を睨みながら尋ねた。

「うむ。我輩はかつて鬼教官、孤高の教官と呼ばれ、今は少しばかり家  
計が火の車な一介のハンターだ！ どうぞよろしくお願いします」

「え、ハンターだったの？」

「我輩をなんだと思っていたのだ貴様！」

予想外だ。モンスターに対抗できる存在がこんな人だったとは。  
そういえば依頼を受けることはハンターだもんね。そしてハン  
ターが抵抗できない状態にする札束攻撃の威力も予想外だ。

「ほう、お前がハンターとはな。ハンターも十人十色というわけか」  
テオルの憧れのハンターの中にはこんな貧乏人もいるんだね。テオルもちよつと驚いているようだ。

「あまりのノーマネーっぷりで金を稼ぐための金がないところ、その少女に助けってもらったのだ。そのあと何故か札束ビンタされたがな」

「……、本当になんでだ」

「……、我輩が聞きたい」

まるで私を変人扱いする流れになっている。失敬な。変人はお前らだよ。

「いや、ちよつとその人の話聞くの疲れそうだったから、切り上げようとしただけだから」

「それでどうして札束ビンタになるんだ」

「100z札の仇討ちも兼て」

「訳が分からない」

「うむ、わからん」

どうあつてもこの変人二人は、私を変人扱いしたいようだ。もういい。変人にどう思われたって構うものか。訂正しようとしたって、どうせこのまま繰り返しになっちゃう。話をさつさと進めよう。

「もう貧乏人はこのお金早く受け取って、さつさと依頼行ってきたらどうです」

そう言つて無理やりお金を握らす。1000zだ。

「う、うむ。感謝する」

「ナナリ、妙な金の使い方はするな……」

今回が特別なだけだから。今回が例外なだけだから。

「しかしずいぶんと金に余裕があるのだな。我輩がそれくらいの歳のころはもつとカツカツだったぞ」

「まあちよつと卵でお金が入りましたから」

「卵で？ なにやら気になる、我輩とっても気になります！ 我輩の返り咲きチャンスになる予感がするので聞かせてほしいぞ！」

「面倒なのでお断りします」



「そうか。又ハハハハ！ 卵というヒントを聞いただけでもよしとしよう！ 我輩、今回の仕事が終わったら、卵のことを調べるんだ……。フラグをあえて立てて、我輩、クエストへいざゆかん！」

テオルが面倒くさそうな表情を浮かべている。私もきつと浮かべていることだろう。この人暑苦しいよ色々。

「では行ってくる！ 感謝するぞ！ 我輩恩義に厚いからな！ 恩返しに期待しておくのだ！」

「一切期待してないんで気にせず行ってらっしゃいすはい」

又ハハハハ、又ハハハハ。と変な笑い声をあげて去って行った。今日だけで強烈な人たちと会い過ぎだ。二人だけでも疲れる。

「私ちよつと疲れたしもう宿に戻るよ」

「そうか、では俺も戻ろう」

「あれ？ ハンターすぎるどを見に来たんじやないの？ それか黒龍破壊の灯台」

「黒龍祓いの灯台だ。ここに着たのはナナリを探していたんだ」  
「何？ なんか見つけたの？」

「我らの翼を休めるための部屋の鍵を持ったままだろう。ナナリが」  
まっさかー。と思つてポケットに手を入れると鍵があつた。

鍵をしっかりと閉めたけどそういや宿屋さんに渡すの忘れていた。

少しだけうっかりしてしまったようだ。まあ失敗は誰にだつてあるのだ。仕方がないのだ。大事なものはこれからだ。

「ごめんごめん。ちよつとだけうっかりしてた」

「俺とナナリで、ちよつと、の意味が違うのかもしれない……」

今のは嫌味つてわかるぞこの厨二病め。

テオルを睨みながらハンターすぎるどを後にした。宿に戻つてゆっくりしよう。モロ見えの海の景色を見ながら横になるんだ私。

## 白い雷光

「観光に気を取られすぎだ」

「うるさいなー。ちよつと失敗しただけじゃない」

さつきからしつこくテオルから小言が飛んでくる。くそう、責めれる案件があるからってグイグイ来やがって。

別に財布を落としたとか鍵を落としたとかじゃないんだし、そんなに責めなくてもいいのに。

えつと部屋は、こつちだこつちだ。とつてある部屋に移動しながらも未だに小言が飛んでくる。何この小姑。

「明日はもう塔へいく準備をするぞ」

「えー、もつと見て回ろうよ」

「公衆の面前であんな珍事をやらかしておいて、よくそんなことが言えたものだな……」

「あれはあのおっさんが悪いんじゃない」

「……、とにかく明日にはハンターズギルドで手続きをする。紹介状は無くしてないな?」

「紹介状はちゃんと部屋に置いてるってば。風とかで飛ばされないう鞆の中に入れて部屋に置きっぱなし」

部屋の鍵を開けながら説明する。つていうかテオルも見てたでしように。相部屋なんだから。

それにしても今日はほんと疲れた。精神的に疲れた。

道を誤ってしまった美食家と暑苦しい貧乏人の2人にひどく疲れさせられた。

海の音を聞きながらだらけた。そう考えるとこの宿の部屋は悪くないかもしれない。海側の解放っぷりは爽快だ。都会の喧騒を忘れて安らげるだろう。宿代も安いしここは当たり前だね。

「ただいまー、つて宿で言うのはなんか変かな」

「おかえりニヤ」

「さあな」

疑問に思ったけどおかえりつて返ってきたし変じゃないかもね。

純白な毛並みのアイルーが鞆をゴソゴソしながら返事してくれたのだ。

誰だあいつ。

「え、どちらさま？ 部屋間違えた？ ひよつとしてこの鍵ってどの部屋も共通で同じなの？」

「しまったニヤ！ ついうっかり……、あ、ここはボクの部屋ですニヤ。君たちの部屋は別だと思うニヤ」

「あ、そうなんですなごめんなさい」  
「待て」

やつぱり安い宿は何か欠点があるものだ。ちくしょう、恥をかいてしまった。

「この部屋で間違いない。何をしているんだそこのアイルー」

「え、うそ？ って、あー！ それ私の鞆!!」

この純白アイルー、私の鞆を漁ってやがった。

「ニヤ、ニヤにをいうニヤ！」

「私のだよそれ！ っていうか隣にある服も私のじゃん！ 何!? 泥棒猫!?!」

「毛並みの白さとは裏腹に、やっていることは盗みとは、真っ黒だなこの猫」

テオルの言う通りだ。この真っ白なアイルーめ。どこから入ってきたのだ。ひよつとして開放的な窓からか。窓と言えない窓からか。ちくしょう、安宿はやつぱりだめだ。この宿ははずれだ。

「バ、バレては仕方ないニヤ！ 撤退だニヤー！」

そう言っつて泥棒猫は素早く開放的な窓から逃げていった。木や屋根にぴよんぴよん移っていく。

「ナナリ、何も盗まれてないか？」

「も、もしものためになって思ってお金は全部持ち歩いてたの……。本当によかったあ……」

「なんだと!? その金は落としたりしてないか!?!」

「していないっての」

私をなんだと思ってるんだこいつは。テオルの中では私は失敗ばかりのドジな子なのか。私は自他ともに認めるくらいの上っかき者だつての。ゴードン行くときの商人さんに、苦労してそうだって言われる苦労人でもあるんだぞ。

「ほら、ちゃんとあるって」

「なら問題ない、か」

今回の私の行動はかなり褒められた行いだと思うんだけど。なんでこんな微妙な扱いなんだ。

一応鞆の中も確認しよう。特に盗まれて困るようなものはなかったはず。いや、あるにはあるか。でもさすがに紹介状を盗むなんてないでしょう。アイルーから見たらただの紙切れみたいなもんだし。

「……」

「明日にはやはり古塔に出発した方がよさそうだな。下界はこうも下賤な場所とはな」

鞆に……、あれ？ 見つからない。奥のほうに行っちゃったかな。

「……………」

あれ？ ん？ あれ？

「ナナリ？」

「……………」、あんの泥棒猫おおおお!!」

「どうした!! 何を盗まれた!!」

「紹介状がないの!! あのアイルーに盗まれた!!」

「ちゃんと探したのか!!」

「探したわよ!! っていうか真っ先に私疑うの!? どういうつもり!?

あのアイルーでしょ!」

「す、すまない」

すぐに見つけ出さないと。こういう時どこに行けばいいんだ。官憲の詰所? タンジアのどこ? っていうかあの猫なんで紹介状なんて盗んだの? その純白の毛むしるぞ。

「とにかく早くあの猫を見つけ出さないとな……」

「とっ捕まえて! やったことを後悔させてやる!」

「あ、ああ……」

宿を出て、人に聞く。純白の毛並みのアイルーを見なかったか？聞けば、答えはあつさり帰ってきた。あそこまで白いアイルーはこの街でも珍しい様だ。向かった先を聞き、そちらに向けて走る。

「街から出たわけじゃなさそうだな。この先はハンターズギルドがある。逃げ場はないはずだ。この分なら捕まえられそうだな、ナナリ」  
「ふん、所詮は盗みを働く下郎よ！」

「お、おう。調子が出てきたなナナリ」

「テオルは広場についたら入口で待ってて！ もし私を抜かしたらテオルで止めて！」

ハンターズぎるどのある広場についた。あの泥棒猫はどこだ。いた。カウンターの女性に紙を渡そうとしている。それ私たちの紹介状だから。何してんだこいつ！

「この泥棒猫おお!!」

「ニヤ、ニヤー!!」

全力疾走から転がりながら泥棒猫を捕らえることに成功した。私たちの紹介状をどうするつもりだったんだこいつは。

「え、あの？ え？ と、とりあえず落ち着いてくださいっ」

カウンターの女性が戸惑っている。今日で2回目ですね。さつきも戸惑わせてしまいましたねごめんください。

「観念しろ！ さつきと返せ!!」

「ニヤ、ニヤー!! ボクだって古塔へ行きたいニヤー!!」

古塔へ行きたい？ 紹介状に古塔へ行く旨が書いてあるのを見たのか。勝手に行けばいい。けど私たちの紹介状を勝手に使おうとするな。これとお金がないと無理だけど。そしてお金のない盗人にはなおさら無理だけどな！

「このっ！ 放しなさいそれ！ 放せっ!!」

「ニヤー!! ニヤー!!」

無駄な抵抗をしておつて！ そんな小さい手での抵抗なんて無駄無

駄!

一気に引つ張り、泥棒猫から紹介状を取り返すことに成功した。ふふん、これで分かったろう。お前はこの紙すら守れない! そして自分の身さえもな! その毛とお別れの準備をしな!

紹介状を右手に高く掲げる。うん、間違いなく私たちの紹介状だ。

「いたっ」

確認していたら腕を引つかかれた。その拍子に手から紹介状が離れてしまった。

「このっ……! あ!」

風が吹いた。紹介状が飛ばされた。

飛ばされた先には何故かやたらとでかい肉を焼いてるアイルーがいる。え、ちよつと待って。

吸い込まれるように紹介状は火の中へ飛び込んでいく。

「あああああああああああああああああ!」

「ニャアアアアアアアアア!」

「ニャ? 何か飛んできたニャ?」

大事なものが飛んできたさ。気づいたなら火止めてよ。めっちや強火だねそれ……。あ、あああ……

「……、それで、紹介状は燃えてしまった、と」

「この猫が……」

「あっさり手放す方が悪いニャ」

「はあ!」

泥棒猫の首根っこを掴みながら、テオルに状況を説明した。

手放す方より盗む方が悪いでしょうが。どこまでも黒い純白アイルーだ。

「全く反省の色が見えないようねこの毛むくじやは……!」

「痛いニャ! 痛いニャ!」

狭い額に何度もデコピンをしてやる。とっ捕まえた時に毛をむしろうとしたらハンターすぎるどの人に止められたので、この程度に止めておく。

「この小ささのせいでまるで私が悪いことをしてる気分になるんだけど……。そう考えるとますますムカついてきた……」

「おい、白猫。なんで紹介状を盗んだんだ」

「古塔に行きたかったからだニヤ。あの紙に古塔にいくつて書いてあったから使えると思ったんだニヤ……。なのにあんな風に燃やしちやうだなんて……」

「何被害者っぽく言ってるのこの泥棒」

「泥棒だなんて失敬ニヤ！ 今回が初めてだニヤ！」

「一回だけなら誤射みたいな言い方やめてくんない？」

初めてだろうとんだらうと泥棒は泥棒だったの。

なぜここまでふてぶてしいのだから。

「つていうか何でそんなに古塔に行きたがってるのさ。古塔は危ない場所つて聞くけど」

「古塔は楽園つて聞いたことがあるんだニヤ。そこでボクは夢のマイホームを作つて隠居したいんだニヤ」

「古塔が楽園つて、そうなの？ テオル」

「そんな話は聞いたことがない。そもそも古塔について世間でもあまり知られてないんだ。……。まあ、人間と獣人とで違う情報があつてもおかしくはないがな」

古塔は危険つて、ゴードンのハンターすぎるどでは聞かされたけど、ゴードンとタンジアでは情報が違うのかな？ いや、この泥棒猫がデタラメを言ってるだけかもしれない。情報元を確認だ。

「楽園だなんて誰から聞いたのさ。キリキリ吐きなさい泥棒」

「ニヤ、ニヤア……。鼻をデコピンするのはやめてほしいニヤ……。ここから遠く離れた雪山のふもとの村で、女の子が言つてたニヤ」

子供の言葉を鵜呑みにしちゃったのが今回の犯行動機、いや原因か。

「本当なんだニヤ。その女の子が古塔は楽園みたいに素敵なお場所つて

言ってたニヤ。白い光がキラキラしてて、大きい竜がいない場所って  
言ってたんだニヤ」

「まあ塔というくらいだから竜どもは住みづらいだろうな」

「はいはい、子供が見た夢を信じて暴走して、そして泥棒に走った、と」  
「そ、そんなことないニヤ！ 夢なんかじゃないニヤ！」

自分が非行に走った根本が、ただの夢物語だなんてそりや信じたく  
はないだろう。だけど現実を突きつけてやらねば。放っておいたら  
再犯の可能性がある。

「その女の子強そうだった？」

「ニヤ？ 戦うような雰囲気はなかったニヤ。綺麗な白いドレスを着  
てたからきつとお嬢様だニヤ」

「つまりハンターじゃないんでしょ？ 古塔はハンターがいないと危  
険な場所って聞いたよ。たぶんその女の子は夢で見た内容を言った  
だけか、もしくは電波少女だよ」

「あの女の子が、電波……」

危険な場所を楽園とか素敵なお場所とか、白い光がキラキラって意味  
がわからないよ。電波の線が濃厚だね。それが厨二病だね。

「そういえば……、あの女の子のそばに近づいたらなんだかちよつと  
ピリピリしたニヤ……」

「きつと強烈な電波少女だったんだよ……。静電気が出るほどの電  
波って相当やばいよ……」

「ぼ、ボクは電波の子の言葉を信じて、なんてことをしてしまったんだ  
ニヤ……」

かわいそうに。少しだけ同情してしまう。強烈な電波少女の言葉  
によって手を汚してしまった純白アイルーは、もう綺麗な体には戻れ  
ないのだ……。

足を洗うことはできても、手は汚れたままなのだ。

「で、でもやっぱり万が一ってこともあるニヤ。あまり知られてない  
のなら、本当に楽園っていう可能性もあるニヤ！」

諦めの悪い奴だ。このままではまた古塔を目指して盗みを働くか  
もしれない。なんとかして塔へ行きたくないと思わせなくては。



なんとなくだけど、電波少女の言葉を信じちゃうあたりこのアイルーは単純なのだと思う。ここはうまいこと騙す形で塔を嫌に思わせよう。

「まあもし樂園が本当だったとしても」

「ニヤ？」

「私とテオルはこれから古塔へ向かう予定だからね。古塔でアレしちゃうんだよアレ」

「アレって何ニヤ！ 塔でどんな悪事を働く気ニヤ！」

悪事ってなにさ。っていうかこいつに言われたくないわ。っていうか何言えばいいんだろう。思いつかない。

「だからー、アレよ、ほら……、アレ」

「古代衣装を置いてくるのだ」

普通に言いやがったテオルのやつ。それじゃただの謎行為すぎるよ。嫌がる理由にならないよ。まあ以心伝心みたいにはいかないか。

私がかこからうまいこと軌道修正しないと。

「そうそう、何百年も残ってる古着を捨てにね！ 他にも色々捨てにね！」

「マナーがなってなさすぎニヤ！ どういう教育を受けたらそんなこと言えるんだニヤ！」

泥棒に説教されるだど……！

「まあそれだけじゃなく私たちが古塔に住むからね！ 泥棒は住めないよー！」

「なに？」

「ニヤ！ ボクは泥棒じゃないニヤ！ 未遂だニヤ！」

「思いつきり私たちの部屋から盗んでたでしょうが」

うーん、古塔にお前の席ねーから！ っていうまく信じ込ませる方法はないものか。この泥棒相手に……、そうだ、脅す方向だ。きつとうまくいく。

「……、ここじや人目につくから勘弁してやってるだけだから」

「な、なにをニヤ」

「塔なら人目が見つからないし、お前の全身の毛をむしってやってるとこ

だよ」

ちなみに割と本気でむしりたいたい。

今後のことを考えると割と本気でむしりたいたい。紹介状が燃やされたから出費がかさむんだよどうしてくれんだマジで。

「ナナリ、目が本気すぎる……」

「割と本気だから」

「ニヤ、ニヤア……」

いや、本当にどうするの？ また衣装の調査や説明と、なんでか上がる移動費と延びる滞在費と食費、どれだけ増えるかわからないんですけど？ こいつが盗みなんてしなければ何事もなかったのにこの……！ 全身の毛をむしるだけじゃ足りない気がしてきたわ。

「ナナリ、本音が出る。小声で出ている。不気味だからやめろ」

「ゆ、許してほしいニヤ……、ごめんなさいニヤ……」

いかんいかん。考えてたことが無意識に口に出てたみたいだ。

「もう二度と盗みはしない？」

「は、はいなのニヤ」

「もう二度と古塔には目指さない？」

「ニヤ……。それは……」

「もう面倒だし部屋に連れ込んで毛刈りしよっか」

「ニヤー！ 行かないニヤー！ 目指しませんニヤー!! だから許してほしいニヤー！」

この毛並みはボクの自慢ですからお願いしますニヤー！」

ニヤーニヤーうるさい奴である。だけどまあ言質はとった。非常に不本意だけど、非常に不本意だけでも、今回は見逃して……、やりたくないなあ。どうしてくれよう。

「ナナリ、もういいだろう」

「なんでよ」

「この獣人にこれ以上構っても進展はないと思うぞ。紹介状が返ってくるわけでもないんだ」

「……、そうだけどさ」

テオルがまさか泥棒猫を許そうとするとは。この古龍たる俺を怒らせたからにはただではすまさん！ とか言って私より怒りそうな

気がしてたのに。まあ確かにこれ以上構っても意味がなさそうだ。

純白のアイルーを見る。ひどく怯えてる。悪さをしたのだから罰が当然くだるのだ。今回は軽めだったけど次はないと思え。

「仕方ない、か。今回はこれで勘弁したげる。けど、古塔に来たら本当にハゲさすからね」

「ニヤ、ニヤア！　ありがとうだニヤ！」

アイルーが泣きながら感謝を告げた。

「あの、そろそろ離してほしいニヤ……」

「なんで？」

「え、今回はもう勘弁してやるってさっき」

「これから官憲に突きだすんだから、離すわけないじゃん」

「ニヤ!？」

何をそんな聞いてません的な反応をしてるのか。テオルも何その表情。泥棒を働いたんだから当たり前じゃん。個人の仕返しとしては今ので勘弁してあげたけど、ちゃんと然るべき場所に連行だよ。

「ニヤー!?　うそつき！　鬼！　悪魔！」

「うるさいなあ」

「……、まあ自業自得だし仕方ないか」

「いやニヤー！　せつかくここまで密航してきたのに、捕まったら村に強制送還されちゃうニヤー！　許してニヤー！」

「泥棒だけじゃなく密航までとか。悪事働き過ぎじゃない？　真っ白な毛並みに反して腹の中真っ黒なの？」

「あんな雪山のふもとのど田舎村に帰りたくないニヤー!!」

ニヤーニヤー本当にうるさいけども、知ったことか。

そんな抗議の声なんて、私の耳には届いても心には届かないよ。

ずっと騒いでいたけど、官憲に引き渡したら少しだけすつきりしました。

とりあえず、ハンターすぎるどに明日行くかあ……。事情説明したらわかってもらえないかなあ。不安になりながら、テオルにどうしたらいいか聞いてみたら

「問題ない。俺にいい考えがある」

意外にも心強い言葉が返ってきた。現実味のある考えだといひんだけど。

どんな考えか聞いても、明日話す、と言ってはぐらかされた。もうなるようになれ、だ。

## 冥帝の光儀

紹介状焼失事件から、次の朝を迎えました。

昨日のテオルの言葉がどこまで頼りになるか、不安が残る朝である。

明日教える、と言ってたのだからもう教えてもらって大丈夫だよね。

「とうわけできりきり吐きなさい」

「何で尋問なんだ」

宿を出る前にテオルの考えを聞いておかないと。そんなわけで部屋での会話である。

あ、ちなみに夜は波の音がうるさかったです。やっぱりちゃんとした宿がいいよね。

「いいから、考えってやつを言いなさい」

もし変な考えだったら恥をかく前にここで止めるのだ。古龍の力が覚醒して空を飛んでいく。とかいう意味のわからない妄想の可能性が高いのだこいつの考えは。

「まあいいだろう。俺の考えがうまくいけば、今日か明日には古塔へ行くことができる」

「古龍の力が都合よく覚醒して空を飛んで古塔へー、とかはなしだからね」

今日明日中に出発可能って、つまり優先的に依頼をこなしてもらってことだよな。つまり緊急性が高いやつみたいだな。

「でも私たちの依頼ってそんなすぐに受けてもらえるものじゃなくない?」

「普通の人間だったらな」

あつ、これは

「だが、俺たちは普通ではない。炎王龍と炎妃龍の化身である俺たちは、な」

「紹介状が昨日燃えたって正直に話すしかないかー。待ってる間の滞在費とか出ないかなあ。犯罪に巻き込まれたってだけだし、被害者だ

し私たち」

「ナナリ、そんなことする必要はない」

「やっぱりテオルはテオルだ。真面目に考える気はないようだ。それとも真面目に考えた結果がこれなのか。」

「もつとちゃんとした意見を出してくれない？ 無いなら無いで紹介状焼失のこと話しにいかないとなんだし」

「大丈夫だと言ってるだろう。俺とてちゃんと考えている」

「考えた結果がさっきの発言っすか」

「護衛および移動費が紹介状ありで8万だったし、どれくらいになるんだらう……。10万として……。もつと安いかな？ いや、ここは多めに考えておこう。10万だ。」

「滞在費を節約していかないとなあ……。格安宿のここで、観光は我慢するしかないかあ。」

「ナナリ、よく聞け。ハンターズギルドでは緊急性が高い依頼から優先的にこなされていく。緊急性が高いものはたいていは命の危機的状況であつたり、生態系に大きな被害が起こりうるものであつたり、だ」

「それと古龍の化身さまが何か関係あるんでしろうか。」

「だがもうひとつ、優先的に受けてもらえるものがある」

「もうひとつ？」

「ああ、それは依頼主が特別な場合だ」

「じゃあ無理だね」

「このままではな。だからやつらに、俺たちが特別な存在だとわからせるのだ」

「長ったらしく話しておいて、結局自分は古龍妄想を周りに示すのだ、とは。ここまでブレないのも困ったものだ。」

「だけどあれだね。古代衣装って珍しいし、私たちが特別な任務で急ぎ古塔へ行かないといけない、って誤認させるとかならないかも知らない。私すごい冴えてる。」

「古代衣装に関する特別な任務だから、急いで古塔へ行かないといけないって言えばいいかもしれないね！ なんか特別っぽいし！」

「それだけだとダメだろうな」

むむ、なんでき。

「確かにそれだと珍しくはあるだろうが、ただの珍しい衣服を預かる人間で終わる。……、この服だけでなく、俺たち自身が特別でないとダメだ。ただの里からのお使いのような立場ではダメなのだ」

「そんなこと言っても実際それが事実じゃん」

「……、俺たちがただの人間ではない、と思わせたらいいのだ」

「なんか繰り返しになりそうだから一応聞いておくけど、具体的にはどうするの」

「古代文明に深く関係している人物だと思わせる」

「だからその具体的な方法よ」

「……」

「ないの？」

「……」

「ダメじゃん」

ダメじゃん。

所詮はテオルである。

「くっ……」

「とりあえずハンターズぎるどへ行こうか……」

今日は観光ではないし、古代衣装を身にまとって出発である。

到着しましたハンターズぎるど。

歩いている間にいい案がでないかと期待したけど出てこなかった。

「それにしても、なんか昨日より人が多いね」

シー・タンジニヤにもハンターズぎるどにも、人が昨日より多い。シー・タンジニヤは朝ごはん時だからだろうけど。そう考えると食べたくなくなってきた。もう一度タンジア鍋を頼みたい。今度はしっかりと味わうから。

「何かあったのか」

テオルが知らない人に普通に話しかけてる。丁寧さ皆無だけど普通だ。

「ん？ ああ、なんでも海の底から不気味な光が出てるらしくてよ。ギルドで今調査中だからとかで、依頼の整理中なんだとよ。それで今依頼を受けに来たハンターがこった煮ってわけよ」

「不気味な光？」

「ああ、それが真つ暗で蒼い光だつてよ。よくわからねえけどそうらしい」

「ほう」

「あ、あの。依頼の整理中ということは今から依頼を出してもこなしてもらえそうにない、とかですか？」

「んー、緊急性が高ければ大丈夫だと思うぜ？ あとはギルド側のさじ加減だな」

これはまいった。ただでさえ優先度が低そうな私たちの護衛依頼。それがさらに遅れそうではないか。でも私たちは飛行船使わせてもらう、んだよね？ なら海の底の問題とは無関係だし、大丈夫かな。

情報をくれた男性に感謝を告げ、少し離れてテオルと相談する。

「海のことだし、私たちの依頼は大丈夫そうじゃないこれ？」

「どうだろうな。だがそれよりも、俺たちが特別だとわからせる方法が思いついた」

「え、何か知らないけどとりあえずやめておこう？ 絶対くだらない方法でしょ？ やめておこう？」

引き留める私を無視して、カウンターにいる女性のもとへ歩いていくテオル。マジでやめておこうよ。

「おはようございますっ。どういったご用件でしょうかっ」

「海の底の光について話がある」

「噂になってますよねやっぱり……。申し訳ありませんがただいま調査中として、詳しく話せないんですよ」

「その原因に心当たりがある」

「はい？ ほ、本当ですかっ」



え？ 何言ってるのあいつ。

「ああ、教えてやろう。だが条件がある。腕の立つハンターを紹介しろ。そいつに頼みたいことがあるからな」

ちよつと何言ってるのあいつ。腕の立つハンターを護衛につけたいののはわかるけど、交換条件でそれを取り付けるっていうのもわかるけど。そもそも海の底の光の原因なんて私ら知るわけないじゃん。

あ、それとも里で読んでた本に書いてあったとか？ それなら他の人も知ってるよね。それはないか。

「マ、マスター、どうしましょう」

「ふうむ、話を先に聞かせてはもらえんかのう？」

「……、腕の立つハンターを紹介すると確約するのであればいいだろう」

「うむ、お前さんの話が真実なれば、必ず」

近くにいた竜人族の男性も混ぜての会話である。なんかどんどん不安になってきた。今からごめんなさいテキストなこと言ったんですって謝ったら許してもらえるかな。

謝る前にテオルに確認しよう。そう思ってテオルに小声で話しかける。

「ちよつと、大丈夫なの？ 本当に原因わかってるの？」

「大丈夫だ。むしろこの原因を他のやつらが気づけぬことに驚きだ」

たいした自信である。まあそこまで言うのなら、信じることにしよう。かつて里一番の本の虫だったテオルを。

「ふむ。ワシらが気づけぬことに驚きとはのう。では、聞かせてもらえるかの？」

信じるとは決めただけどやっぱりドキドキしてきた。見当違いなことを言いませんように。本当に言いませんように。そしてぼつちし聞かれてたんですね。超怖いですお爺ちゃん。

「ひとつ確認しておきたい。海の光は断続的なものか、持続的なものか。どっちだ」

「持続的なもの、と報告に上がっておる。その光がかなりの深部にあるようでの、そのため調査隊が組みにくい状況じゃ」

「なら、俺の考え通りだ」

おお、なんだこのテオルから放たれる安心感は。さっきの質問でもともとあった自信がさらに強固なものに変わったのだろう。なんだ、いいところもあるじゃない。

「海の光の原因は、ラギアクルスだ」

ラギアクルスっていうのが原因なのね。全く聞いたことないけど、海の何かなのだろう。

「いや、それはないのう」

え。

「報告によればもう3日ほど光を放っておつての。最初はラギアクルスの蓄電された背中の雷光と思っておつたんじゃが、ずっとそこから移動せんのじゃ」

「……」

「ラギアクルスは肺呼吸、つまり陸に上がらなくてはいけないんじやが、1日程度なら上がらなくても不思議ではないがの。3日となれば別じゃ。そのため、ラギアクルスではなく別のものと考えておる」

自信満々に答えて違いますって、え？ 超恥ずかしいんだけど。見てるこっちも超恥ずかしいんだけど。

「仮にラギアクルスの死骸であれば、3日も海の底にいるというのはあり得るかもしれないが、その場合は蓄電された雷は散っておる。そのため発光はせん」

もうやめて。テオル君の退路を塞ぐのはやめて。

ダメだ。もう見てられない。謝ろう。もう謝ろう。そう思って前に出ようとした。

「ふん、頭の固い人間だ」

テオル君、恥ずかしいからこれ以上強がるのやめてくれない？

「うむっ」

「ただのラギアクルスなどではない。海の底、光の差さぬ暗黒、冥府の底に存在する王であるラギアクルスのことだ！」

やめて。これ以上キツイこと言うのやめて。認めたくないのはわかるけど素直に引き下がって。

「……ふむ」

あー、ほら、お爺ちゃん呆れたのか黙っちゃったよ。

「ただのラギアクルスならそらの凡夫でも問題はないだろう。だが、奴は違う。だから腕の立つハンターを紹介しろと言ったのだ！」  
それっぽいこと言うために腕の立つハンターを求めてる理由まで変えやがった。

「まあ、奴に対抗できるほどの強者はいないか。そう都合よくはいないか」

うんうん、このまま引き下がるんだ。素直に謝らなかつたあたりすごいよ。馬鹿だけどすごいよ。とにかくその流れのまま引き下がるんだ。

「……、冥府の王、か」

「信じられないなら仕方ない。意味のない調査隊を組み、悪戯に犠牲を出すがいいさ」

挑発するのやめよう？ 悔しいんだろうけど挑発するのはやめよう？

「……、まあ待つてくれんかのう」

引き留められた。挑発するからだよ馬鹿！ 本当に馬鹿!!

「古文書にしか記述されておらん冥海竜について、どこで知ったか聞きたいとこじゃが」

「……、どこであろうとお前には関係ないだろう」

明海竜？ 確かに海で明かりを放ちそうな竜の名前だ。ひよつとしてテオルが苦し紛れに言った発言がそれと一致したの？ それともひっかけ？ かまかけ？

「まあ今はそれは置いておくとして。強者はいないか、と言われちゃこの場にいるハンターたちの気がすまん。全員とはいかんが、何人かはお前さんが求める強者じゃよ」

「……………、それがどうしたというのだ」

「お前さんの言葉を信じるってことじゃよ。ここにはお前さんの求め

る、冥府の王に対抗できるものが揃っておる」  
なんてことだ。

偶然の一致によりテオルが信じられてしまった。やはり謝り倒さないよ……、でもあんなだけ挑発してたし……、普通にこわい。

「さあ、お前さんの依頼を言うがいい！ このハンターズギルドはその依頼を受けようぞ！」

なんか急にお爺ちゃん盛り上がりだしたよ。やめてよ、そういうノリやめてよ。テオル君雰囲気流されやすいところあるんだからやめてよ。

「ふむ……、こうも都合よく竜どもに対抗できる者がこの時代に生まれるとはな。おもしろいものだ。……、ああ、すまない。ただの独り言さ。では改めて……、狩ってもらいたいのは冥界竜だ。少しばかり例外的な個体だが構わんだろ？」

流されちゃったよあいつ……。本当に原因明海竜なの？ これで違ってたらもう全員赤っ恥だよ？ それに何その独り言。滅茶苦茶イタいんですけど。しかもなんでしたり顔なの？ 腹立つんだけど。っていうか私たちの依頼は護衛依頼だからね？

ダメだ。言いたいことが多すぎてもう駄目だ。

この場にいるのが辛くなって、私は宿に逃げました。

## 不可視の情報

宿に逃げ込んでからしばらくして、テオルが戻ってきた。

こいつには言いたいことがわんさかある。

なんであんなデタラメを言ったのか、護衛依頼はどこへいったのか、いろいろと文句を言おうとしたが

「すまない」

開口一番に謝られた。テオルに。

その表情は真剣だった。真剣に反省しているようだった。

まさかあのテオルが謝るなんて、しかも反省をしているだなんて。

ちゃんと自分の落ち度もわかっているとは、子の成長とは早いものである。同い年だけど。

反省しているのならば、先ほどまで言おうとした文句は言わないでいてあげよう。

ちよつと強がった結果、引くに引けなくなったただけだもんね。仕方ないか。

あとで一緒に謝りにいこうか。恥をかくことはただ恥ずかしいだけじゃなく、成長につながるのだ。

「いいよ、テオル」

「……、金がなくなつた」

は？

「は？」

「本当にすまない……」

「え？ いや、ちよつと待って？ なんて？」

なんて言つたの今？ もう一回お願いしていい？

「……………、金がなくなつた」

「はあ？」

「本当に悪いと思っている……」

悪いと思っっている、じゃないから。なんで？ ハンターズぎるどで苦し紛れの発言して、それでどうしてお金なくなったの？ は？ なんで？ 私がいない間に何やらかしたの？

「冗談とかなら笑えないんだけど、どういふことか言ってくれる？」

「本当にすまない……」

すまない、じゃないから。理由を聞いてるんだけど？

「冥界竜の狩猟の依頼が正式に受理されて、依頼金として2万2200zがなくなった……」

「……」

あのデタラメ依頼のせいか……。2万2200って……。でもテオルに持たせていた3万で大丈夫じゃない。テオルの、遊ぶお金が減っただけだ。テオルの、だ。

「そのあと色々あつてその結果、財布から4万4400zがなくなつた」

「は？」

は？

「なんで4万4400って膨れ上がつてんの？ え？ なんで？」

「依頼のための書類にサインを色々していたら、こうなつていた……」

「は？ 色々つて何？ ねえ？ 色々つてなに？」

何？ 詐欺にあつたの？ よく読みもせずサインしていったの？

しかも旅の資金から減らさないといけないほどの出費なの？ バカ？ あ、バカだったね。

理由を問い詰めようとしていると、テオルがだんまりになつてしまった。そして頭を掻いた後

「俺だつて知りたい！」

「はあ!? 急に逆ギレ!? ふざけてんの!? よく読みもせずに書類にサインしたからでしょ!?!」

「ちゃんと読んだわ！」

「じゃあなんで金額が倍になつてんのよ！」

「……………運だ」

なんだつて？ 小声に急になるでない。急に大声出したと思つた

ら今度は急に小声だなんて。よく聞き取れないじゃないか。

「招き猫の金運だとかいうわけのわからない事情で、倍になったんだ……」

「……、いや、全然意味がわからないんだけど」

招き猫の金運ってなんだ。

「狩猟に出るハンターへの特別賞与とかで、今回の依頼を受諾したハンターが、そういうものを受け取る必要がある状態らしく、それを招き猫の金運と呼んでいた……」

「全く意味がわからない。わかりたくないってのもあるけど本当に意味がわからない」

「そのため報酬が倍にしないといけないらしく、それで本来の2万2200の倍の4万4400に……」

「いやいや、ねえ？　なんで依頼主の負担膨れ上がるの？　特別賞与とかって私ら関係なくない？　ハンターすぎるどで負担するものじゃないの？」

「俺もそう思う……。だが気づいたら断りづらく……、そしてサインをってしまった」

なんでだよ。気づいたのなら断れよ。サインするんじゃないよ。

「仕方ないだろう……、古代文明に深くかかわってそうな、重要人物のような雰囲気を出しておいて金がないなんて言えないだろう!」

「見栄を優先しないでくれる?」

塔への移動費および護衛費がどれだけになるかもわからないのに、見栄を優先してお金がなくなるって本気で何やってるんだ。

紹介状がなくなった後にこんなことになるなんて。今残金いくらだっけ……、駄目だ考えたくない。考えたくないけど、考えないといけない。つらい。

タンジアに着いた時が17万。そこから本来の予定では8万で護衛依頼料だったけど、紹介状がなくなったので8万以上の出費が確定。そして今テオルのやらかして4万4000が飛んで……、滞在費

や食費、準備費用などを3万と考えてたけど、えつとえつと。ダメだ、護衛依頼料がわからなすぎて未来が見えない。

思考が悪いほうに行ってしまう。こんな時はよかった探しをするのだ。悪い部分ではなく今回の件で得られたいい部分を探すのだ。現実逃避ではない。強く生きる術なのだから。

1つ。雰囲気の流れされたらダメだということを学べた。

2つ。適当にサインしてはいけない。

3つ。断る勇気は大事だと気づいた。

得られたものがこれだけとは。

思わずため息が出る。テオルによく聞こえるように大きめにため息が出る。

「だ、だが、今回の件で俺たちが特別な存在だとやつらに示せたはずだ……」

「そうだね、特別騙されやすそうな田舎者って感じが示せたね」

これで海底に本当に明海竜ってやつがいれば、騙されやすい田舎者であり、古代文明関係者って思ってくれるだろうけど、どんな確率なんだろうそれは。

「テオル、ハンターズぎるどへ行くよ」

「今更依頼は取り下げれないと思うぞ……」

「もうそつちはいいよ。全然よくないけど、いいよ。全くと言っていいほど良くないけど」

古文書がどうか言ってたし、まだ明海竜の真偽は確認できてないだろう。少しでも優先的に回してもらおう可能性が高い今のうちに依頼を頼みに行こう。滞在期間が伸びるとまずいしね。

「今なら古代文明の関係者って勘違いされてるだろうから、勢いで乗り切るしかないだろうしね」

「それでハンターズギルドへ行くのか」

「あ、テオルはあまり口出さないでね。また騙されるかもだし」

「ナナリに任せるのは不安なんだが……」

「4万4400zの損害を出した方に言われたくないのですが」

「……」



「まあただの田舎の小娘じゃない雰囲気を出しながら話せばいいんですよ。恥ずかしいけど、この際背に腹は代えられぬ……」  
いつも通りではなく、どこか偉い人って思えるように振る舞えばいいのだきつと。

本日二度目のハンターすぎるのである。

朝に来た時よりは人も減っている。それでも昨日よりは多く感じるが。

依頼を頼むのはきつとあのカウンターの女性に言えばいいのだろう。テオルがそうしてたし。

相手の勘違いを利用するためにも、下手に出てはいけない。強気で行くのだ！

「こんにちはっ。どういったご用件でしょうか。ってあなたは……」

「す、少し伺いたいことがあるん、だけでも」

「はいっ、なんでしよう」

意外に難しく感じるこういうの。頼む立場なのに下手に出ないってなんかこう、難しい。

「塔に……、ああ、古塔に行くのにはどれくらいの資金が必要、かの」  
「古塔に、ですか……」

あ、いけないいけない。このままじゃただの旅行者みたいだ。ハンターも必要なのだ。それを伝えないと。

「うむ、ハンターを伴って古塔へ行くこうと思つて、の」  
「えつと……、護衛の依頼つてことでしょうか」

「うむ、その必要資金がどれくらいか知りたくてじゃ」

今気づいた。やばい私年寄り口調だ。でもしょうがないんだ。偉い人を想像したら、長とか、今朝みた竜人のお爺ちゃんとか、お年寄

りばっかりだもん。でもなんだかしやべりやすい。なんていうか、ノリノリになってしまいそうだこの話し方。

「護衛ですと、距離やその土地の危険度、連れていくハンターの能力で依頼料が変わってきますので、一言では難しいですが……」

「ふむ……、ざっくりとした数字でもよい」

「古塔なので、飛行船を使いますし、危険度も高いためハンターの質も高くなるので……、だいたいですが」

ゴードンでは8万って言われていた。高くても10万で止まってほしい。ほんとうにお願いします。

「4万から5万zだと思えます」

え。

「高くても、5万と？」

「はいっ、ちようど今塔に出発しているハンターさんがおりまして、その人の報告次第では金額が上下しますがそれでも5万までかと。たぶんそろそろ戻ってくるはずですが」

あれ？ 何？ 私の中でゴードンの人々は隙あらばだましてくる危険な人って認識がどんどん強まってくるんだけど。紹介状あったら8万だったんだよね？ なかったら5万？ え？ 無くて本当によかった。あとは優先度の問題だけど、ぶっちゃけ滞在費に余裕が出るならこの程度つてなりそう。

「それは真実かの。ああ、金額のほうじゃ」

「は、はい……。あ、ですが今言った費用は優先度が低い状態での話です」

ほうほう。なるほどなるほど。優先的に回してほしければ追加料金なのね。

「ギルド側で緊急性が高いと判断できる理由の依頼であればあまり関係ありませんが」

「ちなみに、優先度を金銭で上げる場合はいくらくらいになるのじゃ」「そうですね、2万から10万つて、結構幅があつて一概には言えないですね……」

たっけえ……。今の所持金は12万ちよい。優先度をあげてもら

おうとして15万必要ですって言われたら困るしなあ。かといって中途半端なお金じゃ本当に優先度が上がってるのかわからない……。」「ふむ、参考になった。後でまた来るのじゃ」「は、はいっ」

勢いが大事だが慌てすぎもダメだ。一度落ち着いて考えて、そして依頼を出そう。このまま追加料金なしだと優先はされなさそうだしね。古代衣装を着てるだけじゃこれはきつとダメだろう。

そう思い、カウンターから離れた。シー・タンジニヤでテオルとご飯を食べながら少し考えよう。

「あの女の子、イメチェンでもしたんでしょうか……」

カウンターの女性が何か呟いてた。……。、そーいやあの女性とはすでに何度も顔を合わせてた。顔を覚えられて、いたのだろうか……。

忘れよう。今の女性のつぶやきを。

忘れよう。考えだしたら、きつと私は動けなくなってしまふ。だから忘れよう。

「タンジニア鍋を2つ頼みますー！」

「かしこまりましたニヤ〜」

「俺はモガモ貝とマトンの火山カレーがよかつたんだが……」

「タンジニア鍋がおすすめだから、一度食べたほうがいいから」

テオルと共にシー・タンジニヤである。できるだけハンターすぎるどころから離れた席を座っている。今回こそタンジニア鍋を味わえるぞう。

「火山カレー……」

「そんなことよりどうしよ」

「……、何がだ」

「塔への依頼の優先度の話。追加料金かそれとも依頼を受けてもらうのを待つかってことよ」

「……、俺たち古りゆ、古代文明関係者が古塔へ急いでいる、という旨

「でいけそうじゃないか？」

「無理でしょ。そんなんだからお金なくなるのよ」

「くっ……」

テオルが最初に言った特別な人物は優先的に回してもらえて、きつとお金を特別に払う人物ってことだったのだろうあの感じだと。

「しかし、他にどうしようもなくなかないか？」

「なんかないの？ 古塔にすごい危険なやつがいるかも、みたいな情報ないの？ 明海竜のときみたいなそれっぽい情報とかさ」

「古塔はあまり知られてない場所だと言っただろう。そう簡単に情報があるわけがない」

本の知識からそんな情報がでないだろうか。そう、テオルに期待したのだがなさそうだ。

「うーん、古塔の情報がちよつとでもあればなあ」

その情報からテオルにいそうな竜を予想してもらって、それっぽい理由を考えてもらって、そして古塔へいく依頼を出してもらっていう作戦に持つて行けるのに。

今ある古塔の情報は、ハンターズぎるどが言うには危険な場所。あとは……、電波少女いわく楽園。電波少女の情報はいらぬか。古代文明となんらかの関わりがある、だっけほかは。

「お待たせしましたニヤ。タンジア鍋だニヤー」

「ありがとうございます」

「……、火山カレー」

「あ、こいつのことは気にしないでください」

タンジア鍋がきた。お腹がすいてたら名案もでないだろうし今は食べるのだ。

鍋に心躍らせていたら隣にすごい髪型の男の人が座った。

「すまねえ、火山カレーを頼む……」

「かしこまりましたニヤ〜」

テオルが羨ましそうに男の人を見始めた。

タンジア鍋美味しいから、あとで一緒にタンジア鍋のおいしさを語

り合う相手がほしかつたって理由で勝手に注文決めたわけじゃないから。純粹な善意だから。だから火山カレーを頼んだ男性をそんな羨ましそうに見ないで。

「ほら、テオル。鍋に集中する」

「……、火山カレー……」

子供かこいつは。

それにしても隣の席の男性はなんとも目立つ。銀色の髪で、なんとなくか、柱みたいに逆立っているのだ。銀の柱の髪だ。ほうき頭ともいえる。

火山カレー抜きにして思わず注目してしまいそうだ。

「テオル、冷める前に食べよう。あ、やけどには気を付けるんだよ」

「……、ああ」

鍋を堪能していたのだが、途中から鍋より気になるものができて集中できなかつた。

隣から漂うカレーの香りが凄まじい。

鍋美味しいよ。美味しいけど、カレーのにおいで、嗅覚と味覚のズレが……！ くっ……！！

誰も悪くない。悪くはないのだ。ただ、運が悪いだけなんだろう。けども……！ おのれ！ 火山カレー！！

鍋を食べ終わったが、なんだか悔しい。だめだ、切り替えよう。カレーへの恨みは捨てるのだ。今は古塔へ行く作戦を立てないとなのだ。

移動はせずにシー・タンジニヤのまま、テオルと相談だ。

「食べ終わったことだし、お腹いっぱいになったところで何か古塔について思い出した情報とかない？」

「だからないと言ってるだろう……」

むう。そう都合よくはいかないか。

「……、何か用か」

およ？ 誰かきたの？ テオルの目線の先を見る。というかこの

向きは

「今、古塔つったか……?」

銀のほうき頭の持ち主、もといすごい髪型の男性だ。しかしこの反応、もしや古塔について知ってるのだろうか。思わぬところで情報きたということか。

「それがどうした」

「なにか古塔について知ってるんですか?」

テオルは知らない人にすぐに敵意を向けるのはやめたほうがいいと思うよ。せつかくの情報源だよ。そりや変な頭だけど。

「いや……、俺は知らねエ……、いや……、今ならわかる……」

知らないと言った直後に今ならわかるって何言ってるんだこの人。

しかし、この感じ……、きつとこの人も変人だ。もう私は悟ってるよ。都会で会う人はみんな変人なんだって。

「要領を得ない言い方をするな。知ってることがあるなら話せ」

「あ……? なーんでおれが話さないといけねえんだあ……?」

つてなんかすごい険悪な雰囲気になってる!

「す、すみません! こいつちよつと礼儀知らずなだけで! 私たち古塔についての情報がほしいんです! 些細なことでもいいから教えてくれないでしょうか……?」

何か知ってそうだけど怖い。テオルが今まで会った人たちは偶然優しい人たちがばかりで、この人の反応がきつと普通なのだろう。だけれどもやっぱり怖い。

聞いてはみたがただでは教えてもらえないだろうな、と心の中で諦めていた。

「お嬢さん、怖がらせて申し訳ない。だからそんなに怯えねーでくれねーか」

予想外に紳士的な言葉が飛び出してきた。すごい髪型だけど失礼なことしなければ普通な人なのだろうか。

「それよりお嬢さんには笑顔が似合うぜ。おれに素敵な笑顔を見せてくれねーか? 古塔のことなんて忘れてよ……」

鳥肌たった。

何このほうき頭。ナンパってやつだよね今の。突然のナンパに普通に鳥肌たった。

それより古塔だよ。やっぱり何か知ってるよ。

「古塔についてやはり知ってるようだな。気色の悪い言葉を吐いてないで古塔について言え」

テオル、気色の悪い言葉つてのは同意だけどさ。喧嘩腰はやめよう？ この人絶対沸点低いよ。

「あ、あの古塔について教えてください」

意識をこつちに向けさせなきや。そう思つて発言した。

「……、おれは古塔についてはホントーに知らねーよ」

あれだけ意味深な雰囲気漂わせてそれはないと思うけど。

「だが、あそこにいた奴についてはわかる……。ついさつき古塔から戻ったところだから……。」

「え、そうなんですか？ ってことはハンターの方？」

「ああ……」

古塔に行つてきた人とは、情報がぜひとも欲しい。気持ち悪くて怖い人だけど、情報が欲しい。

「本当にどんな情報でもいいんで教えてください」

ほうき頭の男の表情は暗い。どこか怯えているようだった。

「……、どんな目にあつたのかはわかりません。なんでもいいので教えてくださいませんか」

この強面ほうき頭は古塔で恐ろしい目にあつたのだろう。

「……、誰も信じなかつたことだけだな。だがまあ、ありのままに起こつたことを話すぜ」

「お願いします」

怯えた様子のまま、男は言った。

「あいつが、ふつと突然目の前から消えたと思つたら、俺はやられていた……。何が起こつたのか、把握すらできなかつた……。だが、今なら分かる。あいつは、姿を消す力を持っているんだってなッ！」

あいつって誰だよ。

## 星天月地

「あいつが、ふっと突然目の前から消えたと思ったら、俺はやられていた……。何が起こったのか、把握すらできなかつた……。だが、今なら分かる。あいつは、姿を消す力を持っているんだってなッ！」

あいつって誰だよ。

「だがギルドの連中はおれの証言を信用してねえみてえだ……」

「はあ、ところであいつってどなたです？」

「おれの古塔調査の邪魔をした、胸糞わりいモンスターだぜ……」

古塔にモンスター。それも厄介そうな。しかもぎるどが把握していない。

すごい。求めている条件が揃ってる。姿を消すっていうのが本当にあるのかわからないけど、何かの錯覚だろうけど。証言が得られたのは大きい。

「どうやって姿を消してるのかわからねエ……。超スピードとかそんなチャチなものじゃねえ。もつとよくわからねえ何かを味わったぜ……」

「それで敗北してきたというわけか」

「ああ〜？ 戦略的撤退ってやつだッ！ ドクサレがッ！」

確実にテオルとこのほうき頭さんの相性悪い。

「とにかく、古塔には今はいけねえと思うぜ。おれの証言をギルドの連中は信じてねえが、何かがいるってことで古塔への警戒度が上がってるだろ〜しな」

「ええ……。あまり滞在期間を延ばしたくないのでなんとかならないでしようか……」

「おれに言われてもよオ〜……。つーかなんでそんなに急いでんだ？」  
焦りたくもなる。滞在期間が延びたらその分お金が減っていくし、なによりテオルの嘘依頼がデタラメと発覚してしまう。だから発覚する前に古塔へ行きたいのだ。



しかしその理由を正直に話すわけにもいかない。

「里長からの任命で古塔へ早く行かないとなんです」

嘘をつくときは事実の中に混ぜ込むといいらしい。まあ嘘でもなんでもないけどこれ。ちよつと私情いれてるだけだしね。

「ふうん、まあなんであれ、あいつがいる限り厳しいと思うぜ」

「そのモンスターをハンターに倒してもらえばいいんじゃないですか？」

「そくなんだけだよオ。おれの証言だけじゃ錯乱しただけとか勝手ぬかしやがつて、依頼を通してもらえねえんだ」

あ、そういえばこの人もハンターだった。

ハンターと知り合えたのだし、この人に古塔への護衛を頼んだらいいんじゃないだろうか。

冴えわたる発想だ。なんとかして頼み込もう。

カレーを食べ始めたほうき頭さん。っていうかまだ食べてる途中だったんですね。食べてる途中でごめんなさい。

「私たち、どうしても早く古塔へ行かないといけないんです」

「ん？ ああ、らしいな」

明海竜の狩猟に出た人たちが戻る前に行かないとなんです。戻ってきたらって想像すると怖いんです。

改めて現状をほうき頭さんに説明する。

「ハンターを連れてないと古塔へ行けないんです」

「まあそうだろうよ」

「なので私たちと古塔へ行つてほしいんです」

「……、おれに？」

「はいー」

「このほうき頭さん以外ハンターはいないでしょうに。」

「ナナリ、そいつに頼むのはやめておいたほうがいい」

「え、なんでよ」

テオルが反対してきた。まあテオルとは相性が悪いから嫌なのはわかるけども。でもこの人に頼めば依頼金の優先度上げのための、追加金なしで優先的にやつてもらえるかもしれないじゃないか。この

人に進んで私たちの依頼を受けてもらえばいいのだ。自発的に！

「そいつはそもそも古塔から逃げかえってきたやつだ」

「ああ〜？ さっきも言っただろうがよオ〜？ 戦略的撤退ってやつだッ！」

まあそうなんだけど、護衛の依頼だし狩猟の依頼じゃない。だから別に大丈夫、だと思いたい。別にこの人に、負けた相手と戦ってくれってわけじゃないんだから大丈夫大丈夫、きつと。

「大丈夫だよ大丈夫。むしろこの人以外に頼めないよ」

「何が大丈夫だというのだ」

古塔にいったことある人なのだ。内部を少しは知ってるだろうし、何かに襲われても逃げることでできるほどの腕前って考えたら最高にほしい人材じゃないか。戦う必要はない、生き延びる力が必要なのだ。

「……、随分とおれを買ってくれてるみてえじゃねえか。おれ以外にあてがないからかい？」

「それもまあありますけど、でも他にハンターの知り合いがいても、あなたに頼ろうとしてたと思います」

「そういや又ハハハうるさい貧乏人もハンターだっけ。貧乏ハンターとほうき頭ハンターって、イロモノばかりだわ。」

「貧乏ハンターとこの人だったらやっぱりこの人だわ。やっぱり古塔経験有、つてのが大きいからね。」

「ぶっそうさん」

カレーを食べ終わったようだ。冷めてなかった最後の方？

「そんな風に言われたらよ……、断るに断れねえなア……」

「じゃあお願いできますか！」

「ああ、いいぜ。おれもやられっぱなしじゃ気がすまねえ……。第三者からの依頼となりやあ錯乱していたとか難癖つけてくることはねーだろうしな」

私も錯乱してたんじゃない……、って思ってますごめんなさい。心の中で謝っておきます。そんなにぎるどの人たちに錯乱扱い受けたのが癪だったのね。

「急いでるんだろ？ 普通に狩猟依頼を出さずによ、あいつを早いこ  
と倒さなくちゃならねえって理由つけて依頼出すんだぜ。その際お  
れを指名してな。じゃねえと中々通してもらえねえハズだぜ」

「そうなんですか？」

「ああ、古塔の危険度がたけえからな。何かしらの理由がねえとだめ  
だ」

護衛依頼で出すより狩猟依頼で出さないと依頼が通らないのか。  
なんでかよくわからないけど、ハンターのいうことならきつとそうな  
のだろう。

でも別に狩猟してもらわなくてもいいんだけど……、それに狩猟依  
頼だとこの人に報酬いかないんじゃないだろうか。護衛が本当の目  
的だから狩猟は達成する必要ないし……、損してでも人助けする性格  
の人なのだろうか。

いや、それはないか。そんなお人よしそうには見えない。

そういやナンパされたんだこの人に。これは下心からの申し出だ  
きつと。

下心からとはいえ、正直この手を逃すわけにはいかない。できるか  
ぎりテオルから離れないようにして、この人と私が二人きりにならな  
いようにしてればきつと大丈夫だ。

「それじゃあ依頼を出してきますね」

「ああ、ちゃんとおれを指名するんだぜ」

さてさて、本日3度目のハンターすぎるとである。

と言つてもシー・タンジニヤとあまり距離は離れてないから改まつ  
た気持ちになるわけではないけど。カウンターには4人ほど並んで  
いる。カウンターの女性に依頼を言うためにとりあえず並ぶ。待つ  
てる間に今からやることを頭に浮かべる。

古塔での狩猟依頼、それも普通に頼むのではなく、なにかしらの理

由をつけて。

……、理由どうすればいいの？

「テオル」

「なんだ」

「普通に頼んじやダメって、どう頼めばいいと思う？」

「考えてなかったのか……」

唐突にひらめいた作戦なんだししようがないじゃない。そこに補足でつけられた条件なんだもの。対応できるわけがない。

困った。近いしタンジニヤで待機してるほうき頭の場所に戻って相談するべきだろうか。

「やはり、古代文明関係者を装うしかないだろう」

「それだけじゃ無理そうじゃない？」

「急ぎ倒さないといけない理由、となるとな」

古塔へ早くいかなきゃならないような理由……。里の命令で、じやぎるどの人も納得してくれるか怪しい。共感を得られるような理由じゃないと……。

古塔に引越したいんです？ 意味がわからない。あの泥棒猫じゃないか。

古塔にいるモンスターを早く倒さない人間は滅亡する！ 完全に電波だ。あの泥棒猫の言ってた電波少女のようではないか。

どんどんと列は進んでいく。残り2人の要件が終わったら私たちの番である。まだ何も思いついてない。

「テオル、何か思いつかないの」

「そんな急に思いつくか……。それに俺はまだあの男に依頼を出すのは反対なんだ」

反抗的な。やはり最後に頼れるのは自分だけである。

残り2人だ。落ち着いて考えればきつと名案が出るはずだ。

「お次の方どうぞっ」

残り1人だ。落ち着け。まだ慌てるような流れじゃない。

古塔に住みたいとかいう意味のわからない猫のことは忘れるのだ。住んでどうするつもりだったのだろう。生活絶対大変だよ。家を離

れたら空き巣どころかモンスターに乗っ取られそうだよ。鍵閉め忘れたらおしまいだ。鍵かけてても壊されそうだけど。

「お次の方どうぞっ」

「やべ、財布忘れた」

そう言っつて前の人がどつかへ行っつてしまった。え、ちよつと待つて。前の人がいなくなつたら次私じゃん。

「こんにちはっ、えつと、どういったご用件でしょうかっ」

「う、うむ、用件はじゃな」

咄嗟にまたも年寄りめいた口調になつてしまった。やばい、どうしよ、もうこういう雰囲気でないこう。偉い人の雰囲気を醸し出そう。旅は恥のかき捨てつて言うから……、言うから……!!

「ご、しゅ、古塔での狩猟の依頼をだしたいのじゃ」

テオル君、黙つてないで助け舟ちようだい？ どうしたらいいの。「早いこと退治してくれんと困るのじゃ。さもなければ……、わしが、あれなのじゃ」

「はい？」

「帰れないのじゃ」

「は？」

里に帰れないんです。

あ、なんか今のだと古塔に帰れないつて意味になつてない？ そりや何言つてんだこいつつて感じになるよね。テオルも変な目で見ないで。結構傷つくから見ないで。

「えつと……、古塔に、住んでるんですか？」

これは、この流れは、乗るしかないかもしれない。古代衣装着てるしね、この衣装の紋様が塔に関係あるかもつてゴードンで言われたしね。無理やり関連付けるしかないこれは。

「詳しく話してやる必要はないだろう」

テオルが横から入つてきた。ひよつとして助け舟？ 普段から厨二思考してるから思わせぶりの台詞言いたくなつただけ？ なんにしる助かる。

「わしの住まいなどどうでもよいことよ」

「そ、そうですね、それで狩猟依頼の内容はどういったものですか？  
あ、あと普段通りの普通の話し方で大丈夫ですよ」

どういったものとな。

どういったものなんでしょうか。

古塔に住んでるってことになったっぽい私が頼む狩猟依頼の内  
容ってなんだ。ほうき頭のハンターが倒せなかった奴を狩猟してほ  
しい？　なんでほうき頭の事情が出てくるのってなりそうな気がす  
る。とりあえず迷惑な存在をやっつけてって頼むしかないかな。

そもそも古塔に住んでるっておかしくない？　誰も住んでないつ  
てゴードンで聞いたじゃないか。古塔に住んではさりげなく  
訂正しつつ、繋がりを見せないよ。

あとさりげなく私の話し方普通じゃないって言われてなかった？  
いや確かに普通じゃないけどさ。恥ずかしさがこみ上げるからや  
めてほしいんですけど。

「……、わ、わしはある方にお任せし、ある場所の管理を任されておる  
のじゃが、あれなんじゃ。ぶしつけな下郎めに居座られて、ほとほと  
困り果てた。噂に名高いハンターならば、と思つての、こうして力を  
借りに、山飛び谷越えやつてきたわけじゃ」

「はあ」

私わかったよ。今の返事の仕方はあれだよ。何言ってるのこの  
人、って感じの返事だよ。

本当に何言ってるんだろうね私。

「そのある場所というのが、古塔なのじゃが」

「は、はい」

「とにかく、俺たちは古塔に勝手に住まうものをどうにかしたい。そ  
のついでにハンターの力を見てみたいというのもあるがな」

テオルったら厨二心が刺激されたのね。けどその堂々とした厨  
二っぷりは今だけは感謝するよ。

私を見る女性の目はなんとというか、可哀想なものを見る目と言わん  
ばかりだったけど。

テオルを見る目は、得体の知れないものを見る目、だと思う。

まあテオルは今のところハンターズぎるどでは古文書にしか書かれてない明海竜の情報提供者だしね。古代関係者って私よりは思われやすそうだしね。

「それとこの依頼、あそこのやつに任せたくての」

「あそこの？ えっと、あのすごい頭のハンターさんですか？」

この人もやっぱりすごい頭って思ってるんだね。都会の人気髪型とかじゃないんだね。そりゃそうか。

「あの者は古塔へ以前訪れたのじゃからな」

「そうですね……、でもあの人は古塔へはもう行きたくないって言っていたので……」

「いいや、あの者は塔へ赴く」

下心が理由でだけど。

「あの者が断るようであれば、また出直す」

「わ、わかりました」

「では、お願いするのじゃ」

そう言い残して、その場を離れる。

これ以上この話し方を続けると悶え死にそうだからだ。

シー・タンジニャでほうき頭さんとぎるどの人が話をしている様子を離れて見る。

「フツ、やはりナナリも俺と同じだな」

「やめて、やめて本当にやめて」

「まさに旧き時代を生きた龍だったぞ」

「黙って」

ハンターズぎるどから少し離れた場所で待つことにしたのだが、シー・タンジニャにはほうき頭さんがいるので、そこへ行くときぎるどの人とほうき頭さんの会話の邪魔になるかと思いやめたのだ。

それにしても年寄り口調以外の話し方を私はなぜ思いつかなかったのだろうか。

私の厨二のころの話し方もそういう年寄りめいた口調だった。ここで黒歴史を更新してしまうとは……

そしてテオルの喜びがうざい。私は真人間なのだ。厨二田舎者はお前だけだから。

「そういう依頼金の話しなかったけど大丈夫かな」

「そこはわからんな。やつらの善意に頼るとしよう」

前も善意に頼つてた気がする。

「まあなるようになれ、かなあ」

「……、今でもやはり反対だ」

「そんなにあの人嫌なの？」

「敗北した者が次は勝てるなど、そう都合のいいことはない」

そりやそうだろう。別に勝ってもらわなくていい。護衛なんだし。

「そうだろうけどさ。狩猟って形の依頼だけど、実際は護衛依頼なんだし、戦ってもらわないじゃない。危険から遠ざけてくれたらそれでもいいんだし」

「……、ん？」

「ん？」

「狩猟依頼だろう？」

「狩猟依頼だけど護衛依頼だよ？」

「いや、しかし」

「ああ、ぎるどの人には狩猟依頼って言ったけど。テオル、あのハンターの人との話聞いてた？ 狩猟依頼でいかないと回してもらえないって言ってたじゃない」

「言ってた、か？ いや、だがあの流れは……」

「もう、すっかりしてよね本当に」

ちゃんと聞いてなかったのかこいつは。

「いや、あれは普通の狩猟依頼じゃダメだという意味で」

「だから早めにとって理由つけたじゃない」

「いや、そうじゃなくてだな……」



「もう後でちゃんと説明してあげるから。実は護衛依頼ってぎるどの人に聞かれたくないんだし」

聞いてなかったのに自分が納得できないとごねるとは。わがままにも困ったものだ。

事細かに説明してもいいけど、ここではあまり話したくないので無理やり切り上げた。

「タンジアの滞在期間はそんなに長くなかったけど、なんだかようやくって感じがするわあ」

「まだ1泊しかしていないぞ」

「そうだけどちよつと色々ありすぎて……」

「まあ、そうだな……」

「悪食家に暑苦しい貧乏人ハンター、そのあと泥棒猫。そして次の日にはお金を消し飛ばす自称古龍さまだからね」

「……」

だんまりである。原因のうちのひとつはだんまりである。

「二日の密度じゃないよこの濃い出来事。どう思う？ 4万4400

Z無くした方はどう思います？」

「しつこいぞナナリ！」

「あ、あの、お話中すみません。先ほどの依頼の件ですけど」

「え、あ、はい！ うむ！」

「正式に受理されました。それで、依頼金なのですが、えつとお二人も塔までの同行ということでもよろしいんでしょうか」

「うむ」

「でしたら塔までの飛行船の代金も含まれまして、4万8000Zになります。大丈夫ですか？」

「うむ、大丈夫じゃ」

やったよ。やすいよ。ここまで来るのに随分と長かった。感慨深いものがある。

財布からお金を取り出し支払う。もう誰にも私たちを止められない。

「はい、確かに4万と8000Zですね」

「すぐに出発できるかの」

「はいっ。……、あの、差し出がましいかもしれませんが、普通に話したほうがいいと思いますよ。そのうち恥ずかしくなって眠れない日が来ちゃうかもですし……」

「……」

「俺たちにとってはこの話し方が普通だ。お前の物差しで勝手に測ってくれるな」

「ちよ、テオル」

「余計なことを言っでごめんなさいっ。……、そういう時期は誰にでもありますもんねっ」

「い、いや、私は違うくて……」

「ふんっ、さっさと行け」

「で、では失礼しますー!」

私、もうタンジア来れない。

本当になんで、あんな話し方を選んでしまったのだろう。

タンジアの空は、やっぱり憎たらしいほど青かった。

## 塔に蠢く光

人は空を飛べるようになってきてはいない。

「クク、人間の造ったものにしてはなかなかどうして、空を駆けるのはいいものだな」

大地から離れてはいけないのだ。大地の逞しさから離れた人はかよわいものなのだ。

大地に足をつけていれば、この風も心地よく感じれたかもしれない。

「ナナリ、見ろ。島の形がよく見えるぞ」

滅茶苦茶怖い。風めっちゃこわい。景色も怖い。

遠くを見てる分はよかつたけど一度高さを確認したら超こわい。

現在、飛行船に乗ってます。古塔に向けて、と言つても直接古塔ではなく、少し離れたところで降ろしてもらつて、そこらか徒歩だとか。

「やはり飛ぶのはいいものだ。俺も真の力を思いだせれば飛べるのだが……」

船内室に行こうにも、テオルが私を掴んで離さない。

外の景色見たいならひとりで見ろ？ こんな高いところにいるらるか！ 私は部屋にこもる！

「私は船内に行くから……、景色はテオルだけで楽しんで……」

「何を言っている。船内は息苦しいといって出てきたばかりではないか」

ぐぬ。

確かにそうだ。

船室ではあのハンターが武具の手入れをしているのだ。それはもうすごい真剣に。

話しかけたら気が散ると怒られたほどだ。

護衛のために集中してくれてるのだから文句は言えないが、息が詰まりそうなくらい重いのだ。

「あー、そういえば中もあれかあ……」

そう考えるとここのほうがいい、かな？　あまり端の方へは行かずにじっとしてたらいいか。ああ、早く地面につきたい。地面が恋しい。

思えば遠くまで来たものである。地面が本当に遠い。地面だけじゃなく里からももうずいぶんと離れたものだ。

里長からのふわふわな内容の任でこんなところまで来るとは。

今更ながら本当に古代衣装を置いてこいって内容だったのだろうか。ちゃんとした解読じゃなくてなんとなく、というか直感での解読だしなあ。

まあどうでもいいか。私たちはただ課せられた任を全うするだけなのだ。

そのためにもどうかこの飛行船が墮ちませんように。

飛行船から降ろされたところにはもうすっかり夜になっていた。降ろされた場所は自然の景色とは言い難いものだった。

「確かに、これは古代文明と関係のある土地だな」

テオルが感想を言う。その言葉の通り、明らかに人の手で作られたであろう壁の模様、石畳、崩れた柱、階段。ただどれも長い年月でぼろぼろである。苔生した遺跡の一部のようだ。

「ずっと昔に作られた建物の残骸だぜ。もうちよつと歩けば塔が見える。残骸でなく、しつかりと塔の形をしたやつだ」

ほうき頭さんが補足で説明した。とりあえず塔の中に服を置いていけばいいだろうか。それにしてもこういう場所はなんだろう、わくわくする。

冒険という感じがすごいするのだ。だがはしゃいではいけない。

危険な場所でもあるのだから。

「ところで確認したいことがある」

テオルが真面目な顔をして言いだした。

真面目な顔をしているがくだらない内容の確率が高い。

「今回の依頼目的を確認したいのだが……」

未だに把握できてなかったのかこいつは。そういえば飛行船に乗ってからじっくり説明しようと思ってたけど、あまりのはしやぎっぷりで忘れてたか。

「そりゃ私たちの安全のためだよ」

「ああ、あいつにはオメーらに一切手を出させねえぜ。だから安心しな」

心強いことだ。気合十分だこのハンターさんは。

「つまり、護衛、だよな？」

「まあそうとも言えるな。ついでだしオメーらを近くの村までの護衛もしてやるよ」

「近くの村？」

「この辺に住んでるんだろ？ だからって塔でサヨナラじゃあ味気ねーしな。せっかくの機会をくれたんだ。そこまでやらしてくれよ。それにおれもこの大陸の街にちよつと行ってみたくてな」

「な……、ちよつと待て……」

テオルが待ったをかけた。私もなんだか理解できない。ん？  
え？

この辺に住んでるって、え？ 私たちが？

「ん？ 違うのか？ 目的達成後現地で解散って聞いてるけどよ」

え、ちよつと待ってちよつと待って。解散？

ひよつとして、紹介状なしでも安い理由って、往復代金がなかったからってこと？ 片道だけ？ え。

「あ、あの、タンジアに帰る飛行船に私たちも乗りたいんですけど……」

「え、まじで？」

「まじですマジマジ」

安かった理由がわかった。今更わかってしまった。とはいえこのまま流されちゃだめだ。タンジアにいたら土下座でも雑用でもなんでもして許してもらわないと。ここで解散とかのたれ死ぬ。

「……、大マジで？」

「大マジです」

「……あー、その、帰りの飛行船、ねえんだわ」

「なんで!？」

「……、どういうことだ」

真面目になんでだよ。

テオルと私だけじゃなく、このほうき頭もいるのに帰りの飛行船がないっておかしいでしょ。

「この大陸のギルドに顔を出しに行こうと思つてよ……、この依頼をこなすついでにつつてことでギルドに伝えてあつてよ」

「だが狩猟依頼という形だぞこれは。狩猟した竜の回収にギルド側から飛行船が再度来るんじゃないのか」

なにこのほうき頭は仕事ついでに観光しようとしてるんだ。そういう気持ちがあるいろとダメにするというのに全く！ まったく!!

「それなんだけだよ。どうも今回の対象が不明すぎるから、モンスターは古龍観測隊に引き渡すらしくてよ。その観測隊が回収にくるんだつてよ。報酬も観測隊から受け取ってくれてなつてよ」

「ならその観測隊の飛行船に！」

「いや、この大陸のやつららしくてよオ。飛行船じゃなく陸路で回収する手はずなんだわ」

「つまり飛行船はこの地には……」

「来ないな……」

この世界は残酷だ。いつだって、こんなはずじゃないのに、で溢れている。

「……、どうしよテオル」

「……、俺が聞きたい」

「あ、あれだ！ おれと街まで行こうぜ！ 街にいつて飛行船に乗せてもらえばいいじゃねえか！」

……、それしかないだろうか。

金銭面の不安がやはり私たちに付きまとう。街にいつても飛行船代がどれほどになるか……。

「とにかく行こうぜ！ 考えてたつてしよーがねえぜ！」

「そつすね……」

いつの間にか、この胸にわくわく感はなくなっていた。

「夜霧か……」

古塔に近づいてくると、だんだんと霧が出てきた。

なんとなく神秘的な場所で霧が始めると神秘さ倍増である。

「あいつが現れた時もこんな霧の夜だったぜ……」

こんな霧の夜に突然襲われたら、錯乱して相手が消えたと錯覚するのも頷ける気がする。

けどそれを言ったら怒られそうだよ。空気の読める私は何も言わないよ。それに危険性が高そうだからね今は。あまりふざけてられない。

霧のせいで若干視界が悪いけど、全然見えないわけじゃない。ここは平たい場所だし見渡しもいい。モンスターがいてもすぐ気づけそうだけど、そんな油断が命取りなのだろう。

慎重に歩みを進める。

数分ほど歩いていたらハンターの男が立ち止まった。

「……………、このまま真っ直ぐ行きな。そうすれば塔に着く。中には大型は入ってこれねえはずだ」

「はい？」

突然どうしたのだろう。周囲にはモンスターらしき影はない。

ひよつとして緊張からお腹が痛いのだろうか。

「どうしたんだ」

「……、ハンターにはよ、なんとなく、でけえ敵に見られてるっつー霧

「困気とか感じれるんだわ」

「それをいま感じてる、と？」

「ああ……、確実に居やがるぜ」

周囲にはやっぱりそれらしき影はない。

湯あみの最中に視線を感じたけど気のせいだった。とかそういう勘違いではなからうか。

「でも周囲には何もいなさそうですけど」

「言っただろ、あいつは姿を消せるってな。守りながら戦うのはちよいとばかりつれえからよ。だから行きな」

護衛する人を何もないと置いているのはさすがに困る。たとえお腹が痛いと言われても困る。

ここにはそんなモンスターいないのだから、廁なんてないから少し離れたところでやってきなさい。ちゃんと待っててあげるから。

そんな考えを、どう丁寧に言い繕うか考えていたら男が何か球状のものを取り出し、何もない方角に投げた。

そして球から響く高音。

突然の行為にびっくりして耳鳴りがひどいんですが。

文句を言おうとしたらでかいのがいた。

めっちゃ近くにでかいのがいた。

「えっ」

「なっ……」

「走れ！ おれがこいつをやるー」

言われてすぐに全力で走り出す。

なにあれ。なにあれ。いきなり目の前に現れたんですけど。

ありのままに起こったことを話すと、ほうき頭ハンターが大きな音を出す玉を投げたと思ったら、すぐ近くにでかいモンスターがいた。何を言ってるんだか私でもわからない。

お腹が痛いと思い込んでごめんなさい足止め本当にお願ひします。とにかく今はひたすら走るだけである。



「ここなら、大丈夫、だよね……」

「たぶん、な……」

テオルも私も息が切れきれだ。洞窟、ではなく天井が残ってる建物の中に入りこんだ。

階段とかあるよ。大昔のここの生活を想像すると何とも言えない気持ちになったかもしれない。今はちよつと疲れてるのでそんな余裕はない。

「本当に、姿が消えてた、ね」

古塔は危険というハンターすぎるどの情報は正しかった。すごく正しかった。

古塔は楽園という電波少女の情報は完全に間違っている。

「ナナリ、ここも危険だ」

「え、なんで？」

水場があるけど水場も浅い。柱とか倒れてるけどこれ以上崩れる感じには見えない。安全そうだけど。っていうかさつきからキラキラ綺麗だ。光る玉がふよふよしている。

……なんだろうあれ。

「大雷光虫だ」

「なにそれ？」

「言ってしまうえば巨大な虫の集合体だ」

「まじ？　そう思うと綺麗なのに気持ち悪く思えてきた」

「ちなみに攻撃性が高い。赤い光を放ってるやつは特に危険だ。放電しながら纏わりついてくるぞ。中には死に至るほどの爆発をするやつもいるらしい」

「まじ？　落ち着いて聞いてほしいんだけど、なんか1つ赤く発光しながら近づいてるんだけど。テオルの後ろのほうに」

「マジか」

「まじで」

「走る」

「うん」

テオルが走り出した。

続いて私も走り出した。

古塔危険すぎるんですけど。

後ろを確認する。光の玉は来ていない。

左右を確認する。謎の模様の壁があるだけだ。

前を確認する。どっかに繋がってるっぽいけど光の玉とかはない。

「なんか、どンドン奥に入っちゃってるよね私たち……」

「一応目的地ではあったし、な……」

目的地がこんなにも危険だなんて。

というか護衛の人ともはぐれた今ってかなりヤバイ気がする。足止めはもういいんで早く来てくれないだろうか。ここまで幸い一本道だったし。

「しかし、さすがは古き時代の建造物だな。どこを見ても心が躍る」

「元気だね……」

さつきまで疲れてたのに、壁画や模様を見てワクワクテオル君状態になってしまったようだ。

「とりあえずこの辺に古代衣装を置いといたらいいかな」

「何を言ってるんだナナリ。俺たちの里の宝をこんな場所に置くというのか」

何を言ってるんだ。こんな場所に置くためにここまで来たんじゃないか。

「塔の頂に置くべきだ。というわけで行こう、ナナリ」

「何を言ってるんだ」

なんで頂上目指すのさ。

こんな危険な塔でこれ以上冒険をしたくないよ。

「頂上がどれくらいなのかわかってないんだしもうここで……、つていないし」

先に行ったようだ。古龍設定の血が騒いでるせいか活発になってるのだろうか。

ここで待っておこうか。そのうち戻ってくるだろう。

テオルにも困ったものだ。いつものことになっているけども、困ったものだ。

こんな危険な場所でワクワクして奥へ奥へ行くのはどうかと思うんだ。

あとね、幼馴染をね。

こんな危険な場所に置いていくのはどうかと思うんだ。

結構時間たってるのに戻ってこねえ。

テオルに何かあったのだろうか、という不安が湧き出る。だがそれよりも、私のこの状況、危険すぎない？

独りだよ。この状態で変なモンスターが出たらどうすればいいの。

あのほうき頭ハンターが来ても危険だよ。下心ハンターと二人きりとか貞操の危機だよ。

そういえばあのハンターは無事だろうか。足止めでいいってことはわかってると思うから無理はしてないと思うけど。別にあいつを倒してしまつて構わないだろう、とか考えて挑んでなきやいいけど。

今の状況を考えると私のやれることは、大きく分けて3つ。

1つ目、塔の奥へ進み、テオルと合流する。戦力的には危険は変わらないかもだけど、合流可能性は高いし、モンスターの知識については豊富なため、遭遇しても安全策を見つけるかもしれない。

2つ目、このままこの場所で待機。今のところはここが安全だ。いつまで安全なのかは不明だし、もしものとき、戦力的にも知識的にも危険。

3つ目、塔の入口に戻り、ハンターと合流する。合流できれば戦力的に超安心である。だが合流するまでが超危険である。あと貞操にも危険である。

一番の理想は2つ目で、そこに加えて、テオルが戻ってきて、ハンターとも合流ができるという状態。

しかし私のここまでの旅路によって培われた勘が告げている。絶対そんな都合よくいかない、と。

この旅路で都合よく進んだことなどあっただろうか。いや、ない。なので1つ目か3つ目を選ぶべきだ。

というわけで私は奥へ行きます。

戦力とか知識とか色々考えたけど、幼馴染か下心狩人か、と考えたら幼馴染一択でした。

「この塔、造ったやつは、絶対バカだよ……」  
進むんじゃなかった。

何この段差。1段1段上るの超苦勞するんだけど。全身運動しまくりなんだけど。今日は息切れしまくりである。

これひよっとして古代時代の階段だったりするの？ どんだけ古代人は足長なの？

そしてテオルとはまだ合流できていない。

まさか中央の吹き抜けに落ちてたりしてないよね、と恐る恐る覗き込んだが悲惨なものはない。あと高すぎてクラっときた。

「絶対、この塔、人間が住む場所じゃ、ない……。巨人でもいたの……。入口のほうは普通の階段だったのに、なんで中はこうなったのか。」

それとも長年の月日で本当の階段が崩れて、ここは階段ではなくただの模様のな何かなのか。

建築についてはさっぱりだからわからない。私にわかることなんて、ガーグアの卵の取り方と特産キノコの見つけ方くらいだ。

とりとめのないことを考えながら登っているけど、しんどい。だからといって、今更戻るのもきつそうだ。

しんどいのを我慢しながら、どうにかこうにかすべての段差を登り切った。平坦な道がこれほど愛おしいとは。

廊下つぽいところを抜けるといくつかの普通の階段。そしてまた廊下。普通の階段があったことにもまた感動である。そして再び現れる大きな段差。そして中央の吹き抜け。

ここはきつと修行僧とかのための塔なのではないでしょうか。

しかしさつきと明らかに違うものがあつた。上のほうにテオルがいたのだ。

無事だつたようだ。

「テオルー！」

大声でテオルを呼ぶ。こちらに気づいたようだ。そして慌てた表情で顔の前に手をもつてき、指を一本立てていた。

「なにー！ よく見えないー！ それより戻ろうよー！」

結構離れてるんだからそんなポーズされてもわからないよ。そんなことより戻ろうよ。もう私疲れたよテオル。

テオルは先ほどのポーズのままだ。口の前に指を立てて……、ひよつとしてあれて静かにしろつてことだろうか。

危険な塔で大声は確かにヤバイ。これは本当に申し訳ない。両手を合わせて謝るポーズをした。もう大声出さないので許してください。だから帰ろう？ という意味をこめて。

その意味が通じたのか、テオルが階段もどきを下りだした。

以心伝心できるほど私とテオルの仲が進展していたようだ。ひよつとしてタンジアで厨二口調を使ったため、親しみが上がったのだろうか。だとしたら嬉しくない。

4段ほど降りたあたりで、テオルが最初にいた場所に、バカでかい赤い竜が壁を壊しながら現れた。

なにあれ。絶対やばい気がするよ。またもやばい気がするよ。大雷光虫とかいうのよりはるかにやばい気がするよ。

「ちよ、テオル！ うしろ！ やばい！ なんか!!」  
「分かってる!! ナナリも走れ!!」

なんだあのでかいの。すぐに今まで来た道に戻る。あの巨体ならこの通路の入口は通れまい。けどさつき壁壊してましたよねあいつ……。

この通路で一安心、とか一息ついたら酷い惨劇が起きそうだ。

「テオル！ この入口も壊して入ってくるかも！ だからもつと戻るよー！」

「ああー！」  
テオルに忠告するため振り向いたら結構近くまで来ていた。あのでかいのも。

バタバタ走りながら吹き抜けに落ちないとは、器用さを褒めるべきか、この塔の頑丈さを褒めるべきか。ここは空気を読んで落下してほしかった。

急いで走る走る。最近走ってばっかりだ。

後ろを振り向いたらいる、とかになったら怖いので無我夢中で走り、最初の吹き抜け大階段の元まで戻ってきた。

もう今日だけで一生分は走った気がする。もう本当に疲れたよ。私なんだかとも横になりたいんだ。

「追いかけては、きてない？」  
「そのよう、だ」

今日の逃亡走りの中で今のが一番危機感を感じた。最初の消えるやつは驚きが大きかったけど、足止めしてもらえなし、大雷光虫は動き自体は早くなかった。

だけど今の赤いでかいのはダメだ。あの走り方の圧迫感とか、壁を

壊してた力とか、走ってる最中何度も轟音が聞えたし、命の危機すぎた。

「あんな大声を出すからだ……」

「それは悪かったって思うけど、そもそも塔を登ったテオルだって悪いと思う……」

「責任転嫁というやつだそれは。最初あいつは眠っていたのだぞ。ナリの大声で目覚めたのだ」

「あんなのがいた時点でそこをすぐに離れなさいよ。そしたら私だって大声出す必要なかったかもじゃない」

「だからそれは責任転嫁と言ってるだろう」

ぐぬう。そりゃ大声出したのは悪かったけどさ。けどさ。私が全体的に悪い、みたいな言い方やめてほしいよ。いや、まあそうかもだけど。ぐぬうう。

「……、ごめんなさい」

「あまりにも気を抜き過ぎだ。ここだけでなく、街でもだぞ」

「悪かったって言ってるじゃない。それに街では鍵を持ち歩いたままだっただけで大したことないじゃない」

小姑かこいつは。

なにかうだうだと言いだしたテオルの小言は聞き流すことにした。

さすがにテオルももう上に登ろうとはしないだろう。あんなのがいたのだから。

そう思い上を見上げると、なんかいっぱいいた。

5、6？ 結構な数のなんかが飛んでいる。

「て、テオル……」

「なんだ。まだ話は終わらんぞ。だいたい公衆の面前で人を札束で叩くなんて何をどう考えたら……」

「上、上。なんかいるんだけど、いっぱい」

テオルが上を見上げる前に、そばにベシヤッと何かが落ちてきた。

明らかに体に悪そうな雰囲気がある。紫のけむりっぽいのが一瞬見えた気がするこの液。

「……、絶対毒だよ」

「毒だな……。ガブラスか。あいつら程度なら今の俺でも問題ない」  
「ダメだこいつ。さっきのやつのせいで感覚がおかしくなっている。  
そりゃさっきのよりかは弱く見えるけど、毒と翼をもつ相手に何が  
できるというのだ。」

「テオル、バカ言っていないで逃げよ」

「大丈夫だ、毒にさえ気を付けていれば」

「いいから逃げる！」

「なっ……！ 引つ張らなくても走れる！」

こんな時でもうだうだと妄想を述べられても、聞いてやる余裕など  
一切ない。無理やり手を掴んで引つ張ると、文句を言いながらも走り  
出してくれた。

バカみたいなことと言って死にました。とか迷惑すぎるのだから、  
ちゃんと逃げてもらわないと困る。そうこうしている間もぺしゃぺ  
しゃとあの毒液が落とされていく。

「確実に私たちを狙ってるよね」

「……、そうだな」

さっきのと違って小さいやつらだ。この吹き抜け場の入口も普通  
に通れてしまうだろう。願わくばしつこい性格じゃありませんよう  
に。

「やはり迎え撃つべきだ。あいつらはしつこい性質があるはずだ」

私の心の中の願い事をあっさり壊す情報をありがとう。

「無理だつてば。飛んでるやつ相手に何ができるの」

「天井の低い場所にいけば、あるいは……」

そんな場所はここにはない。通路の天井もかなり高かった。やつ  
ぱりここは人間の住む場所じゃないよ。巨人とか竜の居住区だよ。

つていうか天井が低くても勝てないよあんなの。小さめだけどそ  
れでも人よりは大きいよ。

少なくとも一般人じゃ勝てないよ。自称古龍でも無理だよ。

それにしても、全く振り切れない。相手のほうが速いし、私たちの  
体力も限界が来てる。

足の感覚も若干怪しくなってきた。



もうやつらの息遣いが聞えるのではという距離まで来ている。

あの毒液吐くときの動作がよく見えるほどだ。なんかおじさんとかがタンを吐く動作に似ている。あんなのに当たると絶対気分悪い。毒がなくても気分が悪くて意識を失いそうだ。

モンスターにもそんな精神的攻撃をする知識があるとは、やっぱり古塔は異常だ。

「耳を塞げー！」

「ほあっ？」

突然の声に思わず間拔けな声をあげてしまった。

その声はほうき頭もといハンターの声だった。

いきなりそんなこと言われてもとっさに体が動くわけないよね。

それにももの凄く疲れていたからね。

ものすつごい大きく高い音が近くで発生したのは覚えている。

気づいたら、知らない天井だった。

## 驚天轟地

知らない天井だ。

ベッドに横になりながら、頭を働かせ始める。

はて、ここはどこなのだろうか。

私は誰、とか続けなくなる。意味のないことを考えて自然とニヤけてしまった。

記憶喪失ごっこは置いといて、実際ここはどこだろう。

木造っぽい建物だから塔ではないようだ。

塔といえば、あれ、どうなったんだっけ。

確か、赤いでかい竜からテオルと一緒に逃げて、そのあと蛇みたいな竜から逃げて、それで

ほうき頭のハンターの声がして、えっと、えっと……

そうだ、テオルは無事なのだろうか。

体を起こし周りを見る。

掛け布が飾られている部屋だ。いろんな小物や本が所せましとある。なんというか、ちよつとごちやごちやしている部屋だ。

そばには丸椅子と机があった。机の上には水差しがある。使つてもいいよねこれ。

部屋の中を一通り見渡したけど、テオルの姿は見当たらない。

まあ、ほうき頭のハンターの声がしたところまでは覚えている。つまり護衛ハンターと合流できて、私はなんでか気を失つて、安全な場所まで連れてきてもらったんだろう。

テオルもこのあたりのどこかにいるだろうし、焦ることはないか。

ベッドの足元には私の鞆があった。とりあえず動けるし、この部屋から出ることにした。

服装も破れてたり汚れてたりしていない。普段通りの古代服だ。  
あ。

古代服を古塔に置いてくるはずだったのに、着たままだ。

なんてことだ。これでは何をしに行ったのかという話になってし

まう。

……、もうこつそり捨てたいこれ。

今はこのことについて考えるのはよそう。

とにかく今は外に出て、あれからどうなったのか、そしてここはどこなのか確認しなくては。

部屋から抜けると、通路に出た。声がどこからか聞こえてくる。とりあえず声のする方向へ歩みを進める。

「お、気づいたか。無事で何よりだぜ」

そこにはほうき頭のハンターがいた。

「あ、どうも。あの、テオル見ませんでした？　あとここってどこですか」

「あの変なやつならこの先にいるはずだぜ。ここについては、なんついたらいいんだろうな」

私が寝てる間にまたテオルと揉めたのだろうか。テオルの呼称が変なやつになっている。まあ変なやつというのには完全に同意だけど。

「ここは地図に乗らねー市場、だな」

「地図に乗らない、ですか」

このハンターはなんだろう、こう、変な言い回しが好きなのだろうか。地図に乗らない市場ってなんだ、闇の市場か。テオルが好きそうな響きである。

「バルバレつつー移動する市場なんだわ。その一部の船がここだな。ちやうど近くで開いてたから乗せてもらったんだわ。そんで今はまた移動中」

「はあ……、大きい行商船？　みたいな感じですか」

「ま、そうだな」

それを聞いてまず思ったことはお金のことだった。船賃とか、いいのかな。気づいたら乗せられてただけだし、いきなり船賃要求とかされないかな。もし要求されたら私を乗せた人に要求するよう頼みこもう。一番怪しいのはこのハンターだ。

「あの、私たちはなんでこの船に乗ってるんでしょうか……」

「なんでって言われてもな、これに乗るのが色々都合がよさそうだったから、だな」

「都合がいい？」

ふと気づいたけどこの人と二人きりってやばいんじゃないだろうか。なにせ下心ハンターなのだ。都合がいいとはそういうことか。私の貞操の危機なのか。私の身に、命には関与しない危険が迫っているのか。

何か怪しげな行動をしたら叫ぼう。全力で叫ぼう。奥にもきつと人はいるはずだ。

「ここはただの市場じゃねー。移動する市場であり、移動するハンターズギルドだからな。海を移動することもあるみてーだし、タンジアにも戻れるんじゃないか。実際もう大陸移動して今はドンドルマに向けて移動中だそうだ」

「あ、あの、私とテオルは、お金にあまり余裕がないので、船賃とかは……」

「自分たちは古龍だなんだって言つといて金欠って世知辛い話だな……。船賃はとられねえよ。まあ飯代とかもねえってんならちよーつとばかし厳しいけどよ」

船賃がとられないのであれば、ご飯代なら大丈夫できつと。つまりこの船に乗っていればそのうちタンジアにも行けるのか。

確かにこれは都合がいい。だがそんな美味しい話があるはずがない。楽観的な考えはもう私にはないのだ。このことについては後ほど考えるとして、それよりも、今古龍とか言つてなかった？

「あ、あの……」

「まだなんか気になんのかア？」

「テオルが自分は古龍だとかイタいこと言いだしてたんですか……」

「ああ。大変だな、オメーもよ……」

「なんであいつはあんなに古龍妄想しちやっってるんでしょうかね……」

そしてなんでその妄想を人に言うんですかね。

「ま、強いもんには憧れるってのはおれもわかる気がするな」

「憧れ、なんですかねえ……。思い込みみたいな感じがするんですけど」

「なんつーかな。自己投影ってやつか？　なんて言やいいんだ？　まあ、憧れの姿になりたい。そんな感じの気持ちっつーのかな」

「それで古龍に憧れですか……」

「普通は英雄とかに憧れるもんだけどな。なんか変な本でも読んだんじゃねーの？」

変な本。すごいその線が濃厚だ。里ではテオルは本の虫だったし、本を読み漁る前までは普通だったし。

「古龍は生態が全くわかってないままだからな。どっかの学者は古龍は人間に化けれるっつーヨタ話を発表したとかも聞いたことあるくらいだよ」

「そのヨタ話を信じちゃった可能性がすごい高いですあいつ……」

「ま、憧れであろうと自分や周りを危険にさせちゃあ駄目だけどな。ガブラスに挑もうとしてたみてーじゃねえか。だからよオ。きつき、オメーは古龍でもなんでもないから無茶するんじゃないやねえって言っつてやったんだけどな……」

「わけのわからない反論された感じですか……」

その様子が目に浮かぶ。そんなはずがないだの、人間ごときには理解できまいだの。痛々しい言葉で事実を否定するのだあいつは。

「俺は古龍になるんだ、つてよ」

「ふむ？」

古龍になる？　なんか思ってたのと違う反論だ。自分は古龍だ、じゃなくて、自分は古龍になる、とな。ああ、真の力が目覚めたら古龍になるのだ、つていう流れか。幼馴染としての経験からか理解できてしまったよ。ちよつと謎な言葉かな、つて思ったけどそういう意味だきつと。

「まあ意味はわかんなかったけどよ、相当憧れてるつてのは伝わったぜ」

「そのうち黒歴史になると思うんで、忘れてあげてやってください……」

旅の恥はかき捨てというけど、この旅は至る所で恥を製造している気がする。近い将来悶える日が訪れるに違いない。

「そういやこの人はいつまで一緒にいるんだろう。」

「そういえば、あなたもこの船でタンジアに戻るんですか？」

「ん？ いや、おれは戻らねえよ。ドンドルマあたりでハンター登録してみるかなって思ってよ」

「はあ」

「……、タンジアではすっかり怯えた姿を晒しちまった。本当ならきつとあのままタンジアで、塔のあいつを思いだしては怯えてたかもしれねえ……。だからよ、オメーらには感謝してるんだぜ」

タンジアを離れるきつかけを与えたことに感謝ということだろうか。でもその結果、塔で怯える原因となった相手と対峙させちやつたから素直に感謝を受け取りづらい。あんな至近距離に出てくるとは思わなかったのだ。それに、こっちはかなり個人的な理由での頼みだったのだからなおさらだ。それも金銭面の負担を減らしたいという、俗物的な理由だからなおさらだ。

「私たちは何もしてませんし、感謝される謂れはないですよ。むしろ護ってくれたことにこちらが感謝ですし」

「……、オメーらは変なやつらだなア」

テオルは変ですが私は変じゃやないです。あとあなたの髪型のほうが変です。言ったら怒られそうだから言わないけど。

「ま、オメーらがなんて言おうとおれが感謝してることには変わりはないねーぜ。なんか困ったことがあったらよ、おれが助けてやるよ」

お金がなくて困っています。って言ったらダメだね。空気が読める私はそんなこと言わないよ。この雰囲気はとりあえず笑顔で誤魔化すのが最善だきつと。何を言っても謎の感謝がくるのだから。罪悪感にこれ以上蝕まれないためにも笑顔でなあなあで済ませるのだ。

「それじゃ私はテオルを探しに行つてきますね」

「おー、あんまり変なことやらかさねーようにしつかり見張つとくんだけ」

見張つても変なことをやらかさすんだよこれが。

このままほうき頭さんと一緒にいても気まずいので、テオルをさがしに通路の奥へと向かった。

通路を抜けると広間に出た。

テオルはどこだろうかと見渡したらカウンターの黄色い服の女性と話しているようだ。なんでだろう。もう一気に嫌な予感がする。

この船は移動するハンターすぎるどって聞いたのだ。何かキートーなこと言つてまた依頼でも出してるのか、それとも騙されてるのか、なんにしろすごい嫌な予感がする。

どうか、ただの買い物でありますように……

「だから何故依頼が受理されないのだ！」

だから何故依頼を勝手に出そうとしてるのだ。

でも受理はされない？ よかった。変な出費にはならないようだ。

「ですからこのバルバレハンターズギルドでは現在依頼を受け付けないんですよ……。ギルド間の問題ですので詳しくお話しはできません……。特殊な依頼であれば可能ですけど……。ですので、ここは『穏やかに微笑みながら』困らせて悪かったな、お嬢さん』と言って諦めてくださると嬉しいですよ！」

「古塔に関する依頼なのだぞ。古塔の依頼は充分特殊だろう」

なんだあの女の人。また変な人と遭遇である。強烈な個性がないと都会では埋もれてしまうのだろうか。そんな考えがよぎるほど強烈な人ばかりじゃないか。

そしてテオルは古塔にまた行く気なのだろうか。まあ服を置いてくるのを忘れてしまったし、その方がいいのか……。

「それは先ほどもお聞きしましたけど……、依頼内容を尋ねたら『遠い目をしながら』新星が瞬いていた。かの竜を制する者が現れた兆しだろう。この竜の出現と、かの者の出現は決して無縁ではないはず

だ。結末も、すでに定められしこと。(真っ直ぐな瞳を輝かせながら)狩人ならできるはず。そう、真の狩人なら……。』ってナチュラルにポエミーなことを言われてさすがの私も戸惑ってるんですよ……」

今すぐ古代服を脱ぎたい。急に詩的な表現を使って依頼を出しちやう人物と、同じようなこの服装をやめたい。

い、いや、これはきつとあれだよ。あの個性強烈な女性が変に強烈な言い方をしてるだけだよ。

「さっきから訳のわからん注釈を入れるな！」

「私のアイデンティティーですから！ でもあなたの言ってた内容は一言一句このままですよ……。 おかげでちよつと取り扱いが……。表情に関しても盛ってませんし……」

ばかな。詩的表現を入れだす厨二に進化していたとは。やっぱりこの古代服今すぐ着替えたい。

しかしこのまま放置しておくのもよくない。古塔のモンスターを実際に見たから、何か理由をつけて再度行く作戦なのだろうけど、その理由付けがあんな詩的な意味不明な内容だもの。変に暴走してさらに訳の分からない事態になる前に、ここは強引にでも止めなければ。

「はい、ちよつとすみませんこのバカ借りますね！」

「あ、はいどうぞ！」

「ナナリ、気づいたか」

「それじゃあ失礼しますねー！」

気づいたとも。勝手に依頼を出そうとしてることに気づいたとも。今の残金いくらだと思ってるのだ。7万Zほどだよ。今度は塔への依頼は陸路だろうから5万もしないだろうけど、タンジアへ飛行船とかで戻る金額を考えると7万Zじゃ足りないんだよ。この船に乗っての移動なら移動費はかからないらしいけど、この船がいつタンジアつくかわからないんだよ。勝手にお金を使わせてたまるか。

「待て、まだ依頼を出せてない」

「いいから移動する！」

とりあえずお金の大切さをこいつに叩き込まないと。現在の残金



と、今後の方針も相談しないと。あと厨二病発言を注意しないと。やだ、言いたいこと相変わらず多すぎる。

文句を言うテオルを引つ張り、カウンターから離れさせる。少し離れた机でちゃんと話し合わなくては。

「何故依頼を出すのを妨害したのだ」

「何故妨害されなかったのじゃ」

しまった。あまりにも尊大な態度だったから、反射的にこちらも尊大な態度で返してしまった。

「俺たちはこの、古き時代より遺る衣を塔に置いてくる使命があるのだぞ。そのためにもあの竜は討伐してもらわねばならん」

確かに塔に置いてくるつもりだったけど。今は少し、こう……、怖いじゃん塔。それにお金の問題もある。帰りのお金とかね。とりあえずそんな複数の理由から塔はダメだ。ダメなのだ。それを納得させなくては。

「えっと、ほら……、古代文明にゆかりのある土地に置いてこいつて話だったじゃない。だからほら、塔以外でもよくない？ ほら、各地に古代文明の痕が残ってるってゴードンで聞いたからさ」

「だがこの衣は塔に関連すると調べてもらったではないか」

「そうだけどき……、お金の問題もあるからほら……、塔には行けても帰りのお金がなくなっちゃうよ」

そういうわけで、塔ではない別の古代文明で妥協してほしい。どこであろうと古代のものならいいじゃないか。大事な今は今なのだ。古代のどこが何の発祥の地とか細かいことはどうでもいいのだ。

今、お財布が危険なのが重要なのだ。古代服のせいで今が危険になるなどダメだ。今、このときのためにも、この服はいつそその辺で捨ておいてもいいと思う。命、お金、大事。

「……、ナナリの言いたいことはわかっているつもりだ」

「それじゃあその辺に服を置く方向で決定だね！」

「今の言葉は訂正する」

あつさり手のひら返しとは、この幼馴染は誇りとかないのか。

「なんであれ、塔のあの竜は狩猟してもらおうつもりだ」

なんでそんなにあの竜を目の敵にしているのか。確かにあれのせいで命の危険が凄まじかったし、服を置いてくるということも忘れるほどの状況になった。だがもういいではないか。怖いし。

「なんでそんなに、あの竜を倒してもらいたいの……？」

しかしここまで執着するとなると、何か本当に特別ななにかがあるのかもしれない。

「……、理由がある」

真剣な表情だ。その表情を見て私は不安に思えた。

だって、このテオルの表情は……

「炎王龍テオ・テスカトルとあの竜が、キヤラ被りをしているからだ……」

真面目に聞くだけ無駄なことを考えているときの表情なのだから。

「それじゃ塔に行くのはなしね。依頼ももちろんなしね」

「何を言っている！ 竜の分際で古龍とキヤラ被りなど許されるはずがないだろう!? やつは討伐しなければならぬ！」

「お前が何を言ってるんだ」

その古龍とあの赤いのがどう似通ってるかなんてどうでもいいよ。私からすれば危険な生き物に変わりはないよ。

「強靱な体躯、赤き鱗を持ち、近づくものをすべて灰燼に帰す龍、それが古龍たる炎王龍なのだ！ 塔にいたやつは巨体、赤い鱗、おまけに

やつの起こす衝撃で爆発が起きていた……。竜が古龍の真似をしようなど、身の程知らずにもほどがあるというものだ！」

「すごいどうでもいいけど、あの赤いでかいのも古龍なんじゃないの？」

「いや、あれは違う。色が違うが轟竜に特徴が似ていた。おそらくは特殊な個体なのだろう。なんにしろ、あんなドタドタと品のない走り方をする古龍などいてたまるか！」

モンスター相手に品とか言いだしましたよこの人。

「だからこそ、あの竜の狩猟依頼を出す」

「無理無理。お金ないし、それにあんな意味のわからない詩的な表現での依頼って、なにあれ？　ねえ、本当になにあれ？」

「……、ナナリが来る前に変な男がいたのだ。赤い衣を纏った奇妙な男だ」

「テオルも十分変だよ」

「……………」

「あ、続けて？」

つい素直な気持ちを引き出してしまった。納得がいけないような顔でこつちを見ないでほしい。テオルが変なのは事実だろうに。

「その男からだならぬ気配を感じた……。その男が受付で依頼を出していたのだ。その時のやつの放った言葉、しっかりと記憶している」

とりあえずテオルの話は聞き流すとして、どうしよう。塔はまずないとして、他の古代文明の土地だ。ハンターすぎるどの人の善意にまたまた期待して、尋ねてみるというのも手か。

「ハンター諸君、試練の時間だ。天蓋を衝く逸話の出現、蛇王龍。巨大な体を目前にして、人が抱くのは底知ぬ絶望か、それとも飽くなき闘志か。ハンター達よ、いずれかを選び、ここに示すがいい！」

「え、何急に。すごい痛々しいんだけどどうしたの今の台詞」

「だからその男の言葉だ。そして何故かそんな言葉で依頼が通されていた」

人が考え事をしている最中に突然痛い台詞を言うとは何事かと

思ったよ。それにしてもテオル以外にも変な人いるんだね。

「本当にそんな内容で通ったの？ それに今は依頼を受け付けられないって言ってた気がするけど……」

「ああ、確認したら通っていた。なんでもその男はハンターどもの間では一種の名物のようなやつらしい。だから俺の依頼も通ってもおかしくないはずだ」

そんな名物男の真似をして謎発言で依頼を通そうとしたのかこいつは。まあ名物になれそうな痛々しさはテオルにも確かにある。だから痛々しさを主張するのはやめてほしい。

「それである意味不明な依頼内容っすか……」

「あの赤い衣の男の出現は天啓に感じた。あの男を参考にすれば受理されると踏んだのだが……、ふん、この人間どもには難解すぎて伝わらなかったのだ。程度が知れる」

こいつは真人間に戻れるのだろうか。いや、戻さなくては、と旅の最初のころは思ったりもしたけど最近では慣れてきた。もうきつと不治の病なのだ。厨二病の中でも特殊な症状なのだきつと。

「とにかく、塔のことはもう忘れよう？ ぎるどの人聞いて他に古代服と関わってそうな場所を聞いて考えようよ」

「だがあの竜は……」

「あ、あのー」

「はい？ なんですか？」

さつき黄色い服の女性がそばに来ていた。

「先ほどの塔に関する依頼ですが、お急ぎでなければ受理可能ということをお伝えしにきました。さつき先輩に『顎をくいと持ち上げられながら』断るだけでなく、代案まで提供しなくちゃ一人前にはなれないわよ。イケナイ子ね』と言われまして……、まあ顎くいは妄想ですけど……、うっとり」

ふむ、厨二というより妄想癖激しい人なのね。まともな人はやつぱりいないのね。

「やつの狩猟依頼が出せるならそれで構わん」

「モンスターの情報不明瞭なので、塔への狩猟依頼、というより調査

兼狩猟依頼として扱います。金額は2万5500Zですが大丈夫で  
すか」

「いや待って、それで構わんじゃないよ。構うから」

何流れるように依頼を出そうとしているのさ。さつきも言ったじや  
ないか。お金が辛い状況だつて。

まあでも財布は私の鞆に入れたままのはずだし、そんな金額は出せ  
ないけど。

「え、えつと……、この場合私はどうすれば！ 先輩にヘルプを求めて  
『まだまだ私に甘えたいの？』つて、かあく！ 咲き誇りそうです百合  
の花が！」

強烈な方だ。そういうえば類は友を呼ぶという言葉がある。テオル  
の周りには変人が集まるのは、テオルが変人すぎるためだろうか。

「これでいいだろう。取り消しはさせんぞ」

「あ、はい！ 確かに、2万と5500Zですね。ではでは先ほどの内  
容で登録しておきます！ ドンドルマの管轄地域から離れ次第、クエ  
ストボードに乗せられますので！」

「え」

あれ？ なんでテオルが財布持ってるの？ 実はへそくり持って  
たとか？

すぐさま自分の鞆を調べる。悪い予感しか今はしない。なんか私  
の財布にそっくりだけど、テオルの個人用財布だよねきつと。私の財  
布は私の鞆にあるよね。

「え、ちよつとまってちよつとまって」

「ナナリ、悪いがこればかりは引かんぞ。やつはキャラ被りもだが竜  
の分際で、旧き時代より在りし塔を、無作法にも破壊しながら走り  
回っていた。罰を下すべきだ」

「え、いやそれはどうでもいいんだけど。いや、依頼出したことはどう  
でもよくないけど。え、その財布つて、誰の？」

「旅の資金を入れた財布だろうに。ナナリが意識を失ってる間鞆に入  
れっぱなしも不用心だからな。俺が預かっておいた」

つまり、私の財布、だよね？

「え、なんで勝手に使ってるの」

「依頼を出すには使うしかないだろう」

「いやいや、依頼出さなきゃいいでしょ？ え、ちよつと、え？」

「大丈夫だ。まだ残金に余裕はある。4万Zはあるぞ」

「何も大丈夫じゃないから……」

どうしてくれるんだこいつは。4万Zしかないのだ。しか、なのだ。

「……、財布返して」

「あ、ああ……」

追い詰められたとき、人は力を発揮する。って誰かが言ってた気がする。今こそ私もその力を発揮するべきだ。この金銭的危機から脱出するための力を。

4万Z。これだけあれば普通なら充分な金額だ。だが、移動費で大幅にとられる。移動費節約のためにこの船に乗り続ける、は目的地までいつ着くか。どうやら飛行船じゃないようだし、海を渡るのも大変なはずだ。

このままこの船に乗り続けるのはジワジワと追い詰められることになる気がする。

どうすればいいのだ。どうすれば……。

……そうだ、あの手があった。

脳裏に浮かんだのはにつくき白猫。

あんな間抜けそうな毛むくじやらでもできたのだ。私でもきつとできるはずだ。

密航しよう。

## 美食との遭遇

### 密航大作戦。

もちろん、本来はやってはいけないことだ。

だがしかし、今の私たちの状況はいずれ野垂れ死ぬ可能性があるのだ。危険を避けるためにはやむを得ないのだ。もちろんリスクはある。だが待つてもいいことはないって誰かが言ってた気がする。

なあに、バレなければ問題はない。

バレないためにも、そして状況が悪化しないためにもちゃんと計画を立てるべきだ。

注意する点は3つ。

1つ。目的地を決めること。

テキトーに行先を選んではいけない。帰りたけれど古代衣装を置いていかないといけないのだ。塔以外の場所でもいい感じに置いていける場所を考えなくてはいけない。

まあこれはぎるどの人の善意に頼って、古代文明関係の土地を教えてもらおう、だ。さらに言えば、安全なところが望ましい。

2つ。目的地への船を出してもらうこと。

そこに誰も行かなかったらダメである。誰も行かないなら船がない。そのために船を出してもらおう必要がある。これに関しては、なんかそれっぽい依頼を出す形式でいける気がする。私たちがついていかないって条件なら安そうだしね。

3つ。迎えの船が必要であること。

目的地にもよるが、ハンターに依頼を出して、そのハンターの乗る船に密航して目的地へは行けても、帰りもそのハンターと一緒にになれるかはわからない。ここは安全を期すためにも、迎えの船を依頼として出す必要があるはずだ。そしてその船に侵入、密航だ。これも2つ目と同じで何かの依頼で船を出してもらえばいい。

幸いにも私たちは二人で旅をしているのだ。行きの依頼を私が、迎えの依頼をテオルが、と別々行動すればいける気がする。

さらに言えば、里へ帰るための依頼もあとで必要なので、全部で3

回依頼を出す必要がある。

まあ最悪全部で3回だけでも。行き先の同じ船があれば依頼を出す必要がないしね。あとはバレない行動だ。

あ、でもそういえば、この船じゃしばらく依頼はダメなんだっけ。ドンドルマ？ にこの船は行ってくつてそういやほうき頭さん言ってたっけ。

ほうき頭さんが言うには、そこにもハンターすぎるぞがあるみたいだし、そこで作戦を開始しよう。

まあそれまでにも、この船で目的地を決めるくらいはできるし、今は目的の地決めだ。

この作戦は目の前にいる自称古龍様にも聞かせなくてはならない。

「テオル」

「なんだ、依頼の取り下げは断固拒否する」

取り下げと言う手もあったか。だが今はいい。取り下げてもこの作戦は実行するつもりなのだから。正規ルートじゃお金足りないもん。

「この服を塔以外の古代文明の場所に置くから。その場所をぎるどの人に聞くよ」

「塔以外なのか」

「塔以外よ」

塔はダメだ。危険だし、さっきのテオルの依頼ですら2万を超える金額だ。依頼主同行でもないのにな。

所持金4万Zじゃそんな選択肢はない。

「さらに言えば、何かの依頼をハンターに出すとき、安く済むような場所がいいね」

「なんだその条件は」

「ちよつと耳貸して」

「あ、ああ……」

この作戦は人に聞かれるわけにはいかないのだ。慎重に期すに限る。作戦の説明のために耳打ちである。



「というわけで安くすむ場所がいいの」

「……、不安しかないんだが」

作戦を打ち明けたところでこの反応である。でも私だって不安だよ。

この作戦は私とテオルが別々行動なのだ。テオルが目を離してる間に何をやらかすか不安で仕方ないよ。けどここは腹をくくるしかないんだ。

「そりゃ不安なのはわかるけど、このままこのバルバレ？ にいても、いつになったら戻れるかわからないじゃない」

「まずバレずに済む気がしない。それにナナリと別行動など不安以外思い浮かばない」

甘えん坊か。私がないと不安とか、案外可愛げがあるやつじゃないか。

まったく、同じ年なのに妙なところで弟のような雰囲気醸し出して。

「ガーグアの卵取りで培った存在感の薄さをうまく発揮できれば、きつといけるから大丈夫大丈夫」

「ガーグアと人間を同じ感覚で語るな……」

人より野生の生き物のほうがきつと感覚は鋭いはずだよ。だから平気平気。

「まあ塔以外の古代の目的地なんだけど、本に乗ってたりしてない？

安いところで」

「安い古代文明とはなんなのだ……。だいたい遺跡などがある地域となると密航には殊更警戒すると思うが」

「その、みつ……ここ、うとかの単語は伏せてほしいんだけど」

「ああ、すまない。とにかく、遺跡が荒らされたりされないように船は警戒すると思う」

ぐぬ、たしかにそんな気がする……。

「……、古代文明ではないが、炎王龍と炎妃龍の化身である俺たちにゆかりがありそうな土地は思いつく」

「ちよくちよく痛い発言しないと苦しむ病気とか持つてるの？」

化身どうこうは置いといて、たしか古龍だよ。生態がいまいちわかってない謎のモンスター。古龍も古くからいる的な響きがあるし、もういつそそこでもいいかもしれない。

「で、その土地は安くいけるの？」

「知らん。だが遺跡などがあるという話を聞いたことがない。遺跡がある土地に行くよりはバレにくいだろう」

値段は不明か。でも安全性は高い、のかな。

「その土地はなんてとこ？」

「火の国だ」

火の国。

ふむ、火の国か。

「どこかわかってないだろう」

「な、名前だけは聞いたことあるから……」

仕方ないじゃないか。よその地域の情報なんて使うことがないと思ってたんだもの。

でもなんとなく予想できるよ。熱いんでしょ、すごく熱いんでしょ。

「テオルはどういうとこか知ってるの？」

「火山が近くにある国だ」

「うん」

「……………」

「……、それだけ？」

「……………、か、火山と言う過酷な環境ゆえに、そこに住まう竜どもは強力なものが多い」

「それ、依頼高くないらな？」

「……………」

もう妥協に妥協を重ねて、古代文明関係なくその辺に捨ておくのもありだよ。旅の最初のころのような真面目な気持ちはもうないんだもの。しょうがないよね。

「もうその辺捨てよ……………」

「それはダメだ。捨てるくらいなら持つて帰るべきだ」

くっ、自称古龍には古代衣装は手放しがたいものだもんね。かといつてそれじゃ里長にバレ確定だ。その辺に捨てるのはダメ、持つて帰るのもダメ。やはり古代文明か火の国か。

いや、焦つてはダメだ。調べたら他にも候補が出てくるかもしれない。い。

とりあえずカウンターの人達に聞けばいいだろうか。

でもなあ、怪しまれたりしたら危険だ。

なんだか思考が悪い人みたいになってきている気がする。やむを得ないから仕方ないのだと自分に言い聞かせてはみたが、実行する際を想像すると後ろめたさか、バレたらと思う恐怖からか、ドキドキしてくる。

ドンドルマにどれくらいで着くのかくらいは聞いても大丈夫だよ。不自然じゃないよね。きつとそうだ。

「とりあえずドンドルマで作戦決行だから。どれくらいで着くか聞いてくる」

「やはり考え直さないか……………」

ここまで不安がるテオルというのもなんだか珍しいものだ。だけでもここは心を鬼にするのだ。いつだって私がテオルのフォローをできるわけではないのだ。時には独りでいさせるのもテオルの成長にきつとつながる。同じ年なんだけどね。

「すみません、この船って今ドンドルマに向かっているんですか？」

カウンターの黄色い服の女性に話しかける。この人の強烈個性はちよつとアレだけでも。左右に赤い服の女性と青い服の女性がいたけど、さつき話した相手のほうが話しやすいからね。

「はい。ドンドルマに向けて航行中ですよ。予定では2日後には到着予定です！」

意外と普通に会話できるんですね。すつごい失礼な感想が頭に浮かんでしまった。

「先ほどの依頼以外にも、お急ぎなどで依頼を出されるのであれば、ドンドルマで出すことをお勧めしますよ！」

「はあ……」

このままテオルのもとに戻ってもいいけど、もうちよつと話をしておこう。こう、ちよつとでも普通の一般人という印象を与えておくのだ。ドンドルマでの行動はこの人には関係ないかもだけど、一応念のためだ。

「なんでここでは今依頼を出すことができないんです？」

「ギルド間でいろいろあるんですよ。詳しくはお話できませんが、とにかく今の航路はドンドルマ管轄内なので、バルバレは集会所ではなく移動市場の面で動いています！」（渋い声で台詞）しばらくは、市場でこの平和を堪能できるってわけだな』というハンターの声が聞こえてきそうです！ 渋うござんす！」

あ、やっぱり普通に会話は難しそうだ。

「あ、ただ……、ドンドルマでも今は依頼を出せるかは少しわかりません」

「はあ……。え、なんでですか」

急に妄想から戻って重要情報出さないでほしいんですけど。流しそうになっちゃったよ。

「実は……、ドンドルマについて最近、古龍の急襲を受けたんです。そのため街は現在半壊でして、復旧作業中なんです。ドンドルマのハン

ターズギルドの判断次第では依頼が断られる可能性があります。その場合はこちらで受理できると思いますんで安心してください！」

「え、それ大丈夫なんですか。古龍の急襲って」

「ドンドルマはどういうわけかモンスターへの襲撃によくあうんです。ですが完全に壊滅させられたことはない、たくましい街なんですよ！」

古龍の急襲も現場のハンターたちの協力により、追いつき返すことができたみたいですよ」

よく襲撃にあうってそれ、危険すぎない？

「情報では半壊ですが、どの程度までなのか結構まちまちなんですよね。復旧にも慣れっこみたいで、こちらとドンドルマでの感覚に差があるのか……。今回の襲撃はテオ・テスカトルによるものだったそうですし」

テオ・テスカトルって、テオルがよく言ってる炎王龍じゃなかったっけ。

やはり危険な生物なようだ。街を襲撃するとは。この情報はすごい大事だ。

ドンドルマでは絶対に、テオルが自分は炎王龍の化身だなんだとか言わせたらダメだろう。襲撃を受けた街にとっては冗談でも笑えないだろうから。

さすがにそれくらいの分別はつくとは思うけど、念のためだ。慎重さは大事だ。

「いろいろありがとうございます」

「いえいえ！ お役に立てたなら幸いです！」

ドンドルマには2日後、テオルに炎王龍の話題禁止。この2つを知れたのは本当に収穫だ。

テオルのもとに戻ろう。

カウンターに背を向けて、テオルのいる場所に目を向けると近くの席に知ってる人がいた。

どこか高そうな服を着た、ふくよかなおじさんがいた。

自称美食家の悪食家さんじゃん。

目があつちやつたよ。

「えつと、こんにちは」

「なにやら見覚えがあると思えば、やっぱりあの時のお嬢ちゃんだったか！」

どうしてここにいるんだろう。あれからやっぱり虫を食べたのだろうか。

「ナナリ、こいつは誰だ」

テオル君はいつも通りの尊大な態度を貫きますねほんともう。

「ええつと……、シー・タンジニヤで一緒にご飯食べた人、かな」

「うむ。加えて言うなら、お嬢ちゃんが虫を食べたという話を聞いて、新たな可能性を感じる事ができた美食家じゃ！」

「私は食べてません」

私じゃなくて、私の里の長の世代だったの。

「なるほど、なんとなく理解した」

今ので理解できるの？ どう理解したのかすごい気になる。

「こいつは私の幼馴染のテオルです。それで、えと、どうしてこの船に？ どこかの村で依頼を出しに行つたんじゃない……」

虫を食べるために、とかいう意味の分からない理由で。

「うむ。ブナハブラを煮込んだものを温泉に入りながら頂くとしたんじゃないが……、他の客人に迷惑だからやめろと言われての……」

「そりやそうですよ」

「金を払うから、と頼みこんだのだが、いくら金を払ってもダメだと言われ、最終的に出禁となつての……」

「うわあ……」

「ナナリ、こいつ本当に美食家なのか？」

テオルの疑問はもつともだと思う。もう美食家じゃないよこの人は。悪食家だよ。しかしお金持ちなのねやっぱり。金欠な私たちには羨ましい話だ。

「というわけで新たな食の可能性の探求のために、ドンドルマを目指しているんじゃない。徹甲虫や重甲虫、鬼蛙を今度は食してみたいと思ってる……」

それらを食べるために、また依頼を出しに来ているというわけか。その遊ぶお金をわけてほしいよ羨ましい。

「羨ましい話ですね……」

「何を言ってるんだナナリ……」

あ、いや。羨ましいのはお金に余裕があることだよ。悪食さは羨ましくないよ。

「おお！ やはりお嬢ちゃんはわかってくれるか！」

「あ、いや、違います」

「未知の食材への探求心、それだけで動いてきたがユクモ村の件で心が弱ってたんじゃ……。だが理解者がいるとわかると、自信がわいてくるもんじゃ！」

これ否定したら傷つく感じですよね。

……、まあ、話だけ合わせよう。もうそうしよう。

「そつすね……」

「ナナリ……」

テオル、得体の知れないものを見る目で見ないで。あとで弁明するから。今はその視線が辛いからやめて。

「ありがとう！ お嬢ちゃんには本当に助けられてばかりじゃ」

「ははは……」

「そういえばお嬢ちゃんたちはどうしてこの船にいるのかの？」

どうして、と言われるとどう答えようか。

なりゆきで、としか答えられない気がする。塔にいつて往復依頼じゃなかったからここに転がり込んだ、みたいな感じだし。そしてドンドルマで密航予定です。とか正直に言えないし。

「ちよつと色々ありまして……」

「ふむ。何か事情があるようだの。わしで良ければ力を貸すが」

「あー……、いえ、大丈夫です」

一瞬その言葉に頼ろうかと考えたが、お金の困ってるんですって言いづらい。それに解決方法をさつき見出したし、そんな甘言に惑わされないよ。

「ナナリ、いいのか」

「いいよ」

それに、虫信者とこれ以上の交流はちよつと……。そのうち虫料理を奢るとか言われそうじゃないか。距離取りたいのです。

「ふむ……。もし気が変わったらいつでも力を貸すからの。遠慮なく言うのだよ」

「ありがとうございます」

あなたが悪食家じゃなくなったら頼ろうと思います。

予想外の遭遇があったが、テオルに忘れないうちにドンドルマのことを伝えなくては。

ここで話すわけにはいかないため、悪食家と別れ、私が最初に寝ていた部屋までテオルと移動することにした。

最初に寝ていた部屋は客人用の部屋らしい。ドンドルマに着くまではこの部屋を使ってくれて構わないとのことだ。ありがたい話である。

「ドンドルマで炎王龍、か」

「うん。だから街の人たちの前で古龍なんだって言うの禁止ね」

「ふん、俺とてわきまえている」

「わきまえてたら日ごろの妄言は出ないと思うんだけど」

炎王龍の話聞いてワクワクテオル君状態になると思ったが案外普通だった。この分なら大丈夫かな。



「だがギルドの者にその時の様子を聞くくらいは問題ないだろう」

「まあ、そう、かなあ？」

「少し楽しみだな。俺と同種である炎王龍と、対峙した感想や様子はどんなものか……」

「そういう妄言禁止だからね本当に」

大丈夫なのかな本当に。

到着までの2日間、なんども言い聞かせないといけないなこれは。どうせ2日間やることもなさそうだし、まあいいか。

## 火の国へ

バルバレがドンドルマに到着した。

ドンドルマへのバルバレの滞在期間は1週間ほどらしい。

その後、大砂漠のほうまでいくのだとか。海とは真逆な印象の場所だ。やはりバルバレについては、タンジアにいつ着けるかわかったものじゃない。

半壊、と聞いたが街中はごく普通だ。ごく普通に都会だ。街に入る前の外の平地や城壁は、焦げた跡や抉れた地面、崩れた壁など、穏やかじゃない様子だったが、少なくとも今いる広場には、派手に壊れた様子はない。奥の方とか、別の区画はそうでもないのかな。

「では俺は炎王龍との戦闘時のことを聞いてくるとしよう」

「それが本来の目的ってわけじゃないからね。忘れないでよ」

「そうだな。本来の目的は、塔に古代の衣を置いてくるはずなのにな……」

「……、本来ならタンジアで4万5000の出費も、バルバレで2万5000の出費もなかったのにね……」

テオルが炎王龍にワクワク状態だから注意をしたら、なんだか嫌な感じの返答をしてきた。お返しに嫌味を言っちゃった。お金にもっと余裕あれば塔にも行ってたかもしれないのだから。

「とにかく、俺は酒場に行ってくる。そこにならハンターたちがいるだろうからな」

そういつてテオルは行ってしまった。

大丈夫だろうか。色々。

まあ私は私でやることをやろう。安く依頼を出せそうで、警備が甘そうで、テオルが反対しないような土地を考えなくては。

候補として今上がってるのは火の国。

だけど火の国にいる竜は、強いつて言ってたから安い可能性は低そうである。他にも候補があればいいのだけど。

ところで、どこで情報を集めたらいいの？

ハンターすぎるとではダメだ。「安い場所はどこですか？　そこで

依頼を出します」とか怪しき満点だよ。怪しまれるのは避けたい。

ハンターたちに聞く、とかだろうか。ということは酒場に行ったテオルと合流になる。別れたばかりなのに、すぐに合流と言うのもなんだか気恥ずかしい。少しどこかで時間をつぶそう。

もちろん観光だとか浮かれてお金を使う気はない。今は耐え忍ぶときなのだ。

バルバレでもらった案内図では、アリーナという場所で歌が聴けるのだとか。しかも無料で。歌姫と呼ばれる人の歌を無料なのだ。気分転換にもちようどいい。

そんなわけで、手元の案内図に従ってアリーナを目指すことにした。

途中途中、すれ違う人に道を聞きながら、なんとかたどり着いたアリーナだが、なんだか想像していた様子と大きく違った。

大きな机が並んでるけど、人が全くいないのである。いや、いるにはいるけども、すごい少ない。

本当に歌姫って人が歌ってるのここ？

それとも場所間違えた？ それともアリーナはお休みとか？

「あら、こんにちは。あなた、見ない顔ね」

「あ、こんにちは。あの、アリーナって、ここですよ？」

数少ないアリーナ住民に話しかけられた。早速疑問に思ったことをぶつける。

「ええ、そうよ。歌姫の唄を聴きに来たの？ それとも闘技場の方？」

「いえ、歌のほうです」

「彼女の唄は癒されるものね。でも今はやってないわよ。基本的に夜だけだもの」

なんと。

それもそうか。いつ来ても聴けるってわけじゃないよね。

しかし、夜だけならここには用はない。闘技場のほうはチケツト代とか掛かるみたいだしね。

「それにしても、あなたのその恰好……」

「はい？ えっと……、この服がどうかしました？」

私の恰好がどうしたのだろうか。古代服だよただの。いや、古代服はただの服じゃないか。

というかこの旅で、こうして服に何か反応する人って初めてだ。そういえば里長は、古代服を着て旅したら、古代文明知ってる人に反応もらえるんじゃないか的なことを言ってた気がする。

つまり、この人は古代文明について何か知ってる人では。

それはつまりつまり、この人にこの服を押し付けてもいいということでは。

「その服と似たような服を着た男性が知り合いにいたりしない？」

「え、はい。いますけど……」

「……」

え、なに。なんか怖い。何を知ってるのこの人。なんでテオルのと知ってるの。

「あなたたち、卵、好きなの……？」

「え？ えと、普通、ですけど？」

「そう……、そうよね……。あなたたちも苦労するわね……」

なに。なんなの。さつきから意味がわかんないんだけど。なに？

なんでここで卵？ 今の会話の流れのどこに卵要素あったの？

「あの、よく意味がわからないんですけど……」

「ごめんなさいね。私の口からは何も言えないわ……。この先苦労すると思うけど、その時は一緒に歌姫の唄に癒されましょうね……」

「え、あの……。なんか怖いんですけど。え、なんですか本当に」

何その予言っぽい。すでに苦労してる部分はあるし、この先も不安ばかりだけど、今の意味深な言葉で余計心に不安が襲ってきたよ。

「私はもう行くわ。もしあなたたちがあの組織に入ることになれば、きつと何度も顔を合わせることになると思うわ……」

「いや、あの組織ってなんですか。ちょっと怖いんですけど。本当に怖いんですけど。いやいやいや」

「だめよ！ あの組織について探っちゃだめよ！ あなたの身が危ないわ！ 誰かに聞かれても不味いから心のうちに仕舞いなさい」  
「ええ……」

訳がわからないんですけど。すごい不安なんですけど。あの組織って何さ。組織って何さ。テオルが好きそうな単語だけでも。またテオル関係なの？ 何やらかしたのあいつ。

テオル関係以外他に思いつかない。……、いや、でもなんか聞いたことあるような、ないような……。

ダメだ。わからない。

まあいいや。探るなって言われたし、予言っぽいのも所詮は先のことだ。何かの間違いの可能性だってある。考えたってわからないことに、時間を使うのももったいない。

とりあえずアリーナで今は歌が聴けない。それがわかったのならもう移動だ。

私もテオルがいるであろう酒場に向かってもいいだろう。

酒場。たぶん大衆酒場ってとこなはず、と案内図を見ながら進んでいたら途中でテオルがいた。そしてこちらに向かってきたではないか。

ひよっとして酒場にたどり着けずに途方に暮れていたのだろうか。

「酒場にたどり着けなかったの？」

「迷うわけがないだろう。地図を持っているのだから」

そうは言ってるが怪しいものである。なんとなくこいつは、古龍の話をしつこく聞きまわって酒場からずっと離れてくれないという予

想だったのだから。それなのにここにいるということは、たどり着けなかったに違いない。

それともひょっとして酒場では古龍の話が聞けなかったのだろうか。

「んじや古龍の話は聞けなかったの？ 酒場から離れてるってことは」

「というか今更だけど、ハンターすぎるとで聞くもんじゃないのだろうか。なぜに酒場なんだろう。やっぱりお酒に酔っぱらった人は口が滑りやすいから、その分情報があつさり集まるとか？」

「話は聞けた。だからもう、この街に用はない」

なんと。

聞けたのなら嬉しそうに語ってきそうだったのに、意外にあつさり気味だ。

想像していた話が聞けなかったということだろうか。こいつが求めているような話はないか。想像がつかない。付き合ひの長さを表すみたいで複雑だけど。

古龍を追い返せたってバルバレで聞いてたし、暴れてたけどハンターたちにやられちゃった話をテオルは聞かされたのだろう。テオルとしては、古龍の強さを感じれる話を求めてたのだろう。

「まあ思ってた話を聞けなかったみたいだね。けどまだこの街から出発できないよ。例の作戦のために色々調べないと」

「一応……、どうやら今日の夕方に、火の国に行く船があるようだ」

なんと。ねらい目ではないか。だけど慌てて乗り込んで、もう1回依頼で船を出さなくちゃいけないのにお金が足りなくて迎えが来ない。なんて状況になっては最悪だ。ちゃんと他にも調べる必要があるのだ。

「火の国への依頼って1回いくらになるのかも調べないとだよ。慌てたらダメだからね」

「狩猟を依頼する竜の種類によるが、だいたいは1万程度のようなだ」

なんだか随分と協力的になってくれている。すでに調べていたとは。

そんなに古龍話が残念な結果だったのか。この街から離れたくなるほど。

「あとは火の国の危険度かな。依頼が出たってことはなんかいるんでしょ？ やばそうなやつだったかわかる？」

「……、かなり危険だ。大型の竜どもが3頭。依頼に一国の姫が直々に来たらしい」

「姫様直々って、どういう状況なの……。かなり危険そう……」

でも、こつそりハンターについていくって形なんだし、まあ大丈夫、かな。選んでたらなかなか動けない気もするし。

「よし。それじゃ私はその船に乗るよ。テオルは明日の朝いちばんになんとか火の国への依頼出してくれない？ それにこつそり乗って戻るから」

「ナナリ、やはりやめておくべきだ」

「危険って言っても、狩場まで行くことはないと思うから私は大丈夫だよ」

確かにやばそうだけど、今言った通り狩場に行くことはないと思う。火の国のどこかに服置いただけだし。あ、でも人里の中じゃダメかな。まあちよつとだけ火山に赴く程度なら平気、だよ。そもそも、その危険をハンターが排除してくれるだろうし、私は竜もハンターもいなくなった道をゆつくり歩いていけばいいのだ。

「今回ばかりはなんと言おうとだめだ。いや、そもそも火の国へ行くのはダメだ」

独りになるのが不安、というよりこれは、心配してくれているのだろうか。

「心配いらんよ。ていうかテオルは火の国がよかつたんじゃないの」

「あの時は火の国にある風習のことを、よく知らなかったからああ言ったのだ。とにかく危険なのだ」

「そりや竜が3頭いるってのは危険だけど」

「竜だけじゃない。火の国は危険なんだ」

危険ってのはわかってるよ。竜だけじゃなく、火山が近くならそ

りや危険だつてわかるよ。

「もしもナナリがああ船に乗ろうするなら、俺はギルドに報告するつもりだ」

「なっ！ それじゃ行けないじゃない！」

「一度里に戻って長に事情を説明すればいいだろう！ 塔に行くための金が必要だと！」

「そもそもその里に戻るお金も今ないでしょうが！」

「何か稼ぐ手があるかもしれないだろうが！」

そんな都合のいい手があるわけがないだろうに！

ってダメだダメだ。熱くなりすぎてはいけけない。周囲の注目を集めてしまう。このまま話し合ってもダメだ。

こうなったら仕方ない。一度納得した形で収めよう。

「火の国には、少なくとも数年は行ってはダメだ。特にナナリのような者が行くのはダメだ」

「……、まあいいわよ。今回のああ船は見送る……」

「そう、か」

なんで私みたいなのはダメなのだ。田舎者感がまだ残ってるのか。

田舎者はダメなのか。そんなに大都会なのか。

色々突っ込みたいところだけど、今は我慢する。

しかしこの分じゃ他の地域でもダメと言いそうだ。里に戻るっていう気持ちで固まっている気がする。何か別の手を考えないと。

「バルバレに戻るわ。とりあえず数日の間には今後の方針決めなおさないんだけど、今日はもう休む」

「……、俺はまだこの酒場にしよう。ああ船が出るまでは、な」

……こいつ、私がこっさり乗り込むと思ってるやがる。

その手はちよつと考えたけどやらないよ。戻ったらハンターズギルドに怒られそうじゃないか。テオルがバラすつもりであるのなら。

「そう。じゃあ先にああ部屋に戻ってるから」

「ああ」



バルバレに戻るとは言ったが、どうしようか。

歩きながら考える。

テオルはもう完全に火の国反対派となったようだ。案外明日になれば手のひら返しをするかもしれないけど、少なくとも今日は反対派なようだ。

テオルの言っていた里に戻るという考えは、残念ながらない。タンジアまでの費用がない。稼ぐ手段なども思いつかない。前は意味のわからない卯信者のおかげでたまたまお金が入ったのだ。そう都合よくこの街にも卯信者がいるとは思えない。

やはり密航となる。どうせ密航と言う危険な手段を使うなら里の任も達成しておきたい。塔は却下で。その他で。そしたらもう、やっぱり候補は火の国だ。

遺跡関係がないため見張りが薄い気がするし、塔ほどの危険はないだろうし、テオルいわく古龍と関係あるかも？ とかいうふわふわ情報もあるし。

まあたぶん炎王龍は熱い。熱いといったら火山。火山がある火の国だ！ みたいな連想だろうけど。もうこの際それでいいし。

だが火の国反対派テオル……。ダメだ、考えが繰り返しになってしまふ。いい解決策はないものか。

「う〜ん……」

いつそのこと正規に護衛依頼で火の国へ？ いやダメだ。護衛依頼になると高くなるだろう。そんなお金に余裕がないよ。

「う〜ん……」

「さつきから唸ってどうしたんだよオメー」

「ひゃうわっ!」

目の前にほうき頭ハンターがいた。いつの間にかいたんですか。考え事に没頭してたせいか気づかなかったよ。

「なんか悩んでんのか？ あの変なやつとなんかあったのかア？ ん

んー、青春の香りってやつかなア〜！」

「青春の香りってなんですか」

「なんだちげえーのか」

どうしてそんな愉快的な発想になるのか。愉快的なのはその髪型だけにしてほしい。怒られるだろうから言わないけど。

「まあ、ちよつと困ったことがあったんですよ」

「何かあったのか？ 内容によっちゃあおれでも助けになれるかも知れねーぜ」

ほうき頭の助けを借りても解決できる気がしない。お金とテオルの説得と、という2つの問題なのだ。

「何かわからねーけどよ、言ってみな。たとえおれじゃあ解決できねーことでも、一緒に悩むくれーできるぜ」

結構かつこいいことを言ってくれた。下心ハンターじゃなかったら心揺れてたかもしれないよ。下心がわかってるから揺れなかったけど。テオルじゃそんな言葉絶対出ないよ。少しでも見習ってほしいところである。

「うーん……………。実は火の国に行かないとなんですけど、お金が厳しくて…………、それにテオルが火の国に行くのを反対していて…………」

「…………。火の国か。ずいぶん珍しいところ目指してんだなア。ま、塔にも行きたがつてたし、なんか事情があるんだろーけどよ」

珍しいところなのか。

「んで、護衛依頼の金が出せねえ。あの変なやつも行きたがらねえ、と」

「はい…………」

「説得とかはおれあ無理だけだよ。火の国に行くことなら金はいらねーと思うぜ」

「へ？」

「おれは結構腕の立つハンターだからな。おれと一緒に火の国へ行けばいいだけだぜ」

「で、でも護衛料が、それに移動費だつて」

だからそのお金はないって言ってるじゃないか。一瞬期待したけ

どダメなようだ。

「ハンターのお供つてことで行けると思うぜ。時々ハンターに内緒で狩場までついてくるやつがいるらしくてよ、そういう時は、ギルドにはお供ということにして、見逃してもらって聞いたことがあるだよ」

「お供……」

「一緒に狩りをしろってわけじゃねーから安心しな。まあ、おれは依頼を受けて動くことになるから、ターゲットを狩猟するまでは、火の国の人里で待つてもらおうことになるけどよ」

期待したけどダメだと思ったら期待できる内容になった。何を言ってるかわかんない状態だ。ちよつと混乱しちゃった。

つまり、移動費は問題ない？ しかも密航でもないから、コソコソする必要がない？ ならば

「それをお願いしてもいいですか!!」

「お、お。でもあいつの説得はおれには無理だぜ？ そこはどうするんだ？」

「いえ、私だけでも行けたら大丈夫です！」

テオルの説得など私にもきつと無理だ。もうこの際テオルは置いていこう。密航ではないとはいえ、火の国に行くこと自体に反対だろうから。

それに置いていっても、この方法なら私は後ろめたいことなどあまりない。ぎるどにバラされても、怒られることもない。

問題はテオルの古代服だけは持っていけないことだけど、もうこれはあきらめよう。テオル自身、服は手放したくなかったようだしきつと好都合でしょ。私の服だけでも火山行きだ。

あ、あと酒場で見張ってるんだっけあいつ……。そこだけうまく隠れてやり過ぎさないとかな……。

「いいのか？」

「はい、大丈夫です」

「んじやいつ出発するよ」

「今すぐにも！ あ、テオルに書置きしてくるんで一度部屋に戻り

ますね！」

「あいよ。んじやおれは依頼受けるのとギルドのやつに同行のこと伝えてくるわ。大老殿の場所って知ってつか？」

大老殿？ たしか案内図に書いてあった気がする。たしか、アリーナの近くの……、となりだっけ？ まあその辺だったよね。

「えっと、たしか……、アリーナの隣、でしたっけ？」

「おう。その近くで待ってるぜ」

「あれ？ 依頼を受けるってことは酒場？ じゃないんです？」

「言ったじゃねえか。おれは結構腕のたつハンターだつてよ。大老殿への入場も許可されてるくらいなんだぜ。そこから出発しよーぜ。酒場でも受けれるけどよー。酒場はごちゃごちゃしてそうだしよー」

「なるほど……」

なるほど、よくわからないけど任せてたらいいかな。

テオルは酒場で私が船に乗らないよう見張っている。

だけど私は大老殿から出発する。つまりテオルに見つからない！

面倒ごとが一気に解消されていく！ これはいい流れだ！ 伝言をしつかり書いて、今度こそ任を達成するのだ！

伝言内容はどうしよ。うーん。

“テオルへ。正規の方法で火の国に行ってきます。竜がないかハンターの人に聞いてから、火山に行こうと思うので、危険はないです。なので心配しないでください。正規の方法なのでちゃんと戻れます”

これでよし！ ちゃんと安全を配慮して行動するとも書いたし、戻ることも書いたし、よし！

いざ、火の国へ！ だ！

## 炎国の王

大老殿。

この旅の中でいろんな場所を見てきたが、きっとここはその中でもかなり上等な場所なのだろう。まあ、見てきた街の数は片手で数えられる程度だから、実際どこまですごいところなのかよくわかってないけど。でも入口には門番さんがいるような場所だ。すごい場所なはずだ。

あの門番さんに止められたときは、かなり怖かった。通ろうとしたら、いきなり目の前に槍がおりてくるんだもの。あの止め方はどうかと思う。腰が抜けるかと思ったよ。

ほうき頭さんに同行者と説明してもらって通してもらえたけども。そんなわけで入口で少し悶着があったが、それを越え、さらにやたらと長い階段を登り切った先の大老殿の中に入ると、そこには巨人がいました。

思わず後ずさりするのは当然の反応だと思う。

座ってるのに余裕で私の倍以上の大きさ。もうモンスター的一种じゃないかと思ってしまうほどだ。

かなり失礼な感じだったろうけど、ついついじろじろ見てしまっ

た。  
周りの視線がなんだか居心地悪い。というかあの巨人さんも私をめっちゃ見てるよね。目があっちゃってますもんね。たぶんだけどね。眉毛で見えないんだけど、なんとなく目があってる気がする。

しかし本当に眉毛で全然目が見えない。眉毛の奥にはきつと目があって、その目でこちらを見ていると思うんだけど、その目が全く見えない。

どれほど凝視しても瞳が全く見えない。こんなに凝視してるんだから、ちよつとくらい瞳の光が見えたっていいと思うんだけど、全然見えない。時々頷いたりして顔を動かしたりしてるのに、長い眉毛も釣られて動いているというのに、瞳は見えない。

「……い、おい、何さつきから凝視してんだよオメーはよ。そりやシツ

レーつてもんだぜ」

「え、あ、その、つい……、ご、ごめんなさい」

確かに失礼だ。でも言い訳していいのであれば、あれだよ。気になってしまったら見てしまうものなんだ。もうちよつとで見えるよ。うな、でも見えない、でもやっぱり見えそう。そんな瀬戸際は凝視してしまふものなのだ。

「ムオツホン！ よいよい。時に少女よ。ヌシの連れである男児は同行せぬのか」

え、テオルのことだろうか。なんで知ってるの。

「ど、同行せぬです」

「フウム……、そうか。兎に角、用心して往くようにな。その者を連れていくのであれば、しかと守り通すのだ。月迅竜を狩るほどの腕前を持つ狩人を、信用してないわけではないがの……」

「お任せくださいよ。おれにかかれればチョコイのチョコイつてなもんです」

「油断してはならぬぞ。モンスターにだけではない。あらゆるものに対してである。広大な自然は時に、牙を向けてくる。自然の前では、我らは本当にか弱く小さな存在なのだ」

「はっ、はい！ じゃあ行つてくるですぜ！」

か弱く小さな存在という言葉に突つ込みを入れない。その姿でその言葉は違和感がすごいんですけど。か弱い方がそんな鎧を纏えるとは思えません。小さな存在つてその巨体で何を言ってるんですか。モンスターかと思つたんですが。

「おいほら、行くぞ」

「あ、はい」

ほうき頭のハンターについていき、船の発着場に向かう。それにしても、この場所高すぎない？ 地面からの距離の話で。

「火の国には飛行船なら数時間程度で着くみたいだぜ」

「ほあー」

結構近いのね。タンジアから塔までは半日近くかかったのに。それじゃサクツと行って、サクツと終わらせよう。私は服を置いてくるだけだから特に何もしないけど。モンスターがいなくなってから、少し火山に行くだけだ。

「おれは火山に行くからよ。オメーはふもとの村で待つてるんだぜ」  
「はい」

てつきりキャンプ場みたいなのを作るかなと思ってたけど、村があるのか。街ではなく村。なんだか落ち着いた気分です。居られそう。都会の喧騒に私はもう疲れ切ってしまったのさ。

「そういえば火の国ってどんなところなんですか？ モンスターが強いつて言うのと、火山が近くにあるってことくらいしか知らないんですけど」

何か美味しい特産品とかないだろうか。あるのであれば、お土産として少し買っておきたい。置いてけぼりをくらったテオルに渡すためにも。きつと怒っているだろうから。

「ん〜。おれもあんまり知らね〜なあ。あー、でもなんか信心深い国って聞いたことあったかな」

「宗教に熱心な国ってことですか？」

「そーそー。火山は火の神様だあ〜って感じだな」

「火山が火の神様、ですか……」

それは不味い気がする。

火山が火の神様扱いなら、その神様のもとに私は古着を捨てに行く悪者ではないだろうか。それに土足禁止とかないよね？ 火山に土足厳禁、みたいな。

「えと、それじゃ火山に足を踏み入れたらダメな感じだったりするんじゃない……。神の地に人間ごときがーみたいな感じで」

「あ〜、大丈夫だと思うぜ。何度もハンターたちが火山に行ってるしな」

あ、そっか。それに依頼として出てるんだし大丈夫か。

じゃあ気にせず古着を置いてくことができそう。

お土産に関しては、着いてから考えよう。お土産っぽいのがなかつ

たら、なんかテキストに拾ってこよう。火山の石とか、火山で生える植物とか、そんな感じの。

火山のふもとの村、火の国の村と聞いて想像していたのは、草木が全くないような灰色の村を考えていた。家は洞窟とかで、火山近くの街の場合は石造りの家とかを考えていた。

しかし、実際に足を運んでみれば普通に緑がある。ちよつと行けば森だつてあるではないか。家は洞窟ではない。テントだ。そりやそうだね。洞窟暮らしなんてないよね。とにかくいくつものテントが張られていた。

「もつと緑が少ない場所だと思つてました……」

「ま、火山と聞いちやそうなるわな」

大きいテントから、おじいさんが出てきた。きつとあの人は長老的な人だ。村人を何人か連れて、こちらに近づいて一言尋ねてきた。

「ハンターの方たち、ですかな」

「ああ。つつても、ハンターなのはおれだけで、この子供は付き添いだ。火山で暴れてる3頭のモンスターを狩るまでここで預かつてほしいんだわ」

子供扱いとは何事か。子供と言われるような年齢ではないはずだ。私は。しかしここで抗議をすると、それこそ子供扱いされそうだ。大人な私は会話の邪魔をしないよ。

「3頭のを、ですか」

「そーだぜ。あんたらの国の姫さんからの依頼なんだわ。依頼が出てるって話届いてねーのか？」



「……、聞いております。火の神のお怒りの原因は、3頭の巨竜が暴れているからだ、と」

火の神って極自然に会話に出てきた。本当に宗教に熱心な国だなあ。あらかじめ聞いててよかった。もし聞いてなかったら、思わず火の神って何って聞くところだったかもしれない。

「竜を鎮め、それをもって、火の神のお怒りをお鎮めするのだ、と聞いております」

「ま、おれはその辺はよく知らねーけどよ。とにかくその3頭の竜の狩猟がおれの役目ってわけだ」

「……………原因が竜であろうとも、竜を鎮める程度でお怒りが収まるはずがない」

「なんであれ、おれは依頼をこなすぜ。それでこの子供を預かってくれるのか？ それとも預かってはくれねーのか？」

「……………この村でお預かりしよう」

これで私は竜がいなくなるまで、村で滞在が決定したわけだね。これもシダメだったらどうしてたんだろう。

「ってわけだ。村でおとなしくしとくんだけ。オメーの用事が何か聞いてねーけど、しばらくは危険だからな」

「はい。火山に少し入りたいたいんですけど今は危ないですしね。安全になつてから行きますよ」

「火山に入りたいたって変わってんな。ま、とりあえずちよつくら行つてくるわ」

そう言つてほうき頭のハンターは村を出た。

できるだけ早めに終わらせてきてほしい。なんというか、この村……………暗い。活気が全くないのだ。先ほど話していたおじいさんも、その周りの村人も、テントの隙間からこちらを見ている人たちも、みんな暗いのだ。

それだけ竜の暴れっぷりに困っているということなのだろう。この暗い雰囲気から脱してあげたいけど、私じゃ何もできないだろう。まあでも、何か手伝えることがあったらできる限り頑張ろう。預かるってなんか本当に子ども扱いだけど、お世話になりっぱなしじゃあ

れだからね。

「お嬢さんや」

「あ、はい」

「火山に入りたいというのはまことかの」

質問が飛んできた。火山は火の神らしいもんね。一般人はやつぱり踏み入れたらダメなのだろうか。ハンターだけが特別とか。普通にあり得そう。あのほうき頭ハンターさんはそういうこと知ってなさそうだし。

しかしダメだとしても、ここで嘘を言つては意味がないだろう。さつき話聞かれてたしね。ここは正直に答えよう。

「はい……。ちよつとだけでいいんです」

ダメって言われたらどうしよう。その時はもうこの村に、この古代衣装の進呈でもしようかな。

「ふむ、そうか……………」

「ダメ、でしょうか…………？」

なにやら考え事を始めた。難しい表情で黙りこんでしまった。不安になる。これはやはり古代衣装を村に進呈か。冗談で考えたことだけど、それをしたらモヤモヤした気分になりそうだ。

「……………、本来は駄目じや。しかし、ここまで足を運んできてもらったというのに、それを止めるのも忍びない」

「は、はあ」

何か条件付きでなら許可してもらえるのだろうか。この流れはそんな感じだ。

「この村の特別な衣装を着て、儂らと共にでならば、入るのを許可しようと思う」

「特別な衣装、ですか」

「うむ。外の国の方には理解しにくいことかもしれない。儂らにとって火山は神様なのじやよ。神のもとに行くのであれば、特別な衣装でなくては困るからの」

なるほど。ならその衣装とやらを着ようではないか。こちとら古代服という特別な服には慣れてるのだ。それに古代服を火山に置い

ていくために、服は着替えるつもりだったしね。

「それくらいなら大丈夫です」

「有難い。では、竜がいなくなったら、行くことにしよう」

「はいー」

ありがたいってなんでだろ。ごねられると思つていたのでだろうか。私がつぼど子供に見えるのかこのおじいさんは。そりや老人から見たら子供みたいな年齢かもだけどき。ごねたりはしないよいくらなんでも。

その後、案内されたテントでのんびりと過ごした。

何か手伝えることはないか、と村の人たちに尋ねて回ったのだが、断られたのだ。することがないのでテントの中でゴロゴロする。

日も暮れて、出てきた晩飯はとても美味しかった。手の込んだ料理だと思ふ。この村の人たちは毎日こんな素敵なご飯を食べているのだろうかと思つたが、そうでもないようだった。食器を返しにほかのテントを覗いたとき、他の人が食べてるご飯は質素なものに見えたからだ。

客人相手の歓待、ということだろうか。さすがに心苦しいので、村の人と同じのいいと伝えたが、翌日も出てくるご飯はやはり手の込んだ料理だった。

やっぱり早くあのハンターには戻ってきてほしい。この村は居づらい。テオルがいれば、もう少し気が紛れただろうか。あの問題児がいれば、この居心地の悪さも気にならなかつたかもしれない。いや、別の意味で居心地が悪くなつてたかもしれないけど。

それともこれが普通なのだろうか。よそ者に豪勢なご飯を振る舞うのが。私のいた里もよその人が来たら豪勢なご飯を振る舞つていただろうか。行商人くらいしか来た覚えがないから何とも言えない。だけど振る舞う気も少しする。歓迎するのであれば、豪華なご飯になるものだ。

だけど、この村は歓迎しているようには感じれない。村人はみんなよそよそしい。ご飯を持ってきてくれる人も私と目を合わせようと

しない。何か話しかけても、早々に切り上げようとする。  
「ご飯と、湯あみをさせてもらえたことには感謝だけど、それ以外はちよつと寂しいものである。」

ハンターが出て次の日の夕方ごろに、彼が戻ってきた。

もつと早くに戻ってくると思っていたから、随分と待たされた気分だ。だけどこれでようやくこの村から出られる。

「おかえりです。大丈夫でした?」

「大丈夫っちゃ大丈夫だ……。けど妙だぜ」

「みよう?」

なんだか難しい表情を浮かべている。何かあったのだろうか。

「狩場のベースキャンプからギルドに伝書鳥を出した」

「伝書鳥ですか。何かあったんです?」

「ああ、おれは確かに3頭の竜を狩猟依頼を受けてここに来た……」

「そうですね?」

村の人たちがこちらを伺っている。狩猟失敗したのでは、という不安があるのだろうか。

「竜が……。いや、モンスターが全然いねーんだ」

「いない?」

「ああ……。丸1日探し回ったんだけどよ。大型どころか小型すら全くないねえ……。とりあえず今はギルドからの返信待ちだ。まだしばらくここにいといてくれ」

大型どころか小型もない……。ひよつとしてこれは千載一遇の機会ではないだろうか。

竜がいなくなろうと、小型は普通いるものだし、どうしたって危険はあると思っていた。

けど今なら小型すらもないのだ。安全が確保されているようなものだ。

「とりあえず、おれはもう一度ベースキャンプに戻る。返事が来たらすぐにでも動けるようにな」

そう言つて、再びハンターは村を出ていった。

モンスターがいないという情報を伝えるために、ここまで来てくれたとは優しいではないか。

「お嬢さん」

「あ、村長さん。どうもモンスターがいないみたいですよ」

「うむ、聞いておつたよ。明日の昼すぎに、火山へ行こうか」

やっぱり聞いてたのね。話が早くて助かる。まあ気になるよねそりゃあ。中々謎だけど、竜がいなくなったということは火の神様の怒りもなくなつたということになるのかな。この国の人にとっては。

とにかく火山へ行くことが決定だ。しかも道を知っているであろう村人つきだ。

「はい。竜がいなくなつてよかつたですね」

「うむ。これで火の神のお怒りを、お鎮めすることができるの……」

翌朝、豪勢な朝ご飯を食べ、今まで寝泊まりさせてもらっていたテントとは違うテントに案内された。そこで例の特別な衣装に着替えるように言われた。

白い衣装だ。火山つぼさがあるような赤い衣装とかを勝手に想像していたけど違った。

着替えて古代衣装をたたむ。いよいよこの服とお別れが近づいてきたというわけだ。

思えば随分と長く感じる旅だった。

卵信者や虫信者、貧乏ハンターに泥棒白猫、ほうき頭、よくもまあ、こうも変人ばかりと無駄に遭遇してきたものだ。なんというか、可愛い子には旅をさせろつて聞いたことあるけど、この旅で成長した気が一切しない。だってあまり意味のない出会いばかりな気がするもの。変人ばかりだし。

「準備はできたかね」

「あ、はいー」

テントの外から声をかけられ、返事をする。

外に出たら村人が2人と、村長さんが待っていた。

「この者たちが案内する」

「はあ……」

普通の服じゃんこの2人。

特別な衣装じゃないじゃん。私だけ白装束ってどうなの。いいの？

けどまあいいのだろう。村人とハンターは特別ということなのだろう。

「それじゃ、お願いしますー！」

「……あ、ああ」

目を合わせてくれないのはやっぱりさみしいものがあるよ。

まあ、もういいけど。ちゃんと案内してくださいね。

村からの案内の2人についていき火山への道を歩く。

火山への道中、初めのほうは緑に囲まれていたが、どんどんと緑色が減っていき、岩肌がむき出しの道になってきた。空がひどく暗い。曇り空というより煙空だ。黒煙すっごい。

そして、いよいよ火山の中に突入である。ちなみにここまでずっと無言である。私と案内の人たちで、合わせて3人いるのに無言である。

しかし、ここで無言の時間は終わった。

「靴を脱いでくれ」

「はい？」

何を言ってるんだこの人は。靴脱げって、素足になれってことだろうか。何を言ってるんだこいつは。

「あ、この靴もダメなんですか？ 渡された着替えには靴がなかったんですけど……」

神聖な地に、ふつーな靴はダメということかもしれない。しかし渡されなかったし、見逃してくれてもいいのではないだろうか。そう思いながら答えた。

「……すまない」

「えつと、あの……？ うわっ」

1人に謝られたと思つたら、急にもう1人が後ろから私を脇に抱え始めた。そのまま流れるように、靴も脱がされた。

ちよつと本当に待ってほしい。替えの靴ないの？ 裸足で歩くとかちよつと絶対無理だから。

「あの！ 替えの靴ないなら、一度村に戻りませんか！ 裸足は無理です無理です！ 絶対無理です！」

「……本当にすまん」

なに謝ってるんだ。謝るなら降ろして、そして靴履きを認めてくれ。裸足でこの道を歩けるわけがない。足の裏がズタズタになってしまう。ましてや火山をなんて確実に無理だ。

「このやり方以外、火の神のお怒りをお鎮めする方法を、俺たちは知らないんだ……」

「やめましよう!?! 一度戻って、他のやり方を考えましよう!?!」

今その話は関係あるのだろうか。私が裸足で歩くのと、火の神がどう繋がるというのだ。

抗議を続けたが、無視してそのまま火山に入る洞窟へと進んでいく。

中はひどい熱さだった。入ったとたんに汗が流れ出す。肌がチリチリと痛い。洞窟の中だというのに明るい。溶岩の光のせいだろう。地面もその熱さの影響か、明るく見える。今は脇に抱えられたままだからいい。落とされたらどうなってしまうか、この分では火傷は避けられないのではないだろうか。

どんどん奥へと進んでいく。相変わらず抱えられたままだ。このまま目的地まで抱えられるのだろうか。進んでいく道の左右は溶岩が流れていて、先細くなっている。

帰りも抱えてくれる、はず。置いてかれたりは、しないはず。そう信じたいけど、火山に入る前のやり取りのせいで不安が拭えない。

このやり方以外、火の神の怒りを鎮める方法を知らない。

人身御供。その言葉が頭に浮かぶ。

神様への捧げもの、生贄。そんな風習なんて、昔話のものだと思っている。思っていた。だけど

村で用意された特別な衣装とは、神様への捧げものに相応しい恰好をさせるためではないか。

豪華な料理は、村と関係ないものの命を差し出すことに対する、罪悪感を減らすためではないだろうか。

靴を脱がしたのは、捧げものに相応しい恰好にさせると同時に、逃げられなくするためではないだろうか。

考えが後ろ向きにばかりなってしまう。ただ単に神様の土地を、よそ者は土足厳禁とかそんなものはずだ。そのはずだ。

ただただ、運ばれながら自分に言い聞かせた。

嫌な予感が拭えない時点で、暴れてでも逃げ出せばいいのかもしれない。だけど、視界が歪むほどの熱気、痛みを感じるほどの熱さ。そして、こんな空間の地面に触れる勇氣はでない。

ただのいやな予感で、実際は一切降ろさずに、ただの案内なのかもしれない。だからここで暴れてはだめなのだ。そう、考えることにした。

かなり進んだのではないだろうか。一步踏み外せば即死してしまうだろう道を担がれ続け、長い坂道を登った先では空が見えた。空と言っても黒雲だ。いや、黒煙か。

歩ける地面の形がYの字形になる場所についた。左手側には、もはや見慣れた恐ろしい溶岩の明るさ。右手側には崖である。その崖を落ちる溶岩で形成された滝だ。正面には山頂から流れてくる溶岩。どこを見ても溶岩だ。



先頭を歩いている男がこの区域の中央で立ち止まった。ここが、目的地なのだろうか。

降ろされたくない。お腹の下に回っている腕にしがみつく。

しかし、私を降ろすように腕を放した。しがみつこうとしてもダメだった。そのまま地面の上に落ちる。

地面にぶつかる衝撃で背中が痛い。服から出ている手と足は衝撃など関係なく、触れた地面の熱さに思わず引っ込んでしまった。

特別な服と言われるだけあって熱さを通しにくいのだろうか。服ごしなら、熱いし痛いけども、我慢できないほどではない。

降ろした私を無視して2人は山頂に向かって何かブツブツ呟いている。まさか本当に、人身御供だなんて。熱さで話すのも苦しいが、文句が自然と出てくる。

「なんで……、今時人身御供とか、それに……、よそものを生贄って、何考えてんの……」

自分たちの問題は自分たちで解決するものじゃないのか。人身御供でよそ者を使うって、おかしいじゃないか。人身御供自体おかしいけど、本当に何を考えてそうなるんだ。

「俺たちだってこんなこと、したくてしてるわけじゃない……。だが、今までこうしてやってきたんだ」

「生贄自体が、無駄だって……」

「姫様も無駄だと言っているそうさ」

この国の人全員が時代錯誤な考えかと思いかけたけど違うようだ。

「だが、姫様の言うように捧げものをやめたところで、火の神のお怒りが鎮まるわけではないだろう」

「生贄を出したって、鎮まるわけじゃ、ないから……」

そもそも誰も鎮め方なんてきつとわからないよ。だけど生贄を出せば大丈夫、なんて頭のおかしい結論は完全に意味がわからないよ。無駄すぎるよ。

「今までこのやり方でやり過ぎしてきたんだ……。火の神がお怒りが激しい時に、村の誰かを捧げ……。今までやってきたことが無駄だなんて認めれるものか……！ 今更やめては、捧げられた者たちが無駄

死になってしまおう……」

そんなの知るか。そりゃ無駄に捧げられた人たちはかわいそうだと思う。だけどその人たちを無駄にしないために、まだ生贄を捧げるなんて、この狂信者め。どんな教えの宗教かは詳しくは知らないけど、自分たちだけで完結してしまえそんなの。他人を、私を巻き込むな。

「おい、もう行くぞ。そろそろクーラードリンクの効力もなくなる」

「ああ……、それじゃあな……」

それじゃあな、じゃない。

2人は私を置いて来た道に戻っていった。

このままここで転がっているのは、いずれ死んでしまう。

私も戻らなくては。今ならやつらはいない。きっと痛いだろうけど、動かなくては。

そう思い、足を地面につける。

「痛い痛いー!」

そして走る激痛に、再び地面から足を離してしまう。

痛い。涙があふれる。

なんでこんな目にあってるんだろう。

テオルが行くなって言ってたのは、こうなるかもって思ってたからだろうか。

竜より他のことで危険って言ってたもんね。

ちゃんと聞いておけばよかった。なんで止めるのか、しっかりと話し合えばよかった。

後悔ばかり溢れる。

きつとテオルは怒っているだろう。勝手に行ったことに。置いていったことに。

このまま、私はテオルに謝ることも出来ずに死んでしまうのだろうか。

どんどんと熱さが増している気がする。両手両足を地面につけなように丸まっているが、どうしても体力が持たずに、何度か手足が

地面に触れる。そのたびに激痛が走る。

何度も苦しみ悶えていると、熱風が吹きつけた。

熱い風なんて嬉しくない。けど風が吹いたってことは、外への出口が近くにあったり……。あ、そういえばここはある意味外か。背中の方角、南東から吹いた風に少し希望を見出しかけたが、そこは崖だ。

再びバランスが崩れ、横倒れになる。南東の方角だ。

そしてそこには、大きな生き物がいた。

赤い身体。力強い四肢。大きな翼。

王冠のようなたてがみに、2本の角。厳つい顔をした、龍がいた。その龍が近づいてくる。

竜のことも、古龍のことも、種類なんて全然知らない。

けど、この龍は、なんとなくわかってしまった。

炎王龍テオ・テスカトル。

テオルが何度も言っていた古龍。化身だのなんだのと言ってたやつだ。

炎王龍の青い瞳が、私を見ていた。どこか怒りに染まっている瞳に思えた。

何故古龍が私をそんな睨み付けてるのだろう。この熱さで、もう死にかけな私が何をしたというのか。

近づかれるたびに熱さが増してくる。暑苦しいよこんちくしょう。

そんな悪態をつく余裕なんてとつくにないけど。

とにかく私は怒られるようなことをした覚えはない。なんで怒ってるのか知らないけど人違いだ。

いや、怒られるようなことはしている。それはテオルにであって、炎王龍ではないはず。

そこまで考えて、もしかして、という思いから言葉を絞りだした。

「テオル……っ？」

龍は応えない。

日ごろ垂れ流していた妄言は、まさか事実だったのだろうか。この

怒りの目は、置いていったことに対する怒りなのだろうか。それとも話をちやんと聞かなかったことに対しての怒りでもあるのだろうか。だとしたら、謝らないと。

謝るし、反省してるから、近づくのやめてよ。熱いよ。

「テオル……、ごめん。ちよつと、暑苦しいから、止まって」

私の言葉を無視してそのまま近づいてくる。

「話を聞かなかったことも、置いていったことも、本当に、ごめん……。あとでいくらでも……。謝るから」

どんどん近づいてくる。

熱さも増してくる。視界がゆがむほどの熱気が目の前の巨体から出ている。いや、私の体力が限界なのかもしれない。

「テオル……。そんなに、怒ってるの……？ ごめん……」

もう、駄目そうだ。けどきつと自業自得なのだろうこの結果は。

テオルの怒りを、受け止めるしかないのだろう。いずれテオルもあの世にいったら、いっぱい恨み言をぶつけよう。古龍の寿命がどれほどか知らないけど、絶対、言ってやろう。

そう思い、私は目を閉じた。

自業自得の結果、私の旅はこの結末なのだろう。なんとも、無意味な旅路だった。

## 牙をむく太陽

「テオル……。そんなに、怒ってるの……？　ごめん……」  
今は謝るけど、絶対いつか文句を言う。言つてやる。厨二病と思わせて本当はそんな龍だなんて、わかるわけがない。

諦めて目を閉じて、あとはもう受け入れるだけになった。こんな結末とは、私の旅は無意味なものだった。

「馬鹿か!!」

突然の罵倒が飛んできた。

何さ。さつきまでだんまりだったくせに、馬鹿って何さ。

普段自分が馬鹿やつてるくせに、自分が有利になったら執拗に責めるのはよくないと思う。

ようやく口を開いたテオルに文句を言おうと思ったところで気づいた。

今のテオルの声、前じゃなくて別方向から聞こえたなかつた？

「オメーもたいがい馬鹿だと思っただけだな！　ま、嬢ちゃんのほうが今はかなりの大馬鹿だなッ!!　目えつぶれよッ!!」

ほうき頭のハンターの声も、先ほどのテオルの声の方角から聞こえた。

どういうことだ。この場にテオルが二人？　あとおまけにハンターも？

目を開けて確かめようとしたら、目が痛かった。

めっちゃ眩しい。視界が今度は真っ白なんですけど。

「やつぱり暴れまわるよな……。やつが見間違いなところ見てる間に、早いことその嬢ちゃん連れてけッ!」

目の痛みで苦しんでいると、誰かに捕まれた。

そのまま引きずられる。滅茶苦茶痛い痛い痛い。

「痛い痛い痛い痛い!!　足！　痛い!!　痛い!!!」

私の悲痛な叫びを聞いて、引きずってはいけなないと気づいたのか、お姫様抱っこされた。見えないけどこの体勢はわかるよ。

「くっ……、重っ……」

今小声で言ったな？ 声から察するにテオルだな？

でもどうして人型に。さっきまでの姿やめたの？ あれ？ って  
いうか二人にどうやって増えたの？

それともどっちかは偽物？ 今私をお姫様抱っこしてるテオルは  
本物？ ダメだわからなくなってきた。

「テオル……なの……？」

不安になりながら尋ねる。偽物だったらどうしよう。テオルの偽  
物ってなんだ。ていうかもう、テオルってなんだ。

「前から馬鹿なことばかりすると思っただけが……」

すぐそばから呆れたような声が聞こえる。私に抱いている印象は  
どうなってるか聞いただいたいことを言いだしてきた。

「どうすれば古龍と幼馴染を勘違いできるんだ……！」

一瞬、言われたことがよく理解できなかった。

「え？ いや……、あれ？ だって……、んんん？」

え？ でも、いや、ほら。

だってほら！ 日ごろほら、炎王龍の化身なのだーとか真の力がー  
とか言ってたじゃない。言ってたじゃない！

「言いたいことは山ほどあるが、今はとりあえずこれを飲め！」

「へ？ うひゃっ」

何かを持つとうとして体勢を変えたのだろう。急に半分落ちそうな  
動きは怖いからやめてほしい。

そのあと何かをお腹の上に置かれた。瓶？ かな。

まだ視界が少しぼやけているけど、瓶が2本、お腹の上にある。

「なにこれ？」

「苦いだろうが全部飲め」

「……え、ほんとになにこれ」

苦いって何。黄色いのと、白いの？ オレンジジュースとミル  
ク、ってわけじゃないよね。

「拒否するなら無理やり飲ます。……、口移しをしても飲ます」

「全力で飲み切ります」

今までにない強引な態度である。なんの飲み物かわからないけど飲み切らねばならぬこれは。

うええ……、白いのすごい苦い。そして飲めば飲むほど背筋に冷たいものが走る。

苦いわ気味悪いわ、なんだこれ。

次に黄色いのを飲む。

あ、今度は甘い。っていうか甘すぎる。なにこれ甘すぎる。この黄色はひたすら甘い。

こんなのを飲ませてなんだというのか。

「よし、飲み切ったな」

「本当になんなのこれ……」

だいぶ視界も戻りつつある。めちやくちや近くにテオルの顔があつてちよつとびっくりした。いや、まあ声の聞こえ方からすごい近くってわかつてたけども。そりやお姫様抱っこだとそうなるのはわかってたけど。

あと腕プルプルしてませんこの人？ 落とさないでね？ 怖いよ？

「おいっ！ オメーら早くずらかれ！ さすがに古龍相手におれだけじゃ厳しーんだよ！」

「ナナリの足がひどい状態なんだ」

「担いで走れ！」

「重くて無理だ！」

重くないから、と言いたいけど、テオルには重く感じてしまうか。本の虫だった人だしね。厳しいよね、うんうん。とはいえ失礼極まりないと思う。

気づけばいつの間にか熱さが気にならなくなっていた。足は痛いままだけど。熱気は気にならない。さつきまで汗が止まらないほど苦しかったというのに。

「っーかあの2人はどこ行ったんだよ！」

「わからん！」

あの2人？ 他にも誰か来てるのだろうか。

というかテオルはなんでここにいるのだろう。ドンドルマに置いてきてしまったのに。

「とにかく少しずつでも、こっから離れなッ！ こいつはおれが止めるッ！」

「ああー！」

ほうき頭は古龍と対峙していた。

あの人も何故ここで戦っているのだろう。あの人が受けていた依頼は竜の狩猟だ。古龍が相手ではない。

私が勝手に火山に入ったから、だろうか。そうとしか考えられない。迷惑をかけたばなしだ。

テオルだけでなく、あのハンターにも迷惑をかけていた自分に呆れる。

ハンターが目の前の古龍を睨みながら声をあげた。

「相手が古龍だろうと、おれの目が黒いうちはあいつらに手を出させねーぜ！ じゃねえと、おれは貸しを返せねークソツタレになっちゃまうからな！」

貸し？ 何か貸しなんてあっただろうか。

『本当ならきつとあのままタンジアで、塔のあいつを思いだしては怯えてたかもしれねえ……。だからよ、オメーらには感謝してるんだぜ』

バルバレで言われた言葉をふと思いだした。

貸しとはあのことなのだろうか。あれは私が勝手に利用しようとしていたことだ。そのことをここまで引きずらないでほしい。罪悪感が大きくなる。

あの姑息な発想のせいで、こうして古龍と対峙させてしまっているのが苦しい。

「ナナリ！ 戻ったら今回ばかりは色々文句を言わせてもらおうぞ！」

「なんでここに……。それにあの人も、なんで……。貸しなんてないよ。うなものなのに……」

助けに来てくれて嬉しい。嬉しいけど、自業自得な面を思いだす



と、こんな状況下に来させてしまい申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

落とさないように必死なのだろう。テオルは震えながらも少しずつ歩みを進める。

私を置いて逃げれば、テオルは安全な場所までいけるだろうに。

「俺も、不思議だ」

どうやってここにきたのか、どうして私を置いていかないのか、どれだけ考えてもわからない。テオルも自分の行動がわかっていないのだろうか。

背後から響く怒声や爆音に背を向けながら、テオルが言った。

「なんでここまでナナリに恩を感じてるやつがいるのか、不思議でならん」

あ、そっち。

たしかにそっちも不思議だ。トラウマと対峙させたことに恩を感じるなんて、そしてそんな恩を返すために古龍と戦うなんて、どうかしている。

「それもそうだけど、テオルもなんでここに……？ どうやって火の国まで来れたの？」

「ああ、それは俺が依頼主の代理でここに来てるからだ。依頼主の代わりに、今回の依頼の達成を見届けるためにな」

代理？ 依頼主？ なんの依頼なのだろうか。というかどうやってそんな依頼主と知り合ったのだろうか。

「ギルドが一番速い船を出してくれた。変人とばかりつながりがあると思っていたが、いったいいつの間にかギルドの重鎮と知り合ったんだ」

「……へ？」

ぎるどのじゅうちゃん？ 重鎮？

偉い人ってことだよ。そんな知り合いなんていないよ。どういうことだ。

「いや、知らないけどそんなの。それに依頼って何。ちよつとどういうこと」

「それは」

どんどんと体力が戻っている。少し前まではぼろぼろだったのに。だがそのおかげで聞きたいことを一気に聞くことができる。いや、まあ一気に聞いたら答えずらいだろうけど。

テオルが答えようとした時、ほうき頭の声が聞こえた。

「テメエ!! くそっ!! そっち行った! なんとか躲せッ!」  
「なっ!?!」

その言葉通り、炎王龍がこちらに向かって走ってきていた。

躲せて、どうしろと。近づいてくる巨体に思わず小さな悲鳴をあげてしまう。

「ひっ」

「ヌハハハハハ! 我輩ピンチに華麗に参上! と同時に華麗な乗りを披露!」

え。

炎王龍が一瞬苦し気に呻いたと思つたら、その背中におっさんがいた。炎王龍が鬱陶し気にもがきだした。

貧乏ハンターじゃない? あれ。

「ヌツハアアツ!! 思つた以上に熱い痛い! 我輩火傷しちゃうんじゃないコレ!?! ちょっとキツイから背中から離脱!」

「どこ行ってたんだよオメーはよオ!!」

「我輩この火山に来るのは久々なのだ! 火山は受諾契約金が高くて払えないからな!」

間違いなくタンジアの貧乏ハンターだ。

なんでここにいるのだ。お金がなくて依頼を受けれないってわめていたのに、どうしてここにいるのだ。

炎王龍が背中から飛び退いた貧乏ハンターに身体を向ける。貧乏ハンターは何か飲んでる。黄色い飲み物? さっき私が飲んだ奴と同じ? というか飲んでるのは危ないのでは。

「貧乏ハンター! 危ない!」

「貧乏ハンターって我輩か!? なんだその呼び名は! 我輩は教官! 孤高の教官、もしくは鬼教官と呼ぶのだ貴様!」

呼び名なんて今はどうでもいいっての。炎王龍がものすごい勢いで貧乏人に向かって走りだした。さっきは奇襲で止めれただろうけど、正面からはきつと無理だ。

「我輩を舐めるな! ジャンボ村の我輩の門下生が炎妃龍を撃退したのだ! その教官の我輩に! 同じことができないわけがないのだ! 又ハハハハハハ!!」

相変わらずの訳の分からない笑い声をあげながら、グルンとすごい回転して避けながら斬りつけた、と思う。なんかよくわからない。何あの人。ただの暑苦しい貧乏人だと思ったら、実はすごい人なの?

「やるじゃねーか! 今度は逃がさねーぞクソ古龍ツ!」

「又ハハハハハ! 又ハハ……、ごほつ。ちよつと粉が口に入った。ごほつ」

「しまらねーぞおっさん……」

すごい人なのかも、と思ったがやっぱりそうでもない気がしてきた。割と本気でむせてる。けどなんであの貧乏人もここにいるのだ。

「貧乏ハンターもどうして……」

「貴様ア! 我輩を呼ぶならせめて教官と言え! それに言っただろう!」

再び迫りくる攻撃を躲しながら、応戦しながら言ってきた。

「我輩は恩義に厚い男であると! 恩返しに期待をしておくのだとも言っただはずだ!」

確かに言っていた気がする。けど恩なんて、あの時払ったお金のことだろうか。あんな金額の恩でこんなところまで

「いえ、あの人はこの依頼の報酬に目が眩んだだけの人よ」

「わわっ?!」

いつの間にかテオルの横にまた別の人がいた。この人は、ドンドルマのアリーナ住民……。

「アリーナ住民の人……。依頼ってなんですか？」

「なにその呼び方……。テオルさん、私が運ぶわ」

「ああ、頼む」

つい心の中での呼び方を使ってしまった。だって名前教えてもらってないし仕方ないじゃない。というか依頼ってなんだ。あの古龍の狩猟依頼とかだろうか。

テオルから私をアリーナ住民が受け取る。

ちよつと抱えなおすわ、と言って抱え方を変えられた。

「え、ちよつと、これはダメ！ この抱え方はダメです！」

「ごめんなさいね。不本意だけど、この抱え方が私たちは一番得意なの……」

私の背中がアリーナ住民のお腹の位置に。私の頭が彼女の胸の位置に来ている。そして膝の裏に手を回されて抱えられている。

簡単に言うとおれだ。小さい子におしっこさせる抱え方だ。

羞恥心がとんでもない。

「卵を運ぶ抱え方じゃないと、早く走れないのよ……」

「わけわかんないんだけど！」

「ナナリ、その……。強く生きろ」

「うるさいー！」

何故こんな辱めを受けないといけないのだ。あれか、自業自得の罰なのか。だからってこんなのはあんまりだ。

そんなやり取りをしている間も後ろでは激しい戦いが広げられている。

なんだか緊張感が抜けてしまっていたが、そうだった。今はまだ危険地帯なのだ。

「テオルさんもはやく移動するのよ。いくら相手が弱っている個体でも、危険なのは変わらないのだから」

「先に行ってくれ。見定めたいのだ……」

「テオル？ こんな時になにを……」

「頼む」

何を言ってるのだ。見定めるとして何を。却下したいけど、何か大事なこともかもしれない。また勝手に決めて迷惑をかけるわけにはいかない。だから強く言えない。

「……わかったわ」

アリーナ住民さんはそう言っただけで私を抱えながら移動しだした。

マジで案外速い。

すごい辱めを受ける抱え方だというのに。やっぱりわけがわからない。

「アリーナ住民さん……、お姉さんもどうしてここに。それに依頼って言うのもなんなんです……？」

「もう好きな呼び方でいいわ……。今ギルドでは極秘で依頼が出てくるの。何故極秘なのかは深く探っちゃだめよ！ あなたの身が危ないわ！」

またそういう怖いこと言う。

「とにかくその依頼、依頼主が2人いるの。1人はあなたの知っている人で、もう1人は……、ある組織の裏ボスよ」

知っている人？ 依頼を出せそうな人で知っている人といえば、里長とか？

そして裏ボスってなに。ある組織ってなに。また組織か。

「そして依頼の内容がたまたま同じになったのよ。ある少女を助け出すっていうね」

「え……」

これは、もしかしなくても私のことだろう。

古龍の撃退ではなかったのか。

「依頼主は美食家を名乗る人よ。あなたに何度も助けられたから、今度は助ける側になりたいんですって。そのため依頼料をはずんで、それでの又ハハの人が喜んで飛びついたの」

美食家……。

そんな知り合いはいませんね。  
いや、もうわかつているけど。

あの悪食家なのか。

「裏ボスについては詳しく話せないわ。あなたのためにもね。ただ、あなたのような組織の幹部候補を助ける意思は強いみたいよ。出張支部からの強い推薦もあったし、あなたの胆力にも光るものを見たらしいの」

「全く見当もつきま……」

出張支部。推薦。組織。

……。

『やっぱりアンタら最高の逸材だぜ。どうだ？ 俺たちの組織に入らないか？ この出張支部のやつらはみんな喜んで迎え入れてくれるぜ。本部に強く推薦してやつても』

『入りたくならなくてもいつでも俺たちを頼れよ！ 俺たち、卵シンジケートをな！ 本部にもアンタらのことしつかり伝えておいてやるからよ！』

あの卵信者だ……。

「……、お姉さんも卵信者なんですわね」

卵を抱える走り方がいいとか言っちゃやうあたりきつとそうなのだろう。

「私は巻き込まれただけよ……。気づいたら組織に何故か入れられていたの……。とにかく、そんなわけで私もこの依頼に出向いたの。組織からね」

口ではそういつてるが果たしてどうだろうか。卵の抱え方とか言っちゃってたもの。羞恥心がすごかったけどすごい安定してる走りだよこれ。すごい染みついた走りだよこれは。一朝一夕じゃできない技だ。

しかし、裏ボスは謎だけど、あの卵信者たちもこの依頼に関わっていたのか。

どうしよう。

ほとんどが勘違いとかだ。私には覚えのない感謝からの恩返しと

かだ。

やはり罪悪感しかない。

「私を助けるためにとって……」

「でもまさか、こんな状況になつてたなんてね。ドンドルマを襲った炎王龍が火山にいる可能性があるって情報から、今回の依頼がなされたのに」

まさか人身御供の風習に巻き込まれてたなんて、とぼやくように卵信者の女性は言った。

ドンドルマを襲ったやつだったのか。追い返されたやつが火山に行つたのね。

「つていうかももう結構離れてるし、テオルたちを呼び戻しませんか？

古龍の撃退が依頼じゃないのなら」

「可能であれば狩猟ね。あの炎王龍はドンドルマを襲った攻撃性が高い古龍よ。せめてまた追い返すくらいまでやらないと、村まで追ってくるわ」

追い返すまでつて、そんなこと出来るのだろうか。ほうき頭も貧乏ハンターも、意外にすごい人たちっぽいけど、相手は旧き時代からの王だ。

私が不安に思っていることに気づいたのだろう。

「大丈夫よきつと。おそらくすでにあの古龍は弱つてるはずよ」  
「え」

「ドンドルマで痛めつけられて、そして逃げた先がここよ。大して時間もたつていない。傷はまだ癒えてないはず」

だからベーすキャンプで3人の帰還を待つように、と言われた。

ベーすキャンプつてどこだろう。とにかく卵信者の女性に任せてたら大丈夫だろう、つていつもなら流していた。この考えが今回の危険に繋がつたのだ。ちゃんと、聞いていかないで。

そう決心して教えてもらったベーすキャンプ。

ハンターが使う狩場での拠点のようなものだと言明を簡単に受けた。今回は任せてても大丈夫だったっぽいね。けどちゃんと今後も今の考えをしっかりと持とう。もう怖いし。

「ところであの」

「なにかしら？」

「おんぶとかにしてももらえませんか？」

「このまま行くわね」

おんぶは嫌なのか。運ばれてる身でエラそうなこと言えないけど、この運び方は本当にやめてほしいところだ。



## 古代衣装を纏つてもう一度

「今回はまことに申し訳ありませんでした」

テオルたち3人が戻ってきたのは夜になってからだだった。炎王龍を追いやることは成功したらしい。

簡単に手当てをしてもらい、少しは歩いたりできるようになった私は、出迎えて早々土下座をした。

「又ハハハハ！ 我輩は謝られる覚えはな……、いや、ある！ 札束ビンタで危うく開けてはいけない扉を開けかけたのだ！」

「村の連中に連れてかれたんだろ？ あんまり気に病むこたあねーぜ」

「……」

3人の反応が見事にばらけた。

札束ビンタは仇討ちだから、今回の謝罪とは関係ないです。

村の連中に連れていかれはしましたが、最初は私も乗り気だったので、私にも原因があったりします。なので気に病みます。

無言怖い。

「火の国には行くなと言われていたのに勝手に行き、村にいるように言われたのに勝手に火山へ行き、そして死にかけていて本当に申し訳ありませんはい」

改めて今回の自分の失態を思い起こせばひどいものである。知らなかったとはいえ、ひどいありさまである。

「……………」

さつきからテオルが無言である。

こんなテオルは初めてだ。どうすればいいのだろう。

「まー、無事だったからよかったじゃねーか。な？」

「ウムー 我輩も久々の火山の狩猟ではしゃげたので良し！」

この2人にも今度改めて他の件で謝らないと。

ほうき頭さんには私の勝手な思惑でトラウマと対峙させたことを。

貧乏ハンターさんには……、この人に謝る要素あんまりくない？  
今回の件も依頼の報酬目当てらしいし。でも感謝はしてます本当  
です。

「……………」

そして無言で腕を組んでいるテオルである。

まだご立腹のようだ。もしかして他にも私は何かやらかしていた  
のだろうか。

心当たりはないけどきつと何かがあるのだろうか。

思いだそうと頭を必死に働かせるけど、全然出てこない。無言の空  
気が重い。どうしたらいいのだ。

「少し二人で話をしたい。外してもらえるか」

ようやく言葉を発したら退席願いだった。その言葉を聞いて、ハン  
ターの2人が出ていく。ちなみに卵信者女性はすでに外にいる。

「あいよ。すっかり怒られるんだぜ」

「では我輩は外で何か次のビッグビジネスでも考えることにしよう」

「ハンター業がんばれよおっさん……」

あの貧乏ハンターは堅実にやればちゃんと生活できる気がする。

けどあの性格がダメなんだろうな。

まあ今はそんなことより、目の前のことだ。

私はいったい何を言われるのであろうか。

「……、ナナリは馬鹿だ。それにいつも間が悪い」

間が悪いって何。でも今回は何も反論できない。

いくらでも文句を受け付けよう。

「ひとりでこんな場所まで来て、何か騙されて生贄に選ばれるんじや  
ないかと心配していたら本当に生贄にされかかっているとは」

「返す言葉もありません……」

「おまけに金のほとんどを持っていつてくれたおかげで、すぐに追い  
かけることができなかつた」

「すみません……」

追いかけれられないようにするため、少しだけ残してほとんどの金額  
を持っていったのだ。

「少し目を離すと何をやらかしているのか……、昔からそうだった」  
私も常々あなたに同じことを思っています。

しかし同じことを思っていたとは。

「昔も、何かやらかしてましたでしょうか……」

「ああ、里の外に大型の竜が我が物顔で居座っていた時期、ナナリは勝手にひとりで外に出たりしていた」

「そんなことあったっけ」

「あったのだ……。自分は存在感薄いから気づかれない、と意味の分からないことを述べながら何度も何度も……。何故か卵を毎回持ち帰ってきていた」

正直そんな時期は覚えていないけど、実際にその発言は言ってしまったてそうだ。今回の件も、もし小型が残っていても、同じようなことを言って火山に行こうとしていたと思う。

あと卵って単語聞くと思わずあの組織が頭によぎるからやめてほしい。

「運がよかったのか、襲われたことはなかったのだろう。怪我をして帰ってきたこともあったがガーグアに啄まれた程度の怪我だった」

まあガーグアの卵取りには自信があるからね。ガーグアの攻撃なんてかすり傷だよ。目をちゃんと守るのがコツだよ。

「……、危険なのに何度も外へ出るナナリが心配だった。何度止めても気づけばいなくなっていた。そんなナナリを、危険から守れるようになりたかった」

「そんなに心配をかけていたとは……。申し訳ないです……」

昔の私はどこまで能天気だったのか。心配されまくっていたのに行動を改めないとは。

今回の私も同じことをしている自覚はあるけど、ついそう考えてしまった。

しかし、守れるようになりたいって言われると、心配からってわかるけども、なんだか気恥ずかしい。そんな柄じゃないのだ私は。

「強くなるうと決めて、まずは知識をつけようと本を読み漁った」  
知識からなのか。

そこですぐさま体を鍛える、とかじゃないんだ。ちよつと突っ込みたかったけど我慢する。

「そして古龍に、炎王龍になりたい、なろう。そう、思った」

「ちよつと待って」

これ何の話だっけ。

知識からつけるって言うのは別にいいよ。賢く強く、理想だものね。

そして何故そこから古龍になるって考えに至ったのだ。全然理解できない。

っていうか私が怒られる話だよな。なんでテオルの過去の決意が話されてるの。その決意もよくわからない方向に転がっていったけど。

「えつと、なんで急に古龍が出たの？」

「知っているだろう。古龍は1体でもそこらの竜が逃げ惑うほどの強さをもつ存在だ」

「えーつと、つまり、古龍は強い。そんな古龍みたいになるーって感じ？」

「古龍の炎王龍に、だ」

こだわりはあるんですね。

何故守るために強くなる。から妄想へ逃げてしまったのか。なんというか、恰好がつかない。さっきの気恥ずかしさはなんだったのか。

「今回のナナリの暴走で、炎王龍たらしめるための、難解な物言いをしようとしてしまう俺にも落ち度があると思えた」

「今回のは、私が完全に悪いよ……」

「……、いや、俺も原因だ。長い付き合いがあるというのに……」

日ごろ意味不明な物言いだとは思っていた。けど今回は行くなとしっかり言ってくれていた。理由も聞かずに、勝手に行ってしまった私が完全に悪い。

「ナナリが馬鹿だとわかっていたのに……、ナナリの行動を読めなかった俺の責任だ……」

腹立つこいつ。

遠回しにネチネチ責めるのが趣味なのではないだろうか。いや、責められるのは仕方ないけども。

「だがもう、俺は古龍を目指そうと思わない」「？」

難解な物言いだと馬鹿な私に変な暴走をするからやめる、ということだろうか。こんな形で真人間に戻ろうと決意するとは、気持ちはずな雑なんです。

いや、ちゃんと理由を聞いておこう。こうやって思い込んで決めてしまったのが今回の始まりでもあるのだ。少しずつでも直していかないと。

「えっと、なんでまた」

「……」

聞くと、答えづらいのか視線をそらした。やっぱり私の理解力不足が理由なのだろうか。

「……、古龍は強い。1体で生きていけるほど」

やや間を置いて、話しだしてくれた。

「古龍が人目についたとき、いつも単独だそうだ。古龍同士で縄張りがあるのか、ただ群れる必要がないほどの力を持っているからなのか、とにかくいつも1体なのだ」

「はあ……」

突然古龍に関する授業が始まったも、生返事しか返せない。

「だが、炎王龍は……、雌の個体に、炎妃龍がいる。つまり、なんらかの場では2体でいるのでは、互いに助け合っているのでは、と考えたのだ」

「ほへあ」

「だから、炎王龍になろうと思った……」

「ははあ……」

炎王龍にこだわってるのは番いがいるからですか。こだわった理由が意外にも青臭い感じがする。青春ですな。若いっていいものだ。

同じ年だけど。

正直とんでもないことを言われてる気がするけど、気づかないふりをすることにした。

「だが今回、炎王龍とハンターたちの戦いを見て、そんな考えは所詮妄想だと気づかされた」

「……」

「ドンドルマでも、今回の戦いでも、炎王龍を助けようとする存在はいなかった。炎妃龍はどこにもいなかった。現れなかった」

番いの火竜は、片方に危険が迫ると助けに向かうとテオルに聞かされたことがある。モンスターにもそういう助け合う関係がある。しかし古龍はそうじゃなかったのか。

「雌雄が明確に存在する古龍でも、結局は1体だけで生きているということに気づかされた」

「……」

「だから、炎王龍になるのが怖くなってしまった……。俺は、ナナリと共に歩くことができる、俺で居たい」

ね。……いや、そもそも炎王龍にはどうあがいてもなれないと思うけどね。

またまたとんでもないことを言われてる気がするけど、気づかないふりをしようと務めた。少し顔が熱い。火山のある国はやっぱり暑いのだ。

「え、えと、その……」

「あ、ああ……」

テオルも今更自分の発言のとんでもないことに気づいたのか、ぎこちない。

ギクシヤクする。

この空気で気づかないフリなんて、もうできそうにない。

でもどうしよう。

今までそんな話、私には無関係だと思っていたのだ。まだまだ先のことだと思っていたのだ。

なのに突然目の前に現れるとあれだ。  
困る。

ましてやその相手がずっと一緒にいた相手なのだ。どうしようどうしよう。

まともに顔を見るのが難しい。

「……………あー、ナナリ」

「は、はいー!」

「ふ、普通は、こんなこと聞くのはおかしいと思うが、相手がナナリだからな。念のため聞いておきたい…………。正直聞くのがかなり俺も辛い」

「な、なんでしようか…………!」

滅茶苦茶ギクシヤクする。いつもの空気が全くない。

「い、今の言葉の意味、伝わっているだろうか」

そういうの聞くのってどうなの。なんかこう、こう…………ロマンチックが一気になくなるんだけどそういうの。いや、もともとロマンチックさなんてなかったけども。話題が古龍だしね!

「は、はい…………。その、番い、的、な、アレ、ですよね」

「あ、ああ」

おかしい。テオルと私の間に流れるこの空気。こんな空気、私は知らない。いつもはもっと気軽なものだ。

「テ、テオル…………、えつとですね…………」

「なんだ…………」

うやむやにしてはダメだろう。正直な気持ちを言わねばなるまい。でも正直な気持ちなんてあれだ。困惑しているという気持ちが大きい。

嫌いではない。そういう関係に見れない、と断言できるわけでもない。

そういう恋とか愛とか、番いとか、突然すぎて困惑なのだ。

っていうか番いって、私たちは動物か獣なのか。

番いと言いだしたのは私のほうだ。けど普段なら、テオルが言いだしそうな単語だ。

そう思うと、なんだか力が抜けた。そうだ、相手はテオルだ。変に肩ひじ張らずにいこう。

「番いになるのはお断りです」

「……………」

お断りだ。傷ついたような表情が一瞬見えた気がした。少し心が痛む。だけど返事に変わりはない。

「番いって、人間同士で使うものじゃないでしょ。古龍に、もうなる気はないんでしょう？ もともとなれるものじゃないけどさ」

人間同士ならこう、別の言い方でしように。こう、アベックとか。

「それでは……………」

「あ、番いは絶対お断りだけど、アベックになるかどうかは、まだ返事は待ってほしい、かも」

「アベックとききたか…………。理由を聞いていいか」

うやむやにしてはダメだと思ったけど、心に浮かんだ通りの答えを返すのだ。それがうやむやな答えでも、私の考えた答えなのだ。

「正直突然すぎてわからなすぎるから。今はテオルをそういうふうには見れそうにないから」

「……………そうか」

やや気落ちしたような気がする。断られたと思ったのだろうか。断ったつもりはないのだけど。

「だから、そうだね…………。里に戻るまで返事は待ってほしいかな」

「里に戻るまで？」

「うん、里に戻るまで。だってさ、結局今回も古代服、捨ててないんだよね…………。だからまだ旅が続くから、それまでじっくり考えるよ」

「…………。古代の衣を、捨てるというな。…………、長い旅になりそうだな」

「まあそうかもね。でも、今度はちゃんと二人で話し合いながら、行先を決めて行こっか」

「…………ああ、そうだな。そうしようか」

言ってしまうと答えの先延ばしであるけど、急いで出す答えでもない。と思う。



旅の最初のうちはさっさと任を終えたら、こいつとはすぐに距離を取ろうと考えていたけど、今はそういう考えはない。ちよつとずつ考え方が変わっていくのだろう。急いで出した答えが変わってしまったは大変だ。だからしつかりと、考えて考えて、それから答えを出そう。

「とりあえず行先を決める前に色々やることがありそうだね」

「何かあったか。……いや、違うな。何かあったっけ」

ひよつとして口調を普通にしようとしているのだろうか。突然普通にされると笑いそうになる。すごいぎこちないし。

「普段通りの痛々しい話し方でいいよ。そっちのほうがテオルらしいしね」

「そ、そうか……。待て、痛々しいとはなんだ痛々しいとは」

「やることはあれだよあれ！ 今回いろんな人に助けられたから、お世話になった人へのお礼参り！」

「……、握りこぶしを見せながらお礼参りと言われると別の意味に聞こえるんだが」

お礼参りに別の意味なんてあるのか。

とにかくお礼をちゃんとしないと。今回助けてくれた人たちはみんな、この旅で関わった人たちだ。旅の恥はかき捨て、という言葉があるけど、恥知らずにはなりたくない。

火山で絶望してた時は、なんて無駄な旅路だったのだろうと思ってしまった。けど全然無駄じゃなかった。何が無駄か、無駄じゃないか、なんてわからない。とりあえず、関わることにはちゃんとしていこう。そのためにも、ちゃんとお礼をするのだ。

「とにかく今の方針はこれでいい？」

「ああ、いいだろう」

もう完全に普段の痛々しい話し方だ。この空気、やっぱり私とテオルは、今はまだ、この雰囲気がちようどいい。

「そのあとは、どこ目指そうか。やっぱり塔？」

「そうだな……。ゆつくり考えようではないか。金も余裕がないからまずは稼がなくてはならん」

「そうだった……」

短期の働き口でも探すことから考えないとだろうか。そして溜まったお金でどこかに旅立つ。思った以上に長い旅になりそうだ。

「まあ、その……、えっと、一緒に歩いてくれるんだよね。これからも、よろしくね」

テオルの言葉を一部借りて使う。詩的な感じだけど、恥ずかしさをぼかすのにちょうどいいかもと思ったからだ。けどこれ滅茶苦茶恥ずかしいわ。

「ふっ、よろしく頼む」

その動作、滅茶苦茶腹立つわ。

まあこれがテオルなのだ。調子が戻ってきたと言ってもいい。変な空気より断然いい。

お礼参りのあとの目的地は不明だけど、どこであろうと一緒に頑張っている。

「どんな甘酸っぱい会話が起きるかワクワクしていたが、少し腹が立ってきたぞ我輩。我輩は未だに独り身だというのに……、生意気である！ 許さーんーん！」

「落ち着けよおっさん見つともねえ……」

「確かに独り身には正直辛いやり取りねあれは……」

外からハンターたちの声が聞こえてきた。

聞かれていたようだ。

あれだ。

お礼参りやつぱりやめたくなくなった。

「まずは外の連中に礼をしないとな」

「なんか素直にしたくないんだけど……」

「いいや、ちゃんとするぞ。旅の目的地はゆつくり決めていいが、済ませれることは早く済ませるぞ。返事が遅くなりすぎるのも嫌だからな」

「……くっそ恥ずかしいんだけど」

「ふん、いいから礼を言いに行くぞ」

「はい」

なんだかんだで旅は急かされるかもしれない。返事を早く聞くために。

それに対して、気恥ずかしさと嬉しさを感じてしまうあたり、私はこれからもこの幼馴染と一緒にいるだろう。

「ありがとう」

「外の連中に面と向かって言うのではないのか」

「もちろんちゃんと言うとも」

ただその前に、痛々しい幼馴染に言いたくなっただけだ。

なんでこんなのと一緒にいなきやいけないんだろう。旅の最初はそう思っていたのになあ。

これからも一緒にいよう。この新しい旅の始まりではそう思ってしまったている。

そんなことを考えている間に、テオルが立ち上がった。もう外に出ようということなのだろう。私も新しい旅の始まりのために、ちゃんとお礼を言うために、外に出よう。

ゆえに、立ち上がるうとした。しかし 足が痺れて 動けない

「ナナリ、立たないのか」

「テ、テオル……」

心機一転の行動がまさかの足の痺れで阻害されるとは。幸先が悪すぎる。

「足、やばい」

「まだ痛むのか!? すぐに薬を探してくる!」

「あ、ちが……」

テオルが外に出て、私の足がひどい状態だと説明しだした。3人もあわただしく動き始めた。

ふむ。……、ただの足の痺れって言いだしにくい。

お礼だけでなく、謝ることもまた増えたなあ。

足の痺れが収まったら、私もお礼参りで忙しくなりそうだ。

「テオルー！ 戻ってきてー！ 大丈夫だからー！」

その忙しさが今から楽しみである